

兩宮山古墳

2005年

岡山県赤磐市教育委員会



両宮山古墳群（西から）



1両宮山古墳（東から）



2両宮山古墳墳丘（北西から）

兩宮山古墳

2005年

岡山県赤磐市教育委員会

表紙題字 赤磐市長 荒鶴 龍一

序

岡山県の東部に位置する赤磐市は、赤磐郡山陽町・赤坂町・熊山町・吉井町が合併して平成17年3月に発足した新しい市です。市域には大小の平野と丘陵が広がり豊かな自然に恵まれ、果樹に代表される農業を中心に商工業も発達しています。

吉備地域の東部に位置する赤磐市には、古くからの歴史を反映して、数多くの文化財が所在しています。その代表となるのが国史跡両宮山古墳・備前国分寺跡・熊山遺跡であり、それぞれがこの地域の歴史を物語る重要な遺跡であるとともに、広く古墳時代史や古代史において重要な資料として注目を集めています。

本報告書は保存のための資料の収集を目的として平成14・15・16年度の3ヶ年にわたって実施した、両宮山古墳の調査の成果をとりまとめたものです。調査によって、現在見られる内濠、周堤（中堤）の外側に外濠が所在し、本墳に広大な墓域が設けられていることが明らかになり、また、中堤の構造が明らかになるなど大きな成果を得ることができました。

整った墳丘と水をたたえた濠の存在によって注目を集めながら、情報が少なかった本墳について、多くの資料を提示することができ、また、調査が行われることが少なく、不明な部分が多い巨大古墳の構造を解明する手がかりの一端が得られたと言えます。

この資料が両宮山古墳の保存と活用、そして、地域史研究ならびに古墳研究に寄与すれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して多々ご協力をいただいた地権者の皆様ならびに地元の方々、調査をご指導いただいた第二次山陽町遺跡整備委員会の先生方、文化庁をはじめ関係機関の方々に、厚くお礼を申し上げます。

平成17年9月

赤磐市教育委員会

教育長 渡辺勝也

例　　言

- 1 本書は国史跡両宮山古墳および和田茶臼山古墳の調査報告書である。
- 2 両宮山古墳は岡山県赤磐市梶崎790他に所在する。
- 3 調査は文化庁から国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金）を得て山陽町教育委員会（平成17年3月7日以降は赤磐市教育委員会）が実施した。
- 4 調査は平成14・15・16年度の3ヶ年にわたって実施した。
第1次調査は平成15年1月29日から3月24日まで実施し、240m²を調査した。
第2次調査は平成16年1月15日から3月10日まで実施し、306.5m²を調査した。
第3次調査は平成17年1月11日から3月16日まで実施し、310m²を調査した。
- 5 第1次調査を塩見真康、第2次調査を宇垣匡雅・塩見・大熊美穂、第3次調査を宇垣・大熊・有賀祐史が担当した。
- 6 調査にあたっては第二次山陽町遺跡整備委員会をはじめ文化庁文化財部記念物課・岡山県教育庁文化財課から指導および助言を得た。
- 7 整理作業は宇垣・大熊・有賀が担当し、伴祐子の協力を得た。
- 8 本書の執筆は宇垣が担当した。
- 9 本報告書に掲載した出土遺物・実測図・写真等は赤磐市教育委員会で保管している。

凡　　例

- 1 北方位は磁北を原則としたが、地形図（図5・6・35・36・61・62）では座標北を用いた。
- 2 両宮山古墳の墳丘以外の部分については岡山県史編纂室1986「付図3両宮山古墳群」「岡山県史第18巻考古資料」岡山県を用いた。そのため国土座標値は日本測地系（平面直角座標V系）を用いた。
- 3 本書に用いた高度は海拔高である。基準点の相違のため、本書で用いた高さは岡山県史編纂室1986記載の数値よりも34cm高くなる。
- 4 遺構図面の縮尺は1/60、遺物図面の縮尺は1/4を基本とした。
- 5 図1は国土地理院図発行の1/200,000地図「姫路」「高梁」「岡山及丸亀」「徳島」を複製・加筆したものであり、図2は山陽町作成の1/2,500地図（平成7年）を複製・縮小して作成した。

目 次

卷頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過と体制	1
(1) 調査の経過	1
(2) 調査および報告書作成の体制	3
第2章 古墳群の位置と環境	5
第3章 既往の研究と古墳の現状	12
1. 既往の研究	12
2. 古墳の立地と現状	14
(1) 立 地	14
(2) 古墳の現状	16
第4章 調査の概要	19
1. 両宮山古墳の調査	19
(1) 外 漆	19
(2) 中堤・内濠	48
2. 和田茶臼山古墳の調査	63
(1) 内濠・外濠	65
(2) 和田茶臼山古墳東側	79
第5章 総 括	81
1. 調査の成果	81
(1) 築造時期	81
(2) 墳丘と外部施設	81
(3) 築造の規格	87
(4) 和田茶臼山古墳	89
2. 両宮山古墳群の意義	90

図 版

報告書抄録

図 目 次

図1 両宮山古墳群の位置 (1/200,000) -----	5
図2 両宮山古墳周辺の古墳 (1/12,000) -----	7
図3 廻り山古墳の遺物 (1/3・1/2) -----	9
図4 両宮山古墳墳丘 -----	13
図5 両宮山古墳群 (1/2,600) -----	15
図6 トレンチ配置図 (1/1,800) -----	18
図7 トレンチ20 (1/60) -----	23・24
図8 トレンチ19 (1/60) -----	23・24
図9 トレンチ18 (1/60) -----	25・26
図10 トレンチ10 (1/60) -----	25・26
図11 外濠トレンチ出土遺物 (1/4・1/2) -----	27
図12 トレンチ8 (1/60) -----	28・29
図13 トレンチ1 (1/60) -----	28・29
図14 トレンチ10出土遺物 (1) (1/4) -----	30
図15 トレンチ10出土遺物 (2) (1/4) -----	31
図16 トレンチ9 (1/60) -----	34~36
図17 52地点 (1/60) -----	34~36
図18 トレンチ43 (1/60) -----	34~36
図19 トレンチ44・45 (1/60) -----	38
図20 トレンチ46・47 (1/60) -----	38
図21 トレンチ48 (1/60) -----	39
図22 トレンチ49・50 (1/60) -----	42~44
図23 トレンチ28 (1/60) -----	42~44
図24 トレンチ28出土遺物 (1/4) -----	46
図25 内濠トレンチの配置 (1/2,500) -----	49
図26 トレンチ29・30・31 (1/60) -----	50
図27 トレンチ32 (1/60) -----	52
図28 トレンチ33・34・35 (1/60) -----	54・55
図29 トレンチ36・37・38 (1/60) -----	57
図30 トレンチ39・40・41 (1/60) -----	59
図31 トレンチ42 (1/60) -----	60
図32 51地点 (1/60) -----	61
図33 内濠トレンチ出土遺物 (1/4) -----	61
図34 墳丘盛土下の遺物 (1/4・1/3) -----	62
図35 和田茶臼山古墳トレンチ配置 (1/800) -----	63
図36 和田茶臼山古墳 (1/800) -----	64
図37 トレンチ3 (1/60) -----	65
図38 トレンチ4 (1/60) -----	65
図39 トレンチ5 (1/60) -----	65
図40 トレンチ23 (1/60) -----	66・67
図41 トレンチ27 (1/60) -----	66
図42 トレンチ22 (1/60) -----	67
図43 トレンチ13 (1/60) -----	68・69
図44 トレンチ14 (1/60・1/30) -----	68
図45 トレンチ15 (1/60) -----	69
図46 和田茶臼山古墳トレンチ出土遺物 (1/4・1/2) -----	70
図47 トレンチ17 (1/60) -----	72~74
図48 トレンチ16 (1/60) -----	73・74
図49 トレンチ6 (1/60) -----	73・74
図50 トレンチ21 (1/60) -----	76
図51 トレンチ24 (1/60) -----	76
図52 トレンチ26 (1/60) -----	77
図53 トレンチ25 (1/60) -----	77
図54 トレンチ7 (1/60) -----	78
図55 トレンチ2 (1/60) -----	78
図56 トレンチ12 (1/60) -----	78
図57 トレンチ11 (1/60) -----	78
図58 トレンチ11・12出土遺物 (1/4) -----	79
図59 墳丘の復元 (1) (1/2,500) -----	80
図60 中堤の構築状況 (1/120) -----	83・84
図61 中堤・外濠断面 (1/300) -----	86・87
図62 墳丘の復元 (2) (1/2,500) -----	88

図版目次

- 卷頭図版 1 両宮山古墳群（西から）
卷頭図版 2 1 両宮山古墳（東から）
2 両宮山古墳墳丘（北西から）
- 表紙図版 両宮山古墳付近（東から）
図版 1 1 両宮山古墳全景（南から）
2 墳丘（南から）
図版 2 1 両宮山古墳群全景（西から）
2 墳丘（東から）
図版 3 1 墳丘（南西 僧前国分寺跡から）
2 墳丘（北 後円部後方から）
3 南西造り出し（南 前方部から）
図版 4 1 内濠（南東から）
2 中堤斜面（前方部南西側）（南東から）
3 中堤上面（後円部南西側）（北西から）
図版 5 1 中堤斜面（前方部前側）（北東から）
2 中堤（前方部前側）（外側 南西から）
3 中堤（前方部前側）（外側 南東から）
図版 6 1 中堤・外濠跡（後円部西外側）（北東から）
2 トレンチ 8 外濠～中堤（北西から）
3 トレンチ 8 外濠（西から）
図版 7 1 トレンチ 9 中堤盛土（南東から）
2 トレンチ 9 外濠東部
3 トレンチ 19 中堤～外濠上段底面（西から）
図版 8 1 トレンチ 20（墳丘側に19）（西から）
2 トレンチ 19 外濠（西から）
3 トレンチ 19 外濠（西から）
図版 9 1 トレンチ 18 外濠（南から）
2 トレンチ 10 外濠（北東から）
図版 10 1 トレンチ 10 中堤～外濠（北から）
2 トレンチ 10 発掘調査状況（北西から）
3 トレンチ 43 外濠（南から）
図版 11 1 トレンチ 43 外濠（西 中堤から）
2 トレンチ 43 外濠端部（西から）
3 トレンチ 48 外濠（北から）
図版 12 1 トレンチ 49 外濠（後方に中堤）（南西から）
2 トレンチ 50 外濠端部（東から）
図版 13 1 トレンチ 28 外濠
2 トレンチ 28 中堤・外濠断面（東から）
図版 14 1 トレンチ 28 外濠断面（南から）
2 トレンチ 28 外濠端部（東から）
- 図版 15 3 トレンチ 28 中堤断面（南から）
1 トレンチ 32 中堤断面（東から）
2 トレンチ 37 中堤（西から）
3 トレンチ 38 中堤（西から）
4 51地点 中堤断面（北西から）
図版 16 1 トレンチ 30 中堤（東から）
2 トレンチ 31 中堤（東から）
3 トレンチ 34 中堤（東から）
図版 17 1 トレンチ 32 中堤断面（東から）
2 トレンチ 32 中堤断面（北から）
3 トレンチ 30 中堤断面（北東から）
図版 18 1 トレンチ 36 中堤（西から）
2 トレンチ 39 中堤（西から）
3 トレンチ 42 中堤（西から）
図版 19 1 和田茶臼山古墳（東から）
2 和田茶臼山古墳（南 両宮山古墳後円部から）
図版 20 1 和田茶臼山古墳と両宮山古墳外濠跡（西から）
2 和田茶臼山古墳と両宮山古墳内濠・中堤（南から）
3 トレンチ 23 外濠（東から）
図版 21 1 トレンチ 3 内濠（東から）
2 トレンチ 4 内濠（南東から）
3 トレンチ 13 内濠（南から）
図版 22 1 トレンチ 22 外濠（西から）
2 トレンチ 14 中堤・外濠（西から）
3 トレンチ 15 内濠（南から）
図版 23 1 和田茶臼山古墳西側のトレンチ（東から）
2 トレンチ 16 内濠（南から）
3 トレンチ 17 外濠（南から）
図版 24 1 トレンチ 21 北西くびれ部検出状態（北西から）
2 トレンチ 21 北西くびれ部（南東から）
3 トレンチ 26 南東くびれ部（南から）
図版 25 1 中堤断面 1980年樋門部分の調査
2 中堤断面 1980年樋門部分の調査
図版 26 1 古墳時代の遺物
2 繩文時代の遺物
3 トレンチ 28 出土鉄錠
図版 27 1 中世の遺物
2 墳丘下採集の弥生土器

第1章 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

巨大な墳丘に水をたたえた濠と周堤がめぐる両宮山古墳は、地方にあっては数少ない巨大古墳として早くから注目を集め、1924（大正13）年に梅原末治氏によって学会誌上に報じられた。1927（昭和2）年には「環濠及塁ヲ存スル前方後円型ノ古墳ニシテ南方ニ面ス（中略）造出アリ此ノ地方ニ於ケル壮大ナル古墳ニシテ最モ善ク保存セラレタルモノノニ属ス」として、墳丘・周濠および後円墳北側をのぞく周堤が国史跡に指定され、その後1978（昭和53）年には北側に随伴して所在する和田茶臼山古墳が追加指定を受けた。ちなみに、1927（昭和2）年に両宮山古墳とともに史跡指定を受けたのは群馬県浅間山古墳、奈良県菫山古墳、同西山古墳などである。

本書で報告する両宮山古墳の確認調査は、後円部東側周堤上に位置する水田部分での民間開発に端を発する。これは周堤（中堤）部分に介護施設の建設が計画されたもので、平成14年4月に事業の実施について事業者から協議を受けた山陽町教育委員会では、当該部分が史跡指定範囲の隣接地であり周堤上にあたることを示し、事業の実施は両宮山古墳の保護・保存、また、将来の古墳整備に支障をきたすことを事業者に伝えるとともに、県教育委員会および文化庁と協議を重ねた。事業者との協議の結果、事業の実施は見送られることになったが、当該地を含む両宮山古墳北側周堤付近について史跡の追加指定を受け、そのうえで公有化をはかることとなった。

史跡の追加指定にあたっては、両宮山古墳周堤の規模・形状、また、周堤外側の様相・遺構の広がりを把握する必要があるため、国・県の補助を得て平成14～16年度の3ヶ年、3次にわたって確認調査を実施することとした。

調査にあたっては第二次山陽町遺跡整備委員会から多くの指導・教示をいただき、文化庁記念物課および岡山県教育庁文化財課から指導・助言を得た。

2. 調査の経過と体制

（1）調査の経過

第1次調査 平成14年1月に着手し同年3月に終了した。第1次調査では両宮山古墳周堤北～東部の遺構の把握と、和田茶臼山古墳の墳形確認を目的として、両宮山古墳周堤から外側にかけて4本（トレンチ1・2・8・9）、和田茶臼山古墳の周囲に5本（トレンチ3～7）、計9本のトレンチを設定し調査を行った。

両宮山古墳周堤の外側に設定したトレンチのうち、トレンチ1・2では遺構の状況を把握することは困難であった。一方、トレンチ8においては周堤の端部とみられる地山の下がりを、周堤東部に設定したトレンチ9においては大規模な溝状の下がりを検出し、周堤の外側に外濠がめぐる可能性が考えられたが、その規模や形状など詳細については2次調査に委ねることとなった。

また、現状では円ないし方墳と見ることができる和田茶臼山古墳の周囲に設定したトレンチにおいては、トレンチの多くが底面までの掘り下げが困難であったものの周濠を確認し、主丘は円形である

2. 調査の経過と体制

ことが判明した。一方、墳丘西側に設定したトレンチ6においては墳丘から離れたトレンチ西端において周溝とみられる下がりを検出し、主丘の西側に前方部等が所在すると推定された。帆立貝形古墳ないし造出しあり円墳と考えられるに至ったわけであるが、墳丘の規模や詳細な形状については以降の調査の課題となった。

第2次調査 平成15年1月に着手し同3月に終了した。第1次調査で課題となった点の解明を主目的としたため、調査域は前年の第1次調査と同じ両宮山古墳周堤北側部分から和田茶臼山古墳の周辺にかけてである。

両宮山古墳の外濠想定地点に設けた3ヶ所のトレンチ（10・18・19）と、和田茶臼山古墳の周囲に設けた5ヶ所のトレンチ（13～17）を中心に調査を進めた。両宮山古墳外濠は予想以上の規模であったため調査は容易ではなかったが、規模や形状を把握することができた。また、和田茶臼山古墳については、周濠外側にあたるトレンチ14・17で外濠とみられる下がりを検出し、2重の周濠をもつ可能性が強くなったため、トレンチを追加して（トレンチ22・23・27）外濠の存在の確認と、その範囲の把握を行った。このほか、前方部形状についても確認を行い、その規模を確定した（トレンチ21・24～26）。

また、両宮山古墳外濠の北側部分では、他に古墳に関係する遺構が所在するかどうかの確認を行った（トレンチ11・12）。

トレンチは大小があるが最終的な数は18本である。

第3次調査 平成17年1月に着手し平成17年3月に終了した。第2次調査で後円部外側をめぐることを確認できた外濠が、前方部側もとりまくかどうかの確認を目的としてトレンチ28・43・48・49・50を設定し、波浪による浸食を受けて損壊が進みつつある周堤（中堤）内側についてもトレンチ29～42を設けて調査を実施した。第2次調査と同様、外濠の多くは深く、掘り下げにかなりの時間を要することとなったが、最終的に墳丘西側および前方部前面で外濠の所在を確認し、2重の周濠が墳丘を全周することが確定した。また、中堤については損壊状態を把握したほか、築造時の規模・形状および構築状況を把握することができた。このほか、前方部前面の外濠外側に位置する水田が削平古墳とも見うる形状であったため、トレンチ44～47の4本を設定して調査したが、古墳ではないことが判明した。

両宮山古墳は岡山県下有数の巨大古墳であるため一般の方々の関心も高く、平成16年1月31日に開催した第2次調査現地説明会には1,000名の見学者があり、17年1月30日～2月2日に開催した第3次調査現地説明会にも約500名の参加を得た。

以上が3ヶ年の調査の経過であり、両宮山古墳に関して実際に多くの情報を得ることができ、両宮山古墳のより詳細な評価が可能になるとともに、古墳研究に大きな材料を提供することになった。

両宮山古墳は山麓に形成された扇状地状の地形に築かれているため地下水位が高く、調査では3次ともに湧水の処置、トレンチ壁面の保護に頭を痛めることとなった。

整理作業 図面・写真等の記録類および出土遺物の整理作業は、平成14・15年度分については調査終了後から次年度6月以降に実施している備前国分寺跡の発掘調査開始までの期間を利用して実施した。平成16年度分および全体のとりまとめ作業は16年度の調査終了後から17年度初めにかけて実施した。十分な期間がなく、また、整理体制を構築するに至っていないため、作業は必ずしも容易なものではなかったが、得られた情報について大きな遺漏なく整理できたと考える。

(2) 調査および報告書作成の体制

3次にわたる調査に際しては、第二次山陽町遺跡整備委員会を開催し、委員の方々に調査方針や検出遺構の評価など多岐にわたって検討をいただき、多くの教示と指導を得た。

また、調査に至る協議、さらに調査の過程では文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課のご指導を得た。調査に際しては地元地権者の方々をはじめ、多くの方々からご協力をいただいた。

第二次山陽町遺跡整備委員会

委員長 則武 忠直（山陽町文化財保護委員会委員長）

副委員長 岡本 明郎（日本考古学協会会員）

委員 伊藤 見（岡山県古代吉備文化財センター参事）

委員 犬野 久（元岡山大学教授）

委員 亀田 修一（岡山理科大学総合情報学部教授）

委員 葛原 克人（ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授）

委員 近藤 義郎（岡山大学名誉教授）

委員 中村 一（京都大学名誉教授）

指導・助言

文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官 坂井 秀弥

文化財調査官 櫻宜田佳男

文化財調査官 玉田 芳英

文化財調査官 清野 孝之

岡山県教育庁文化課（文化財課）

課長代理 松本 和男

参事 田村 啓介

総括副参事 平井 泰男

総括主幹 田中 秀樹

主幹 三宅 克広

文化財保護主任 尾上 元規

事務局

山陽町教育委員会

平成14年度

教育長 渡辺 勝也

教育次長 故倉 英教

社会教育課

課長 真野 卓見

社会教育係長 速藤 正明

主任 塩見 真康（調査担当）

山陽町教育委員会

平成15年度

教育長 渡辺 勝也

教育次長 故倉 英教

社会教育課

課長 真野 卓見

主幹 速藤 正明

主任 塩見 真康（調査担当）

主事 大熊 美穂（調査担当）

2. 調査の経過と体制

山陽町教育委員会（平成17年3月6日まで）

赤磐市教育委員会

赤磐市教育委員会（平成17年3月7日から）

平成16年度

教 育 長 渡辺 勝也

教育次長 故倉 英教

社会教育課

課 長 真野 卓見（17.3.6まで）

橋原 哲哉（17.3.7から）

課長補佐 梶尾 晶

主 幹 宇垣 匠雅（調査担当）

主 事 大熊 美穂（調査担当）

主 事 補 有賀 祐史（調査担当）

平成17年度

教 育 長 渡辺 勝也

教育次長 故倉 英教

社会教育課

課 長 橋原 哲哉

課長補佐 梶尾 晶

主 幹 宇垣 匠雅（整理担当）

主 事 大熊 美穂（整理担当）

主 事 有賀 祐史（整理担当）

調査協力

青井 正志 石原喜久江 井上 要 小坂爲三郎 小坂 素庸 佐々木武重

竹部信一郎 烏羽 立夫 羽原 和之 羽原 澄子 羽原 肇 羽原 芳昭

松本 殷昌 社 清 社 修二 社 立人 安井美恵子 山本 幸保

発掘調査作業

岩井 由美 宇野 久 国末 大亮 白川 敏史 瀧川 喜一 西本 聰輔

西本 洋輔 藤原 正行 本城 康敬 松本久美子 安井 克己 山本 雅堂

赤田三代子 小川 信行 小野真佐直 国末 勇 田中伊都子 田中 英三

田村 正明 津島 千秋 津島 由江 山口 豊 村上 大雄 伴 祐子



遺跡整備委員会 現地指導

第2章 古墳群の位置と環境

両宮山古墳群は岡山県赤磐市穂崎・和田・馬屋および一部岩田にわたって広がる古墳群である。

岡山県の東南部に位置する赤磐市は、赤磐郡山陽町・赤坂町・熊山町・吉井町の4町が平成17年3月に合併して発足した新しい市である。市域は岡山県南の沖積平野部の北側にあたり、北の吉備高原から続く丘陵が広がるが、河川やその支流にそって大小の盆地状の平野が形成されており、丘陵と平地が交錯した状況を示している。丘陵の多くは花崗岩あるいはその風化土からなるが、南部では流紋岩類や泥質岩なども分布する。

市域の東端には岡山県の三大河川の一つである吉井川が南流し、西部では中規模河川である砂川が貫流する。平野は吉井川にそって形成された旧吉井町東部や旧熊山町東部の平野、砂川にそって形成された旧赤坂町南部から旧山陽町域にかけての平野などからなり、遺跡の多くはこれらの平野に、あるいはそれに面した丘陵の先端に形成されている。

ここでは、両宮山古墳群が所在する旧赤坂町南部から旧山陽町域に広がる砂川中流域の平野と、そこに所在する遺跡・古墳について述べる。砂川中流域に形成された盆地状の沖積平野は旧山陽町域から北の旧赤坂町南部にかけて広がり、東西5.5km、南北6.3kmを測る。海拔は11~25mで、周囲を200~300mの山々が囲む。東側の丘陵は比較的低く、その東には旧熊山町西部・可真の盆地状平地が所在

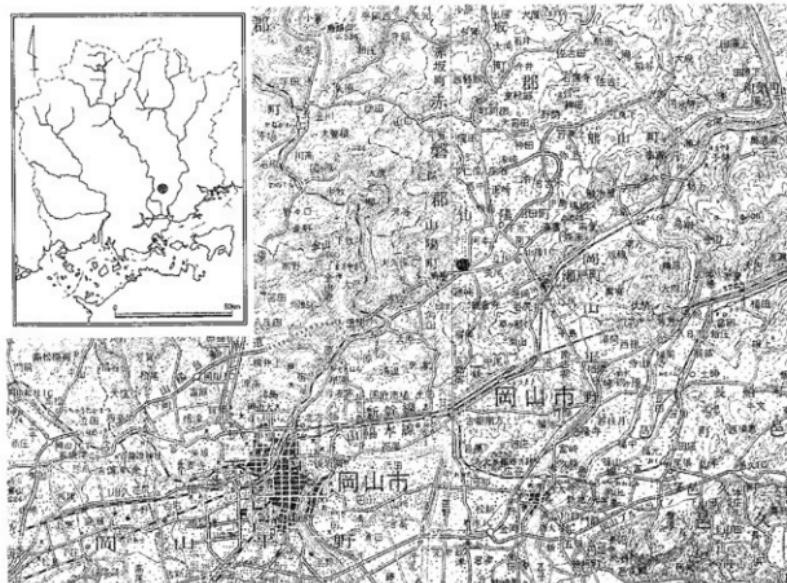


図1 両宮山古墳群の位置 (1/200,000)

し、南には瀬戸町北西部の盆地状平地が所在する。また、南西には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流域東岸平野が広がっている。

両宮山古墳群はこの砂川中流域平野の南西部に所在する。古墳群の西側で平野は狭まり、低い鞍部をなして旭川河岸の小平野に接続するが、古代山陽道はこの隘路を通過する。

旧石器・縄文時代 この盆地における人々の活動を示す遺物のうち古いものとして、備前国分寺跡の平成16年度調査で出土した有舌尖頭器があり、縄文時代草創期の人々の活動を物語る。また、正免遺跡からは縄文時代中期末の、斎富遺跡からは後期の土器片が出土している。これらに統いて、堅果類を貯蔵した貯藏穴がまとまって検出されたことで知られる縄文時代晚期の南方前池遺跡がある。また、同じ晚期に属する石棒が旧山陽町上仁保所在の吉原遺跡から出土している。

弥生時代 弥生時代前期では、該期の土器が南方前池遺跡のほか山陽小学校遺跡から出土しており、集落が沖積平地に進出し増加しはじめるといわれる。

中期以降、遺跡は町内各所に分布が広がるが、とりわけ両宮山古墳の東方、東高月丘陵に形成された中期後半の集落遺跡群（用木山遺跡、慾団遺跡、門前池遺跡、門前池西方遺跡など）は、遺構密度・遺物量ともに卓越しており、備前地域の拠点集落の一つと見ることができる。

この用木山遺跡他が所在する東高月丘陵は、山陽団地の造成用地となつたため、弥生時代集落や該期の墓域、また、後述の用木古墳群、岩田古墳群など数多くの遺跡・古墳について発掘調査が実施されることとなった。その多くが記録保存の対象とならざるをえなかつたが、吉備南部地域の弥生時代集落・前期、後期の古墳研究に貴重な資料を供し、この地域の弥生・古墳時代史解明に大きな手がかりを与えることになった。

弥生時代墳墓に関するても上記の調査によって多くの資料が提示されている。墳墓資料は弥生時代中期の四辻跡遺跡にはじまり、後期の愛宕山遺跡、便木山遺跡などがあり、このうち便木山遺跡においては木棺墓群のなかに小規模な弥生墳丘墓が築かれており、また、特殊器台・特殊壺を伴うことが判明した。

このほか弥生時代の集落は平野東部の斎富遺跡でも検出されており、平野に面した丘陵上や山麓に多くの弥生集落が営まれていたと推定される。また、正崎地区の浦山遺跡では丘陵斜面で大規模な土器溜まりが検出されており、集落遺跡等の存在が予想される。

なお、弥生時代後期における本地域を特徴づける資料として器台形土器がある。器台そのものは吉備南部地域全般において盛行する器種であり特筆するにはあたらないが、この地域においては、同一の段に円形と長方形の透かし孔を交互に配する例がしばしば認められ、まれにはそうした配列をとる2段の透かし孔帯の間を肥厚させ、特殊器台の間帯を思わせる形態をとるものもある。器台の透かし孔を一定のパターンで配し装飾とする例はこの地域に特有であり、後期にはこの地域に小祭祀場が形成された可能性がある。

古墳時代 古墳時代前期には東高月丘陵に用木1号墳（円・31m）、同3号墳（前方後円・40m）と続く首長墳の系譜が形成される。3号墳以降も古墳は継続して築かれるが、墳丘規模は15m前後に縮小しており、首長墳としての系譜は3期前後に一度途絶えるとみられる。

こうした中規模古墳のほかに、東高月丘陵に所在し現状保存のなされた野山古墳群、また、平野の東部、中島・斎富地区に所在する斎戸池東古墳群なども前～中期の古墳群の可能性が強く、小規模な方・円墳で構成される古墳群が小首長あるいは有力家長の墳墓として東高月丘陵を含む町内各所の丘

陵に形成されていくとみられる。

発掘調査が実施された前期小墳としては用木古墳群以外に正崎1号墳、中島1号墳があるが、中島1号墳では埴縁をとりまくように木棺・土塚墓が多数設けられていた。上記の用木3号墳や同2号墳、同4号墳においても埴縁付近に土塚墓や段状の小規模墳が設けられており、吉備の前期古墳で埴縁を含めて全掘した例はそれほど多くないため確定はむずかしいが、この地域の前期古墳では他の地域よりも周辺埋葬の形成が顕著な可能性が強い。

中期中業・6期には同じ東高月丘陵内ではあるが用木古墳群とは位置をたがえて岩田3号墳が築造される。一辺21mの方墳であるが2段築成で葺石をもち竪穴式石室を内部主体とするなど、通常の中小墳よりも卓越を示す。

続く中期後半・7期においてこの地域の古墳の様相は大きな転機をむかえる。本書に記載する両宮山古墳の築造である。両宮山古墳は埴丘全長194mを測る巨大な前方後円墳であり、後円部径99m、同高さ20.6m、前方部長さ100mを測り、発達した前方部をその特徴とする。周囲には周濠・周堤が遺存する。周濠のうち北部は埋没して水田として利用されているが、残りの部分は溜め池として利用されており、畿内の巨大古墳とほぼ同様の景観を呈する。周囲には幅25m前後の周堤がめぐっており、現在畠や果樹園として利用されている。

両宮山古墳は吉備の三大巨墳の一つであり、墳形の特徴から3基のうちで最も後出するとみられる。先行する2者、造山古墳(350m)と作山古墳(278m)が岡山市西部、総社市と、備中に所在する



図2 両宮山古墳周辺の古墳 (1/12,000)

に対し両宮山古墳はそれから遠く離れた備前であり、備中地域勢力と備前地域勢力の交代を見ることも可能であろう。

両宮山古墳の周囲には中規模の古墳が数基築かれている。後円部北側に所在する和田茶臼山古墳は現況は径30mの円墳であるが、本書に示す確認調査によって2重の周濠を伴う全長55mの帆立貝形古墳であることが明らかになった。また、周堤東隅の南東側には削平古墳で円墳か帆立貝形古墳が不明であるが、径約25mの正免東古墳が所在する。幅の広い周濠が検出されたが、さらにその外側をとりまく溝が検出されており、2重周濠をもつとみられる。正面東古墳の西側、両宮山古墳の前方部前面には墳丘全長82mの帆立貝形古墳、森山古墳が所在する。帆立貝形古墳としてはきわめて規模が大きく、周囲には周濠と周堤を伴い古墳の総長は136mを測る。

両宮山古墳には少なくとも3基の帆立貝形古墳・円墳が随伴するわけであるが、主墳である両宮山古墳と和田茶臼山古墳の2基は葺石と埴輪を伴わず、前方部前面の2基は葺石と埴輪を伴うという特異な状況が注目される。

両宮山古墳の後、後期初頭・8期には首長墳の築造位置は両宮山古墳から平野を隔てた南側の山麓に移り、竜山石製長持形石棺を使用する朱千駄古墳（前方後円・85m）、続いて阿蘇溶結凝灰岩製の古式家形石棺を使用する小山古墳（帆立貝形・54m）が築かれる。いずれも発掘は古く、小山古墳の副葬品の内容は明らかでないが、朱千駄古墳からは神人歌舞画像鏡、玉類、蛇行状鉄器などの出土が知られ、多量の朱の出土が古墳の名称となったことはよく知られている。

その後、9期前半には再び両宮山古墳近傍の小丘陵上に廻り山古墳⁽¹⁾（前方後円・47m）が築かれしており、この古墳は両宮山古墳を意識した立地をとった可能性が考えられる。廻り山古墳の規模は他の首長墳にくらべれば小さいが、後期前半・9期は首長墳が全体に縮小する時期であり、この時期にあっては大形といえる。そして、この古墳をもって両宮山古墳周辺の卓越、大形古墳の築造は停止する。

一方、二塚1号墳（前方後円・37m）を嚆矢として8期に砂川中流域北部（旧赤坂町域南部）の首長墓系譜の築造が始まり、沼田内古墳（前方後円・26m）を経て後期後半・10期の早い段階には備前で該期最大の墳丘と大形の横穴式石室をもつ鳥取上高塙古墳（前方後円・67m）が築造される。こうした両宮山古墳周辺への有力墳の集中的築造の終焉と平行して始まる小規模前方後円墳からなる系譜の出現は、砂川中流域から丘陵を隔てた東側の盆地、旧熊山町可真地域にも認められ、詳細な時期や墳丘規模が明確でないものを含むが小丸山古墳（前方後円・33m）、弥上古墳（前方後円・30m）と続く系譜が出現する。

さらに、9期後半から10期前半にかけて斎富地区の斎富2号墳（前方後円・24m）、東高月丘陵の便木山7号墳（帆立貝形・22m）など、それまで前方後円墳が築造されていなかった地域にも築造がなされ、小規模前方後円墳の拡散ともいえる様相を示す。

7期以降、首長墳とは別に中小規模の円墳の築造も活発となる。7期の宮山4号墳、8期とみられる別所古墳群、正崎2号墳などがその代表となる。いずれも10~20mの円ないし方墳であるが、高い墳丘盛土をもち、副葬品の構成も豊富であることが多い。今後詳細な分析が必要であるが、備前・吉井川下流域西岸地域や備中・足守川西岸平野などにおける状況、小墳の群集とは異なる様相を呈している可能性が強い。なお、両宮山古墳群南側の平野を隔てた山麓部では朱千駄古墳のほかは古墳の様相が明確でないが、埴輪片の散布が広範に認められ、7~8期の古墳が所在したと推定される。

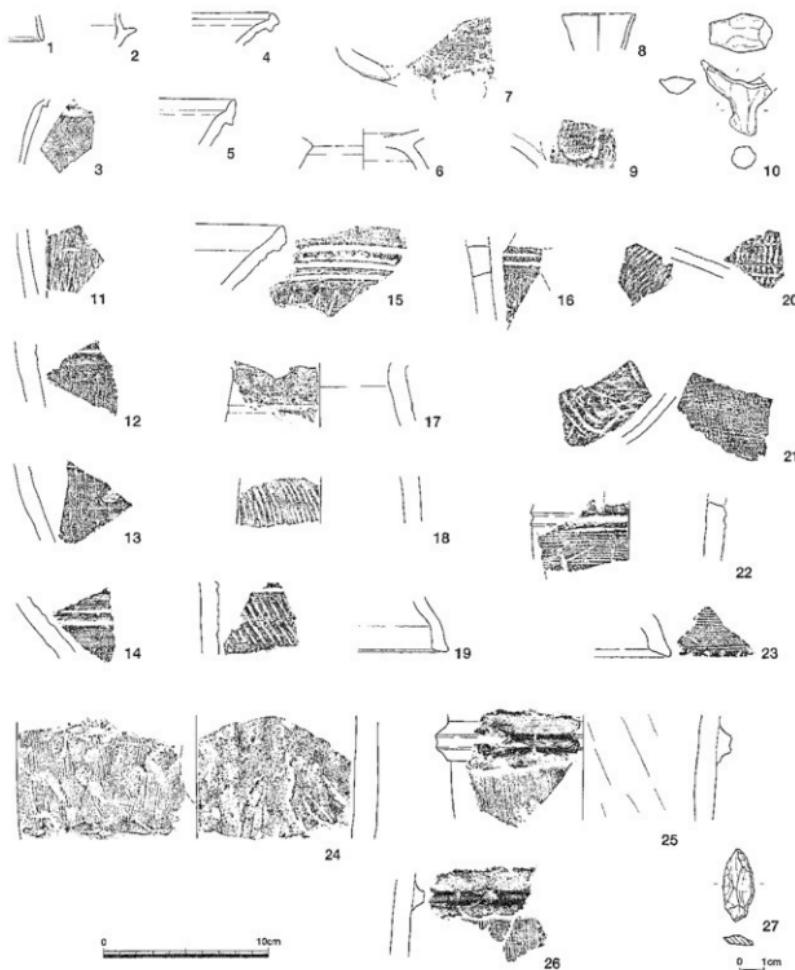


図3 通り山古墳の遺物 (1/3・1/2)

前方後円墳が消滅にむかう10期にはこの地域の各所に横穴式石室をもつ円墳が築造される。近接して密集する例は少なく、丘陵斜面に散在した分布を示すものが多い。その代表となるのが東高月丘陵に築かれた岩田14号墳である。径20mの円墳で、全長11.8m、玄室幅2.7mを測る横穴式石室内からは多量の須恵器類のはか環頭大刀2点などが出土している。また、石室石材が撤去されているが日古木7号墳も比較的大形の墳丘をもつ円墳である。そうした大形墳のはか、吉原1号墳、同3号墳のよう

に陶棺をおさめる小形墳も多い。

さらに7世紀代に至ると、両宮山古墳の西方、旭川東岸の小平野に牟佐大塚古墳が築造される。巨石を用いた全長19mもの横穴式石室を主体部とする古墳で、墳形は不明確ではあるが大形の方墳とみられる。

以上、前方後圓墳の築造状況を中心にこの地域の古墳時代を概観した。前期から後期まで数多くの古墳が築造され、その中には卓越した埋葬施設や豊富な副葬品をもつものが含まれる。首長墳に関しては、前期に形成された首長墓系譜が途絶えた後、中期後半に巨大古墳の築造がなされ継続して優勢な首長墓系譜が形成される。後期前半以降は中小規模墳からなる系譜がこの地域内に多数分立するかのように形成されていくと整理することができる。

古墳時代の集落は門前池遺跡、門前池東方遺跡、斎富遺跡などで検出されている。これらのうち後二者では韓式系土器や初期須恵器など朝鮮半島系の遺物の出土が顕著であり、古墳群の形成とどのように関わるか今後検討していく必要がある。

古代・中世 古墳時代以降も数多くの遺跡が形成される。これらは地域の特性を示すとともに、両宮山古墳群築造の背景をさぐる重要な手がかりにもなる。

奈良時代には両宮山古墳の西側に備前国分寺、その南側に備前国分尼寺の造営がなされる。また、両宮山古墳の西1.1km、砂川中流域盆地と旭川が形成した沖積平野との境界をなす低い鞍部には古代山陽道高月駅家推定地が所在する。古代山陽道は両宮山古墳と森山古墳の間、県道岡山吉井線とほぼ重複して東西方向に通過していた可能性が強く、国府から離れて立地する備前国分寺も、この古代山陽道との関係においてこの地に立地したとみられ、この地域が古代の備前の陸路の枢要の地であったことを示している。このほか、平野東部の斎富遺跡で該期の建物群が検出されている。

中世の遺跡については概括が困難であるが、山陽自動車道建設に伴い、両宮山古墳の西側、備前国分寺跡の南側に所在する馬屋遺跡の発掘調査がなされ、広大な集落および墓が検出されている。この遺跡を含め、山麓斜面や扇状地など、平野縁辺の各所に集落が形成されたとみてよいだろう。中世末には両宮山古墳の西方、旭川下流域一帯を睥睨する位置にある龍ノ口山に龍ノ口山城が築かれ、市域の山頂・丘陵にも大小の山城が築かれる。両宮山古墳も城郭として利用されたとされるが、堀切や桟岸などの遺構を認めることはできず、山城は別の場所に考えるべきであろう。

註

- (1) 永山卯三郎1930『岡山県通史』、および荒木誠一1940『改修赤磐郡史』の位置表示や記載では、現在の森山古墳が「廻り山古墳」、廻り山古墳が「森山古墳」と呼ばれており、これが本来の古墳名称である可能性が高い。混乱の原因は、岡古墳とも字名が同じ廻り山であるためで、梅原末治氏が森山古墳を西もり山と呼んだのも字名が同じであることを考慮したためかもしれない。名称を訂正した場合、著しい混乱を生じるため、ここでは従前からの名称を用いる。

参考・引用文献

- 足利健亮1992 「山陽・山陰・南海三道と土地計画」『新版 古代の日本』4中国・四國 角川書店
宇垣匡雅2004 『森山古墳・両宮山古墳』山陽町文化財調査報告第2集
亀山行雄1993 『朱千駄古墳』岡山県埋蔵文化財報告23 岡山県教育委員会
神原英朗1971～1977 『岡山県菅山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』第1集・第2集・第4集 山陽町教育委員会

- 近藤義郎ほか1995 「南方前池遺跡」山陽町教育委員会
- 新東晃一・松本和男・枝川陽1975 「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9
- 下澤公明ほか1996 「斎富遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105
- 則武忠直ほか1986 「山陽町史」山陽町
- 則武忠直ほか1989 「正崎2・4号古墳 付 補山遺跡ほか」岡山県山陽町埋蔵文化財発掘調査概報
(則武忠直ほか2004 「正崎2号墳」山陽町文化財調査報告第1集 山陽町教育委員会 に再録)
- 則武忠直・岡 秀昭・塙見真康1994 「岡山県山陽町門前池東方遺跡の朝鮮半島系資料」『古文化談叢』第32集
- 横山 定ほか1995 「馬屋遺跡ほか」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99 岡山県教育委員会

第3章 既往の研究と古墳の現状

1. 既往の研究

両宮山古墳が最初に報告されたのは、管見の範囲では梅原末治氏の報文である。墳丘の概要が記され、巨大な墳丘に濠と周堤がめぐり畿内の陵墓古墳にはほぼ等しい景観をもつこと、また、周囲には廻り山古墳などの中規模古墳が所在することが報じられた。なお、両宮山古墳については埴輪が認められないことに注意がはらわれており、「あるいは本来円筒を欠けるためか」と記されている（梅原1927）。この後、永山卯三郎氏による報告がなされ、墳丘全長104間（189m）、後円部径60間（109m）等の計測値が示された（永山1930）。荒木誠一氏は別に計測を行ったようで全長79.5間（145m）、後円部径45間（82m）等を示すが、やや数値が小さい（荒木1940）。

その後、西川宏氏は両宮山古墳を含む吉備の三大古墳の検討を行い、両宮山古墳は3基のうち最も後出しし、5世紀後半の築造とする見解を示した（西川1975）。また、正岡聰夫氏は森山古墳・廻り山古墳など、両宮山古墳周辺の古墳の埴輪・須恵器について資料紹介を行っている（正岡1976）。この後、春成秀爾氏は周辺の中期古墳を含めて両宮山古墳の評価を行い、墳形に関しては大阪府御廟山古墳と同形・同規模との判断を示した（春成1982）。

1980年に実施された周堤の調査が、本墳に関するはじめての発掘調査となる。前方部前面の周堤に設けられた樋管改修に伴う調査であり、周堤の構造が明らかになった。それによれば現在2段の築成を示す周堤のうち下段上部以上、高さ約1.9mは後世に溜池として利用するために盛り上げられたものであり、それ以下が本来のものであること、本来の盛土の厚さは約1.7mを測り、盛土工程中に柱穴とみられる大形の掘り込みが設けられていることが判明した（河本1980）。

1986年には『岡山県史』考古資料編が刊行され両宮山古墳の測量図が公開された。県史編纂事業において一部の樹木を伐採して航空測量が実施されたもので、周堤の形状や陪塚の位置関係を含めて両宮山古墳墳丘が資料化された（岡山県史編纂室1986）。

これにもとづいて墳丘の築造企画もより詳細に論じられることとなる。石部正志氏らは本墳の墳形は畿内の大阪府輕里前之山（輕里大塚）古墳と同一設計と考え（石部・田中・堀田・宮川1991）、岸本直文氏は大仙古墳の5分の2規模の相似墳であるとした（岸本1992）。

また、1994年には正免東古墳の発掘調査が実施され、前方部前面、森山古墳に近接した位置に完全に削平された古墳が所在すること、円墳か帆立貝形古墳であるかは不明であるが墳丘径25mを測り、周濠の外側に2重周濠の可能性が考えられる溝を伴うことが判明した。

これ以降の資料としては山陽町教育委員会で実施した測量調査の報告があり（宇垣2004）、さらに本報告書においてこれまで実施した調査を報告することになる。

以下、両宮山古墳および周辺の古墳に関する文献を示しておく（年代順）。吉備を代表する古墳の一つであるため、これを取り上げた文献は数多いが、ここでは両宮山古墳などを具体的に論じたものに限り、古墳時代史のなかで取り扱っているものなどは割愛した。

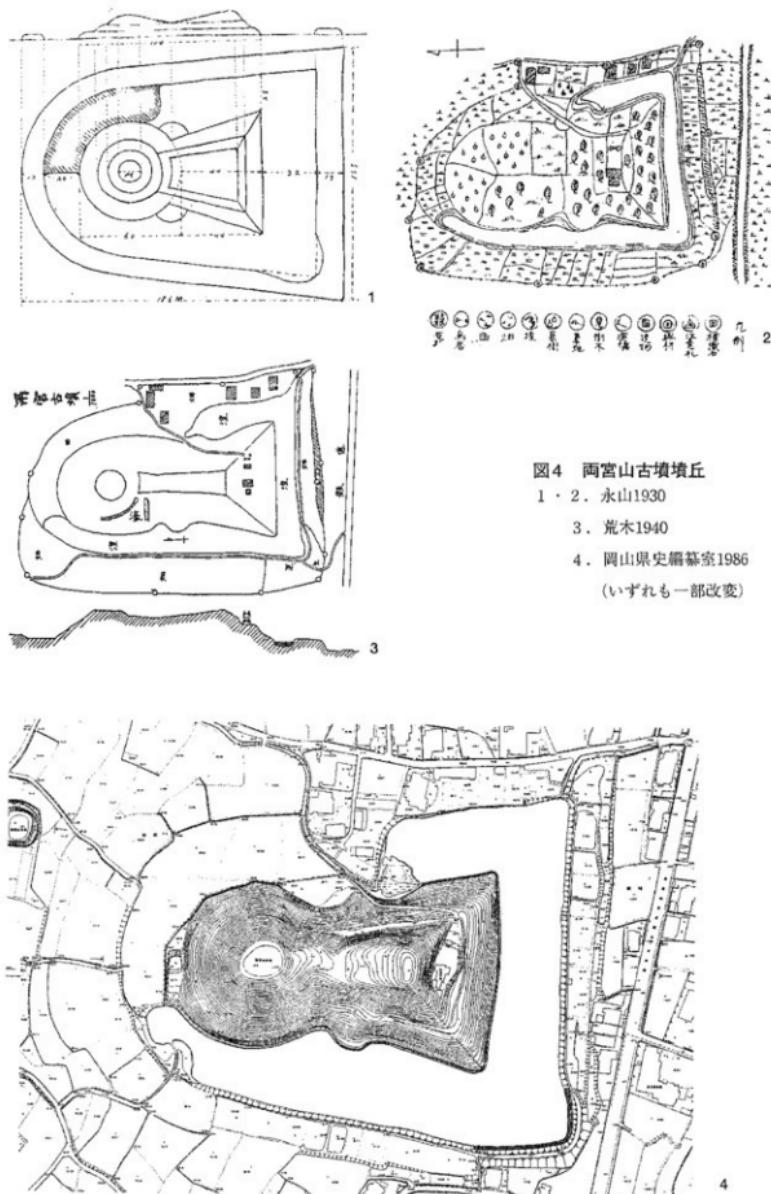


図4 両宮山古墳墳丘

1・2. 永山1930

3. 荒木1940

4. 岡山県史編纂室1986

(いずれも一部改変)

2. 古墳の立地と現状

- 梅原末治1924 「備前国西高月村の古墳」『歴史と地理』第13巻第4号 45-59頁
永山卯三郎1930 「第1編 上古」『岡山県通史』上編 岡山県 261-262頁
荒木誠一1940 「改修赤磐郡史」岡山県赤磐郡教育会 262-263頁
西川 宏1975 「吉備の首長」「吉備の國」学生社
正岡陸夫1976 「岡山県赤磐郡山陽町森山、廻り山古墳における表探資料」『岡山県埋蔵文化財報告』6 59-61頁
河本 清1980 「両宮山古墳周堤確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10 215-220頁
河本 清1980 「図版解説 両宮山古墳の周堤」『考古学研究』第26巻第4号
春成秀爾1982 「備前の大形古墳の再検討」『古代を考える』31 古代を考える会
西川 宏1986 「両宮山古墳」『岡山県史 第18巻考古資料』岡山県 226頁
岡山県史編纂室1986 「付図3 両宮山古墳群」『岡山県史 第18巻考古資料』岡山県
葛原克人1987 「大古墳」「吉備の考古学」福武書店 269-284頁
葛原克人1987 「古墳時代前期」「岡山県の考古学」吉川弘文館 218-224頁
宇垣匡雅1991 「両宮山古墳」「岡銘日本の史跡 第3巻原史3」同朋舎出版 131頁
葛原克人・宇垣匡雅1991 「両宮山古墳」「西もり山古墳」「前方後円墳集成 中国四国編」山川出版社 274-276頁
宇垣匡雅1991 「和田茶臼山古墳」「前方後円墳集成 中国四国編」山川出版社 274頁
石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 徹1991 「造山・作山および両宮山古墳の築造企画の検討」『考古学研究』第38巻第3号 考古学研究会 40-64頁
岸本直文1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号 考古学研究会 45-63頁
桑岡 実2000 「両宮山古墳」「吉備の古墳」上 吉備考古ライブラリイ4 吉備人出版 44-47頁
宇垣匡雅2004 「森山古墳・両宮山古墳」山陽町文化財調査報告第2集

2. 古墳の立地と現状

(1) 立地 (図2・5)

前章において述べたように両宮山古墳は標高458mを測る本宮高倉山の南東麓に形成された扇状地の斜面に築造されている。墳丘主軸を斜面の方向に合わせてあり、後円部が北西、前方部が南東に向く。後円部側外濠外側が24.55m、前方部側外濠外側で16.90mを測り、前方部側が大きく下降する。

墳丘の南西側は幅60mの浅い谷状の地形をなし、その西側には備前国分寺が所在する南向きの斜面が広がる。また北東側は高倉山山塊から南東へ出していく谷の出口付近にあたり、東に所在する丘陵(山陽團地)までの間、100mが同様に浅い谷状をなす。つまり、両宮山古墳は大小2つの谷状地形に挟まれた舌状の高まりを選地して築かれている。両宮山古墳の「陪塚」和田茶臼山古墳が後円部北側に、森山古墳が前方部前面に築かれ、これらによって構成される両宮山古墳群は北西-南東方向に細長くのびた分布を示すが、これは上記の地形に起因するとみてよい。なお、南東の森山古墳の周堤前面、山陽自動車道の北側付近で古墳群が所在する高まりが終わり水田面は南に大きく下降し、西の馬屋地区から東の立川地区にむかって下降する広い低位部が広がっている。

古墳周辺の地山の上部は黄色の粘質土ないし粘土であるが、下部は数10cmから1m前後の厚さで土層が変わり礫混じり粘質土と粘質土の互層となり、礫層に近い部分も見られる。一方、両宮山古墳後円部周縁には岩盤が見られ、後円部付近には地形の高まりの核となる低丘陵が所在するみてよく、墳丘はそれを利用して構築されていると推定される。なお、墳丘盛土下には弥生時代後期前葉の遺構も所在しており、この低丘陵上に弥生時代の集落も営まれていたとみられる。



図5 兩宮山古墳群
(1/2,600)

(2) 古墳の現状（図版1・2）

こうした地形を反映し、両宮山古墳後円部後方には畠や果樹園、棚田状の水田が広がり、南西・北西の両側から前方部前面側にかけては水田域となる。前方部側外濠の外側から外濠にかけての部分には主要地方道岡山吉井線が所在するが、それにそって商店や住居からなる家並みが、また、中堤の東側には北に向かう道路にそって集落が形成されている。

墳丘 後円部後端側斜面に梅林が見られるが、かつては墳丘のかなりの部分が畠や果樹園として利用されていたよう、各所にその痕跡が認められる。現在、墳丘の大部分が山林にもどり、クスギやカシ、笹などが繁茂している。また、前方部前側斜面には神社が所在し社叢が形成されている。墳丘の細部については測量調査報告（山陽町文化財調査報告第2集 森山古墳・両宮山古墳）に掲られたいが、上記の畠の造成によって段築はかなり削平され、埋没しており、後円部では後端側に中段テラスが、南西くびれ部に下段テラスが残る程度である。前方部南西半は遺存状態が比較的良く下段・中段テラスや造り出しの形状もよく残るが、北東半では中段テラス以下の遺存状態はあまり良くない。

内濠 内濠の北部、全体の約3割は埋没して大部分が水田となっているが、周堤側から大きく下降して広がる水田面はなお内濠の形状をよくとどめている。内濠の残り、後円部西側から前方部の周囲を経て北東くびれ部に達する約20,000m²は濠の状態をとどめており、前方部前端から中堤までの長さは満水時で41m、前方部南隅角から中堤までの長さ48mを測る。現在、溜池「両宮池」として利用されており、北の高倉山山塊を発する谷川の水を受け、南に広がる穂崎地区の水田をうるおしている。

中堤（図版4・5） 内濠の周囲には中堤が遺存する。これまでこの部分は周堤と呼んできたが、外濠の存在が明らかになったため、以下、中堤と呼ぶ。前方部北東側・前面・南西前方部～くびれ部側上面は畠や果樹園として利用されており、北東くびれ部側は宅地となっている。後円部側は水田であるが休耕地となっている部分も少なくない。内濠側斜面は池の波浪によってかなり浸食されて崩落をしており、保存対策が急務となっている。

中堤は前方部前面で基底幅約22～26m、中堤外側の水田面からの高さ3.7m、墳丘測量時の池水面からの高さ約1mを測る。前方部前面中堤外側には上面から1.3～2.0m低い位置に幅4m前後の段があり細長い畠として利用されているが、1980（昭和55）年の断面調査によってこの段付近よりも上方は池の容量を増すために後世に追加された盛土であり、それ以下の、外側水田面からの高さ1.7mの部分が本来の規模であったことが明らかになっている。したがって、内濠が本来水濠であったとしても、その水面は現在よりもかなり低いものであったことになる。

南隅角付近の延長90mの範囲は池が南に張り出した形となるが、中堤の上面幅が狭い一方、高さは5mと他の部分よりも高く、通常の池の堤と変わらない形状を示している。中堤が部分的に失われ、後に池として利用するために堤が築かれた、あるいは大規模な池の改修が過去になされて形状が変わったなどの可能性が考えられるが、いずれにせよ本来の中堤はかなり失われているとみられる。中堤の前面幅は現状で250mである。なお、この中堤西側と中堤の中央には樋管が埋設されており、中堤東隅には荒手（余水吐）と樋が設けられている。

中堤北東部は上面幅20mを測る。東隅では外側の田面よりも1.9m前後の高さを示すが北西に行くにしたがって段差は小さくなり、北東くびれ部前面付近で差はなくなる。内濠側の斜面には古くに護岸石垣が設けられている。中堤南西部は上面幅20m、基底幅25mを測る。北東部と同様、南隅角近くでは外側の水田からの高さ3.6mを測るが、後円部南西部付近で外側の水田と等しい高さとなる。

後円部後端側で中堤は内濠部分に形成された水田よりも2.5m高く、その間は急斜面をなす。上面の後方はほぼ水平で、確認調査によって外濠を検出するまでは中堤の幅は認定できない状態であった。後円部後端側中堤上面の高さは23.51m、前方部前面中堤の現高さ21.55m、本来の高さを反映する中堤中段の高さは20.38mであり、現中堤は主軸線上で約2m下降する。くびれ部付近の横断では北東中堤上が21.45m前後、南西中堤上が22.30mであり、南西側が高くなる。

外濠（図版6・20） 調査によって中堤の外側に外濠が所在することが明らかになったが、完全に埋没しており、後円部後端側以外では地形の変化や畦畔の形状からその存在をうかがうことはむずかしい状態であった。後円部北西外側には弧を描く畦畔線が長さ57mにわたって認められ、水田面は上と下で1.2mの差がある。確認調査の結果、この畦畔は外濠の外側肩口の位置をほぼ示すことが判明した。弧を描き遺構の形状を示すのはこの部分のみであるが、調査結果にもとづけばいくつかの畦畔が外濠肩の位置を反映していることが判明した。



発掘調査状況



現地説明会

2. 古墳の立地と現状



図6 トレンチ配置図 (1/1,800)

第4章 調査の概要

1. 両宮山古墳の調査

(1) 外濠（図6）

両宮山古墳後円部外側に配したトレンチ19・18・8・10・9・28の5本、前方部側に配したトレンチ43・48・49-50の4本のトレンチで外濠を検出し、外濠の形状を確認した。墳丘主軸線上での差し渡しが350mに近い外濠に対して多い数とは言えないが、外濠の存在を明らかにし、その規模と形状を把握することができたと言える。

トレンチは長さ10m、幅2mを原則としたが、外濠がきわめて深く広いことが判明したため、それ以降は幅3mとした。トレンチの番号は調査時のトレンチ番号を踏襲している。

以下に示すように濠の断面形や規模は異なるが、いずれのトレンチにおいても葺石および埴輪の存在は認められなかった。

1) トレンチ20（図7・11、図版8）

後円部西外側に設定したトレンチで、外濠外側にある。

8・9層は古い水田耕作土、6層は黒色土ブロックを含み、1枚の水田にするために埋め立てた造成土とみられ、かつてはこの部分が上下2段の細長い水田に分かれていたことを示している。

16・18層は40cm前後の大形の礫を含む砂礫層、19層は砂層であり、下部の堆積層のうち中央～西部は急速に堆積が進んだ可能性が強い。地山は東に下降を示すが、同時にトレンチ底全体が南にも下降を示しており、トレンチ南側の至近の位置に東に向かう谷筋が埋没している可能性が強い。トレンチ中央で検出した南北方向の浅い溝状の下がり（17層）はそれに流れ込む流路と推定される。

21層は褐黒色粘質土、15層は褐灰色砂質土であり、21層が後述のトレンチ19の17～22層、15層がトレンチ19の15ないし16層に対応するとみられる。

遺物量は多くないがトレンチ下半の堆積層からある程度の量が出土している。流路とみられる17層からは鎌倉時代の備前焼甕口縁1が、20層下の地山上面からは土師質鍋の脚部片3が出土した。土師質羽釜2は18層からの出土である。明灰色を呈するが瓦質というほどではない。図示しえなかつた小片も同時期であり、このトレンチの初期の堆積層は鎌倉時代を中心とする時期に形成されたことを示している。遺物の量や堆積層の状態からみて、トレンチ付近に中世の集落が所在するではなく、中世の集落はさらに北側に所在したとみられる。

以上のように、この部分では中世前半に至って堆積がはじまっており、それ以前の堆積層や造構は遺存していない。外濠外側のうち最も高くなる位置であり、外堤は本来設けられていないかった可能性もあるが、このトレンチではそれが所在していたと考えるべき根拠は認められなかった。

2) トレンチ19（図8・11、図版7・8）

上記のトレンチ20の南東に設定したトレンチであり、外濠を検出した。

外濠の形状

トレンチ西端から70cmの位置で傾斜の変換が認められ、この部分が西外側の肩とも見られるが、トレンチ20での傾斜から想定される地山の高さとは若干の差があり、トレンチ外側の石垣直下付近に外

側の肩が所在すると推定される。中堤肩から外濠外肩までの幅13.7m、外肩からの深さは3.7mと推定される。ほぼ二段掘りと言える形状を示し、下部の斜面は急傾斜をなす。

トレンチ東端は中堤であり、すべて地山からなる。中堤肩から39°の傾斜で幅1.08m、下方に65cm下がって中堤基部に達し、これよりも西側が上段底面となる。上段底面は幅1.46mで、濠の中心にむかって傾斜をもつ。西部は傾斜が強くなり、肩口が若干流出している推定される。上段底面の下方は斜面となり40cm内外の高さで傾斜が変化しつつ下降し、21.1mで幅50cmの平坦部に達する。この部分は狭いながら後述のトレンチ9・10で見られる中段底面に相当する可能性がある。ただし、それらのトレンチでは中段底面は濠の最深部（下段底面）よりも外側に設けられており、中段底面とするには難があることになる。この中段の底面からの深さ約1m、西外側の傾斜変換点からの深さ1.73mで下段底面に達する。下段底面の幅は1.6mで、高さ19.78m、両斜面は56～60°の急傾斜をなし、上端の幅3.26mを測る。

外濠外側上部の斜面は傾斜の変化は少なく20°前後の傾斜で下降する。斜面中ほど22.6mには幅46cmの平坦部があり、これは中堤側の上段底面の高さと等しく、これに対応するものとみられる。

堆積土と出土遺物（図11）

出土遺物がさほど多くないため堆積層の年代は大まかにならざるをえないが、堆積土および出土遺物（図11-4～17）について記載する。なお、古墳に関わる遺物は出土していない。

堆積土のうち最下部の41層は砂礫層で、地山上部の礫が落下堆積したものとみられる。その上には黒灰色粘質土39層が堆積しており濠の下部を埋める。この層および上の33層は同様な堆積が厚く溜まっており、水中で形成された可能性も考えられる。

33層は灰黒色で粘土に近い性状の土である。この層からは須恵器甕の破片17が出土している。胴部の破片であるため年代の推定は困難であるが、あえて言えば7～8世紀とみられ、古代前半までに濠の下部が埋没したと推定できる。

堆積の中ほど17～22層は礫を含む黒色の粘質土である。他の層にくらべて出土遺物の量が多い。土層の色調や出土遺物の年代からみて、上方のトレンチ20の21層と一連の土層とみられる。出土遺物は青磁碗8、備前焼すり鉢11、東播系こね鉢15などがある。備前焼碗4、土師質高台付椀6・7、備前焼壺9、土鍋10、備前焼すり鉢14、丸瓦16も、一部は上層からのものを含むがおおむねこれらの層に帰属するとみてよい。大部分が鎌倉～南北朝時代の遺物であり、中世前半に埋没が濠の半ばまで進んだことを示している。27層は本片の周囲に形成された暗灰色粘土である。

堆積上部の14・15層は暗灰色、褐灰色の粘質土である。その上の10層は暗褐色の粘質土で、これを覆う8層は黄色の砂であり両層の境は明瞭である。埋没の最終段階で濠の上面が浅い沼のような状態となつたことを示すとみてよい。8層の上の7層は礫を多く含む粘質土でよく締まっており埋め土と推定される。この層からは桃山時代の備前焼すり鉢の小片13が出土しており、沼状の低地を埋めて水田化する工事が江戸時代の前期ごろなされたとみられる。現在の水田景観が形成されたのはこの時期以降となる。

3) トレンチ18（図9・11、図版9）

後円部後端側主軸近くに設定したトレンチで、トレンチ19の東40mである。

トレンチ19と同様、外濠の外側肩部はトレンチ外になり、水田端の石垣付近になると思われる。ただし、トレンチ付近が古墳後方の丘陵の張り出し部分にあたっているため、外側の肩は高く、またか

なり外に広がる可能性がある。

外濠の形状

外濠は中堤肩から外端までの幅13.7m、深さ2.9mと推定される。周堤上面の高さは23.37m、底面は20.59mである。先のトレンチ19での形状とはかなり異なり、深さは80cm浅く、また、下段底面の位置が外側寄りになる。

中堤肩はトレンチ南西端から2.1mに位置する。肩部付近がやや削られており、トレンチ端の地山高で復元すれば検出高よりも14cm高くなる。復元した周堤肩から下に86cm、幅1.28m下降して中堤基部となる。この部分から上段底面が北西に延びるが、中堤基部から1.4mの間は緩やかな斜面をなす。これを含めた上段底面の幅は4.36mである。北西側斜面においてもこれと同じ高さに上段底面が設けられているが、幅は30cmと狭い。

上段底面から1.5m下に下段底面が設けられる。下段底面の幅は2.1mで底面は中堤側にむかってわずかに傾斜する。斜面上端での幅は5.9mを測る。北西斜面の下部には幅40cmのテラスが設けられており、小規模はであるが中段底面を造り出している可能性がある。

堆積土

堆積土はおおむねトレンチ19のそれと一致するが下層はやや異なる。また、遺物の包含量はきわめて少なく、中世の集落城はこの付近までは広がっていなかったようである。

下部の堆積土のうち下半は砂質土・砂で構成され、上半は粘質土主体となる。24~26層には地山のブロックが含まれており、濠の外側斜面が崩れ込んでいるとみられる。主に濠の外側から土砂が流入し、埋没が比較的早く進んだ可能性が考えられる。中層の堆積のうち17~18層は礫を多く含む黒褐色土で、トレンチ19の17~22層に対応する。出土遺物は多くが小片で図化できるものはほとんどなく、埴18を示すことができる程度である。須恵質の壺底部19は排土からである。12層は灰色粘質土で、これを明褐色シルト10層と明褐色砂9層が覆っており、トレンチ19で見られた沼状の湿地が広がることを示している。これを覆う7層は堆積とみられる細疊層で、この層はトレンチ19では認められない。この後造成土4層で埋められトレンチ19と同様の水田化がなされたものと思われる。

水田化される直前の湿地が外濠の形状を反映しており、また、外側の地山の傾斜が強かつたため、トレンチ19、18の所在する水田西側の畦畔は外濠の形状をとどめることになったとみられる。

4) トレンチ8(図12-11、図版6)

トレンチ18から農道を隔てた東側の水田に設定したトレンチである。

延長は20mで中堤から外濠南東部に及ぶ。中堤上面では地表下20~40cmで地山となり、中堤の北半部はすべて地山の削り出しによって形成されていることを確認した。

外濠は長さ6.5mにわたって検出した。北西端では下部の掘り下げを行っていないが、中堤上面から90cm下降して中堤基部となり、そこから幅70cm以上の上段底面がのびる。中堤肩に近い斜面部には幅1.20mの溝が所在するが、これは後後に掘り込まれたもとみられ、本来の中堤肩部はこれによって失われているとみられる。堆積土は礫を含む暗褐色土で、おおむねトレンチ18の14~17層に対応するようである。堆積層からの出土遺物は須恵質碗20、土師質高台付碗21、土師質鍋22など少量である。古代末~中世の遺物であるが、他のトレンチの状況からみて堆積の形成は中世以降と推定される。なお、それらとともに内面にスリケンが施され5世紀末以前と判断される須恵器壺の小片1点が出土している。

5) トレンチ 1 (図13)

第1次調査において両宮山古墳と和田茶臼山古墳の間に設定した長さ20mのトレンチである。粘質土の堆積が見られる。

外濠上に位置するが、トレンチを設定した水田は他の水田とは異なり南北に長く、南下側の水田は中堤を切り込むように低くなる。この部分に和田茶臼山古墳の方向から両宮山古墳内濠に流入する流路が形成された可能性が考えられ、堆積層は基本的にそれによって形成されたとみられるが、下部の堆積は外濠の堆積土の可能性が強い。

トレンチ19

1 暗褐色粘質土〔耕作土〕	16 暗灰色粘質土	31 黄灰色粘質土
2 程褐色土	17 極褐色粘質土	32 黑褐色粘質土 (縦縫合む)
3 [暗褐]	18 暗褐色粘質土	33 黄褐色粘質土
4 暗褐色砂質土	19 暗褐色粘質土 (やや粘性強い)	34 暗黄色粘質土
5 暗褐色砂質土 (縦: 3cm前後含む)	20 黑褐色砂質土	35 明褐色砂跡
6 暗褐色粘性砂質土 (縦: 3cm前後含む)	21 暗褐色砂質土	36 黑褐色粘質土
7 暗褐色粘質土〔造成土か〕	22 極褐色粘質土 (縦: 10~15cm含む)	37 黑褐色粘質土 (様多く含む)
8 黄色砂	23 暗褐色粘質土 (縦: 5~10cm含む)	38 黄褐色粘質土 (様多く含む)
9 明褐色微砂	24 暗褐色粘質土 (粗砂含む)	39 黑灰色粘質土
10 暗褐色粘質土 (砂多く含む)	25 灰色粘質土	40 暗黄色細混じり砂質土
11 黑褐色粘質土 (砂多く含む)	26 暗褐色粘質土	41 青灰色砂塵
12 暗褐色粘質土 (縦: 3cm前後多含む)	27 暗褐色粘土	42 黄色砂質土 (縦縫に近い) [地山上部]
13 黄褐色粘質土 (縦: 10cm前後多含む)	28 暗褐色粘質土	[地山中部] 黄色粘質土 (縦を多く含む)
14 暗褐色粘質土	29 暗褐色粘質土 (粗砂含む)	[地山下部] 黄色粘質土
15 極灰色粘性砂質土	30 黑褐色粘土	

トレンチ18

1 暗褐色粘質土〔耕作土〕	13 暗褐色粘質土	25 黄褐色粘質土 (地山ブロック多)
2 赤褐色粘質土	14 暗褐色粘質土 (縦: 2~3cm多含)	26 極褐色粘質土 (地山粒多く含む)
3 明灰褐色粘性砂質土 [H耕作土か]	15 暗褐色粘質土	27 黑褐色粘質土
4 極褐色粘性土 (地山ブロック含む) [造成土か]	16 暗褐色粘質土 (縦: 2~3cm多含)	28 黄色粗砂
5 明褐色粘性粘質土 [旧耕作土か]	17 黑褐色粘質土 (縦: 2~6cm多含)	29 暗灰色砂質土 (縦: 1~5cm・粗砂含む)
6 暗褐色粘質土 (縦: 3cm以下多含む)	18 暗褐色粘質土 (縦: 4cm以下含む)	30 灰色砂
7 暗褐色粗繩 (縦: 1~3cm)	19 黑褐色粘質土	31 黄褐色粗砂質土
8 明褐色砂	20 黑褐色粘質土 (縦: 3~5cm含む)	32 黑灰色粘質土
9 明褐色シルト	21 暗褐色粘質土	33 雪青褐色粘質土
10 暗褐色粘質土	22 黑褐色粘質土 (縦: 4~8cm多量に含む)	34 黄色粘質土 [地山]
11 暗褐色粘質土	23 暗褐色粘質土 (縦: 5cm前後含む)	
12 暗褐色粘質土	24 暗褐色粘質土 (地山ブロック多)	

トレンチ10

1 黑褐色粘質土〔耕作土〕	20 黑褐色粘質土 (小粒多く含む)	37 暗灰色粗砂 (シルトを含む)
2 黄褐色砂質土	21 黑褐色粘質土 (小粒多量に含む)	38 暗灰色砂
3 [暗褐]	22 暗褐色粘質土 (砂を含む)	39 暗褐色粗砂
4 極褐色砂質土	23 暗褐色粘質土 (3cmの大粒を多量に含む)	40 明灰褐色シルト (砂を多く含む)
5 暗褐色粘質土 (褐色土ブロック含む) [造成土か]	24 極褐色砂質土 (砂を多く含む)	41 明灰褐色シルト (砂を含む)
6 赤褐色粘質土	25 細研磨褐色粘質土 (縦を多く含む)	42 褐色粘土 (木片・有機物を多く含む)
7 極褐色粘土 (粗砂含む)	26 暗褐色粘質土	43 褐色シルト
8 極褐色粘土 (粗砂含む)	27 黑褐色粘質土	44 灰白色粘土 (粗砂含む)
9 暗褐色粘質土 (木片含む)	28 (草根・枝を含む。20層と同一か)	45 明灰褐色シルト
10 緑色粗砂	29 暗褐色砂塵	46 明灰色粗砂
11 暗褐色粘質土 (粗砂多く含む)	30 暗褐色粘質土 (草根を多く含む)	47 灰色粘質土 (粗砂含む)
12 暗褐色粘質土	31 暗褐色粘質土 (砂を含む)	48 青緑色砂塵
13 暗褐色シルト	32 暗褐色砂塵 (2~4cmの縦を多く含む)	(ほぼ裸露。縦は5cm前後が主) [地山]
14 暗褐色シルト (木片多く含む)	33 暗褐色砂塵	49 極褐色纏着 [地山]
15 暗褐色粗砂	34 暗褐色シルト	50 泥混じり纏着 [地山]
16 暗褐色粘質土 (草根を含む)	35 灰色砂	[地山上部] 黄色粘質土
17 暗褐色粘性砂質土	36 黑褐色粘質土	[地山中部] 黄色砂質土 (縦含む)
18 黑褐色粘土	37 黄褐色砂	[地山下部] 白色粘土
19 極褐色粘質土	38 黑褐色粘質土	[地山最下部] 明黄色粘質土 (粗砂含む)

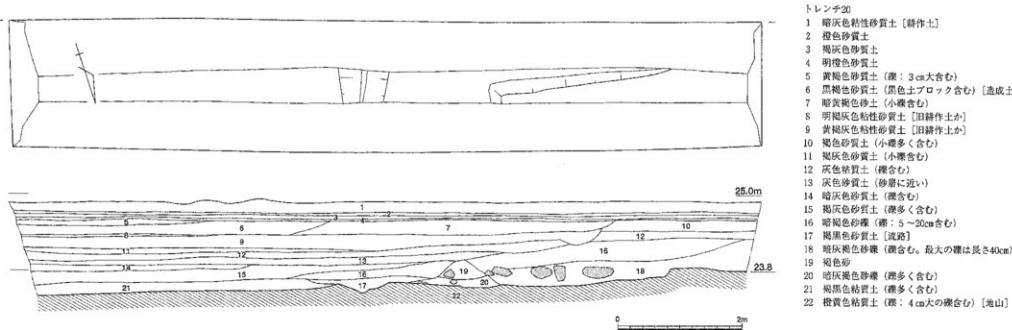


図7 トレンチ20 (1/60)

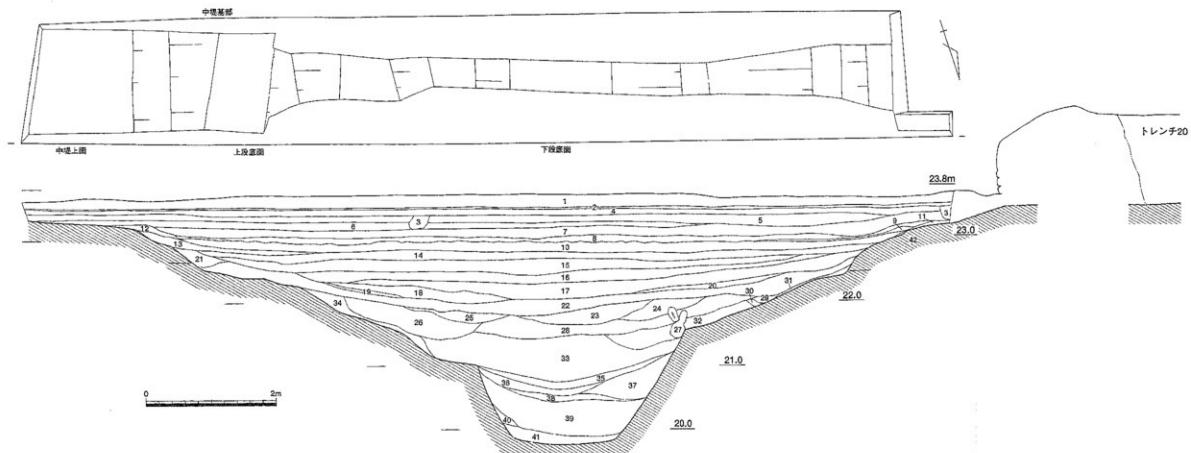


図8 トレンチ19 (1/60)

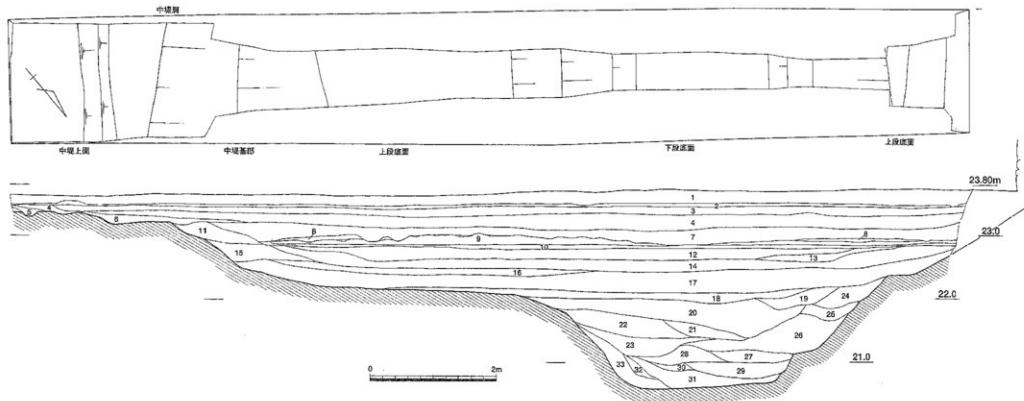


図9 トレンチ18 (1/60)

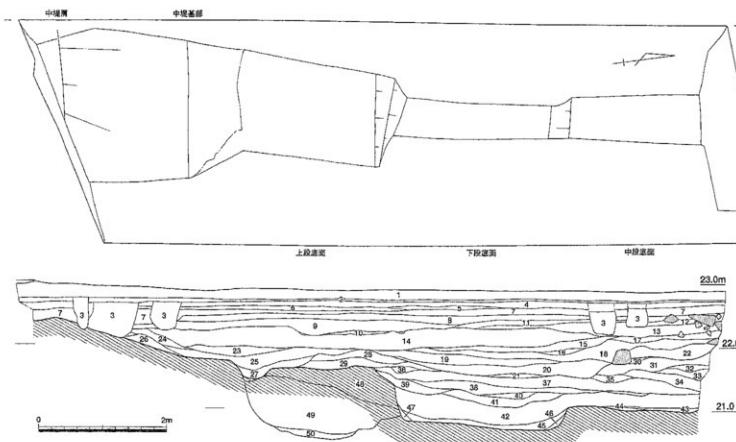


図10 トレンチ10 (1/60)

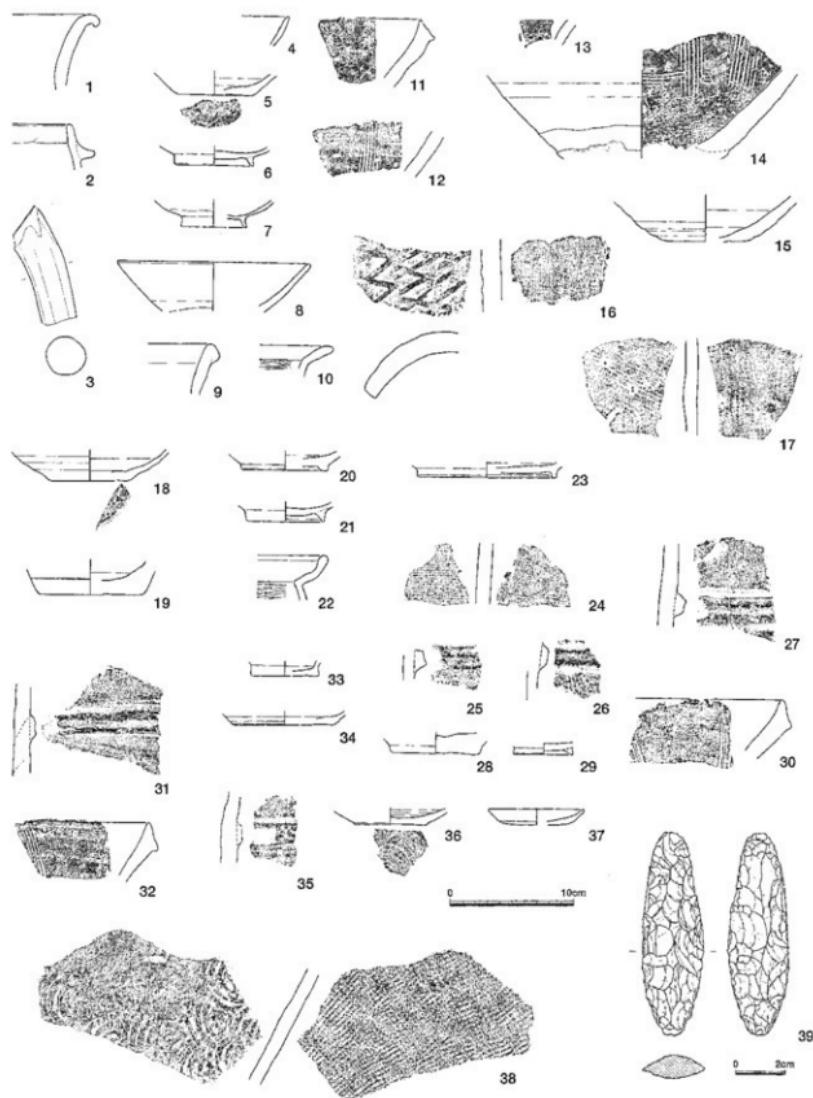


図11 外濠トレンチ出土遺物 (1/4 · 1/2)

1. 阿宮山古墳の調査

6) トレンチ10 (図10・14・15、図版9・10)

後円部の北側に設定したトレンチであり、中堤から外濠中央にかけてを検出した。水田の幅が狭いためトレンチの延長は11.2mである。堆積土中からの出土遺物が多いが、すべて中世の遺物である。

外濠の形状

後述のトレンチ9と同様、3段掘りの形状を示す。中堤の検出長さ2.6mである。外濠の検出長さ8.6m、深さは中堤肩から1.71m、中堤基部から1.09mと、これまでのトレンチにくらべれば浅くなる。濠底面は20.71m、中堤上端は22.42mである。

トレンチ南端から2.6mが中堤である。すべて地山からなり、斜面は20°と他のトレンチよりもかなり浅い角度をなす。現状で62cmの高さであるが、上端は削られており本来はもう少し高かったとみられる。トレンチの南側の水田は田面がトレンチ側よりも54cm低くなっている、中堤上部が削られているとみられる。現在内濠の北側部分は水田となっているが、北の丘陵側からの土砂の流入に加えて中堤を削平しての埋め立てがなされた可能性が強い。

中堤基部の北側2.9mが上段底面で、濠中心側にむかって若干傾斜する。この部分の先は急斜面をなして83cm下降し下段底面に達する。下段底面の幅は2.47mで、底面は北側に若干傾斜する。下段底面の北側には36cmの段差をもって中段底面が設けられる。中段底面の検出延長は2.06mで、ほぼ水平である。なお、地山は黄色～白色の粘土であるが、上段底面の中央～北半は穢く締まった礫層(48・49)で底部は砂礫層(50)になる。調査時にはこの部分も掘削し、外濠の一部である可能性も考えたが、底面中央がトレンチ東壁にむかって急激に上昇してW形の断面をなし人為的な掘削とは認めがたいことや礫の固結が著しいことなどから、外濠掘削以前に埋没した自然流路であると判断した。断面付近では礫層と地山粘土層との境界部が後にえぐれて溝状をなしている。平面図上段底面に示した一点破線は礫の範囲である。

堆積土と出土遺物

堆積土は下層(42～47)・中層下部(28～41)・中層中部(16～27)・中層上部(9～15)・上層(1

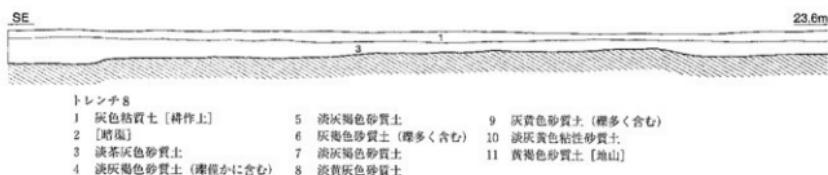


図12 トレンチ8 (1/60)



～8）に大別できる。

下層のうち主体を占める42層は下段から中段にかけて広がる褐色の粘土層である。厚さ20～40cmで、層中には纖維状の植物遺体が顯著に認められ、水中に堆積・形成された堆積層とみてよく、外濠のうち少なくともこのトレント付近は溝水していたとみてよい。遺物は含んでいない。

中層下部は砂あるいは砂混じりのシルトで、下層同様遺物は含まない。

中層中部は黒褐色粘質土で、中世の遺物を含む。下部の20・22・25・27層には纖維状になったひげ根が多く含まれ、同じものは中層下部の29層にも認められ、湿地ながら地表面が形成された時期があったことを示すようである。

中層上部は暗褐色シルト～暗灰色粘質土で、9層、14層下部から15層にかけては太さ2cm以下の枝や木片が多く含まれる。層間には薄い砂（10）層が見られ、10・14層はトレント18・19の堆積上部に最終的に形成された浅い沼状の湿地と一連の可能性がある。またトレント北端から、西側で1m、東側で1.9mの範囲には石材の集中が認められた。長さ30～40cmと大形の石材を含んでおり、水際の護岸あるいは埋め立てがなされたものとみられる。

中層上部・中部から出土した遺物は土師質高台付椀40～54、土師質椀56・57、杯58、皿59・60、備前焼皿61・62、東播系こね鉢63、土鍋64・65、土師質羽釜66、瓦質羽釜67、備前焼すり鉢68・69、白磁碗55、瓦70～78などからなる。このうち小形の高台付椀54は口縁部の内外にタールとみられる黒色物が付着しており、灯明皿として用いられたとみられる。

出土遺物には瓦片が多く含まれる。74は奈良時代の国分寺瓦である。73は凹面が粗い布目、凸面は無紋のタキの後ナデである。暗灰色で焼成は良い。丸瓦71は明灰色の発色であるが焼成は良く、73と組み合う可能性がある。主体を占めるのは黒色の煙瓦である70・72・75・76～78である。軒丸瓦70は三巴文に珠文を配しており、巴の頭部は中央でつながっている。これと同様の資料は備前国分寺講堂跡から出土している。平瓦は薄く小ぶりで、凹面には薄くコビキ痕が認められる。

土師質高台付椀のうち47は比較的高い高台をもち鎌倉時代に含めうるが、他は高台はきわめて低く

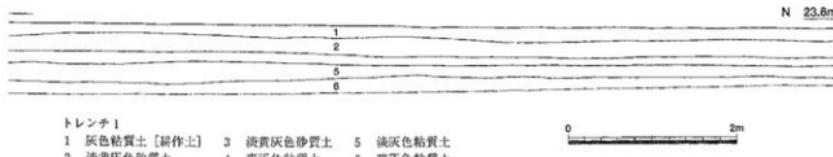
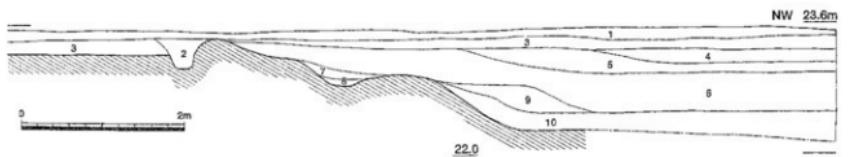


図13 トレント1 (1/60)

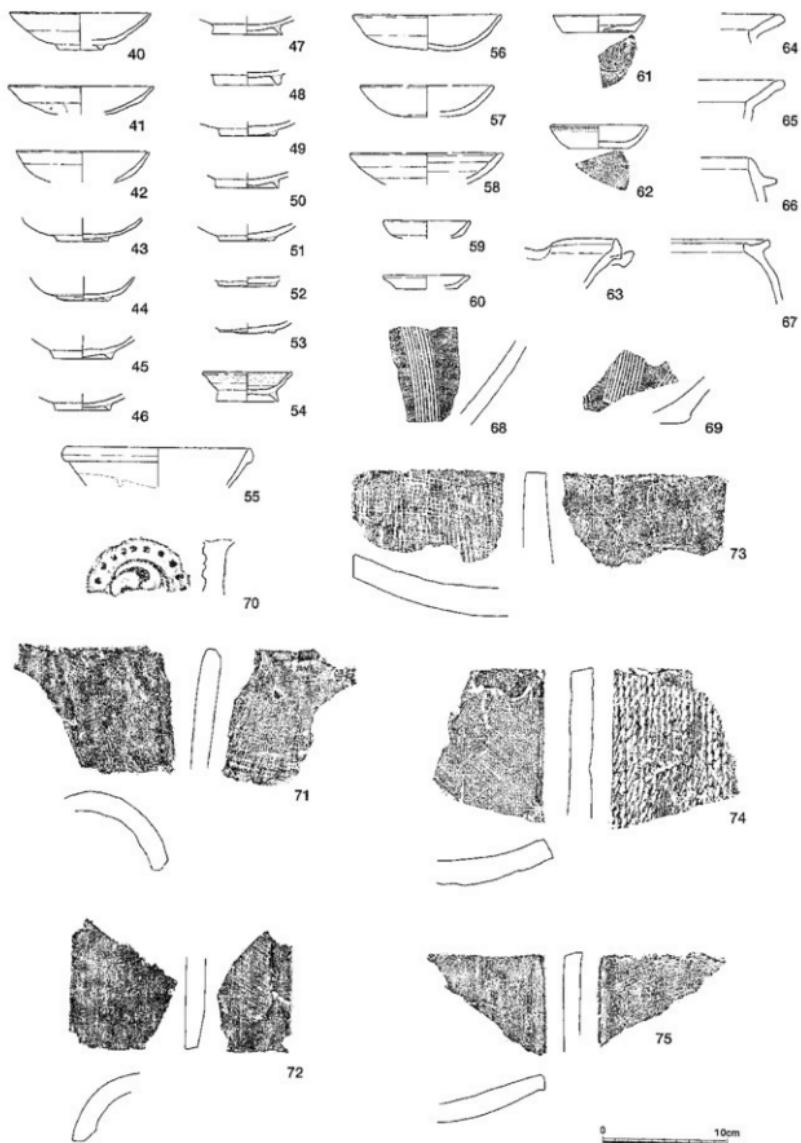


図14 トレンチ10出土遺物（1）(1/4)

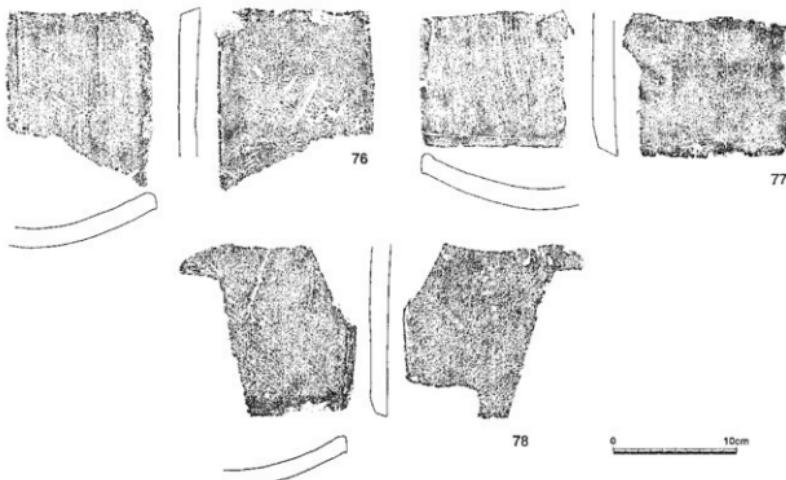


図15 トレンチ10出土遺物（2）(1/4)

51~53のように痕跡的になったものも含まれ、体部も40・41に見られるように径が小さく器高も低い。また、高台のない椀56・57も見られ、椀類は鎌倉時代末~南北朝時代に位置付けられる。さらに瓦類のうち焼瓦は室町時代と推定され、遺物の年代は中世全体にわたることになる。なお、室町時代の瓦は中層下部のうち南よりに多い傾向にあり、層位的に上方になるという傾向はない。

外濠の北東外側の緩斜面部に中世の集落が形成され、その遺物が濠内に流入したとみられる。また、中世瓦の多さからみて、そこには小堂も所在したと推定される。

7) トレンチ9 (図16、図版7)

後円部東側に設けたトレンチである。付近は内濠部分の水田よりも1.1m高い平坦な水田となっている。中堤と外濠の存在を確認した。

外濠の形状

トレンチ東端から17.5mの範囲で外濠を検出した。断面形はトレンチ10と同様で3段の底面をもつ。

中堤斜面（18層西下面）は35°の傾斜で48cm下降して後、緩斜面に変わる。この変換点（19層西端）よりも西側が中堤、東側が外濠底面である。中堤基部から東に延びる緩斜面（西上段底面）の幅は1.14mで10°の傾斜をなす。この緩斜面の東端は65~70°の急勾配で下降する。急斜面は西肩部から90cmの深さまで続くことを確認したが、底面まで掘り下げることができなかった。確認した下端からさらに50cm程度で底面に至るとするなら、下段底面の標高は19.8m、西側の肩からの深さ1.5m、中堤基部からの深さ1.8m程度となる。下段の東肩幅は3.9mである。

下段の東肩の外側には中段底面が長さ5.8mにわたって広がる。中段底面は平坦であるが、東にむかって緩やかな下降を示す。高さは東端で21.2mであり、その東側の上段底面とは42cmの段差をなす。中堤基部から中段東外側肩までの幅は11.1mである。東上段底面は検出範囲で5.6mを測る。トレンチ

1. 両宮山古墳の調査

東端で底面がやや上昇の傾向を示すが、このまま上るのか、改めて明確な斜面をなすのか判断しがたい。トレンチ東端は水田の端で、その外側は小径・用水路であるためトレンチを東に延長することはできなかったが、こうした地割りが外濠の端を反映していると考える。

検出した中堤肩を基点とすれば濠幅は検出範囲で17.3mで、東側の小径付近まで広がるとした場合19m前後となる。深さは東上段底面まで25cm、中段底面まで75cm、下段底面まで推定2.2mとなる。

堆積土

堆積土は基本的に砂礫であり、後述のように地山も砂礫であるため濠内・外の区分を、かなりむずしいものにしていた。下段の堆積土（36～38層）はそれらと大きく異なり黒色粘質土となり蘗の根茎とみられる有機物小片を含むほか、36層からは加工板材の小破片が出土した。また、中段底面に広がる35層も黒色の粘土である。これらの層はトレンチ10の42層、トレンチ49の33層など構築後初期の堆積層に似るが粘質が弱く黒色が強いなど、若干性状が異なる。この層の上層になる28層には土師質高台付椀の小片が含まれ中世前半の堆積と判断でき、下段の堆積土の形成もそれに近い時期とみられる。ただし、これらの層の下方に初期の堆積土が形成されている可能性は強い。また、28層の年代からみて、堆積土の主体を占める砂礫の堆積は、他のトレンチと同様、中世に形成されたとみられる。

出土遺物は中世の土器類の小片のみである。

中堤

トレンチ西部は中堤である。検出した肩部から西の内濠肩までの幅は現状で21.5mを測る。

外濠側肩から基部までの高さは34cm、水平距離52cmであるが、トレンチ西端の盛土高さで復元すれば、それぞれの数値は10cmずつ大きくなる。

断面西部では厚さ26cmの盛土下に旧表土（49層）が認められる。中堤基部から西へ3mの範囲は旧表土を40cm前後掘り込んだ後、盛土を行って構築されている。この部分の盛土は暗黄色土で上部の盛土よりもやや暗く、47層には白色砂のブロックを含む。

中堤を形成する盛土は黄色粘質土で、後述の中堤上層盛土に相当する。内濠側から外濠側にむかって順次盛っており、盛土の単位はかなり大きい。

8) 52地点(工事立会) (図17・11)

調査中に実施した河川護岸工事の立ち会い調査記録であり、調査精度は他とは異なるが外濠についての情報であるため併せて掲載する。後述の東中堤部(51地点)と同じく、台風災害によって被害を被った箇所の災害復旧工事に伴うものであり、便宜上地点名を設定した。

調査箇所は中堤の前方部東隅角に設けられた余水吐(荒手)から南東に流れる水路の西側で、護岸工事延長は17mである。

掘削壁面で外濠とみられる下がりを検出した。浅い2段掘り状の断面を示し、砂礫および砂が堆積している。下層の6層からは奈良時代の須恵器杯23が出土した。なお、上層の2層は工事前の石垣裏込め土が重複している可能性もある。

底面は平坦で北にむかって緩やかに上昇し、南側4.4mの部分が皿状に深くなる。注目されるのは外濠がきわめて浅いことで、西80mに設けた後述のトレンチ43での底面16.56mに対し、ここでは最も深い部分で17.26m、平均的な部分で17.59mと、70～100cmの上昇を示す。

なお、地山は疊混じりの黄色粘土～砂礫であるが、北部では黒色粘土となる。黒色粘土は幅6m以上、深さ2.2mで、外濠の一部である可能性も検討したが、トレンチ43と同様、古墳に先行する埋没

河道と判断した。

9) トレンチ43 (図18・11、図版10・11)

前方部前面のやや東側、中堤外側に設定した長さ20mのトレンチである。中堤の南東側に小水路が設けられているためトレンチ北西端は中堤南東側から1.9mの距離をとった。トレンチの北西部にはトレンチと直交して暗渠が所在しており、これを切断した場合水が著しく流入する可能性が強かったため、この部分は掘り残した。

外濠の形状

後内部側と異なり外濠は浅く、段は低いがほぼ2段掘りの断面形状を示す。

検出幅はトレンチ北西端から16.7m、現中堤基部からで18.6mを測る。南東側斜面上部の傾斜は8°と、きわめて緩やかで、肩が流れて外側に広くなっている可能性もある。斜面が上がりきった位置を境として南には水田（5～8層）が掘り込まれており、かつてはこの部分に濠の形状を反映した地割りが残っていたとみられる。濠の深さは南東肩部から1.08m、現中堤の下段肩から2.86mを測る。

南東側斜面は端部から2m、高さ17.4mで傾斜が13°に変わる。この斜面の下端、17.2mに幅70cmの緩斜面、その下方16.95mに幅1.8mのテラス（上段底面）が設けられたのち、下段底面に至る。17.2mの緩斜面を上段底面とし、16.95mのテラスを中段底面とみることもできるが、前者は幅が狭いため主要な底面とは扱わないでおく。上段底面と下段底面の高さの差は16cmと低く、その間の斜面もさほど急角度にはならない。これは北西側においても同様である。下段底面の幅は6.7mで緩やかなカーブをもち南東寄りの部分が最も深くなる。トレンチ北西側には上段底面がやや傾斜をもって設けられており検出幅は2.7mである。外濠と中堤の接続状況は不明であるが、南東側よりも急な角度で立ち上るとみられる。なお、濠の底面幅に上段底面を含め、北西上段底面の端がトレンチ端付近までとすれば10.3m前後となる。

堆積土と出土遺物

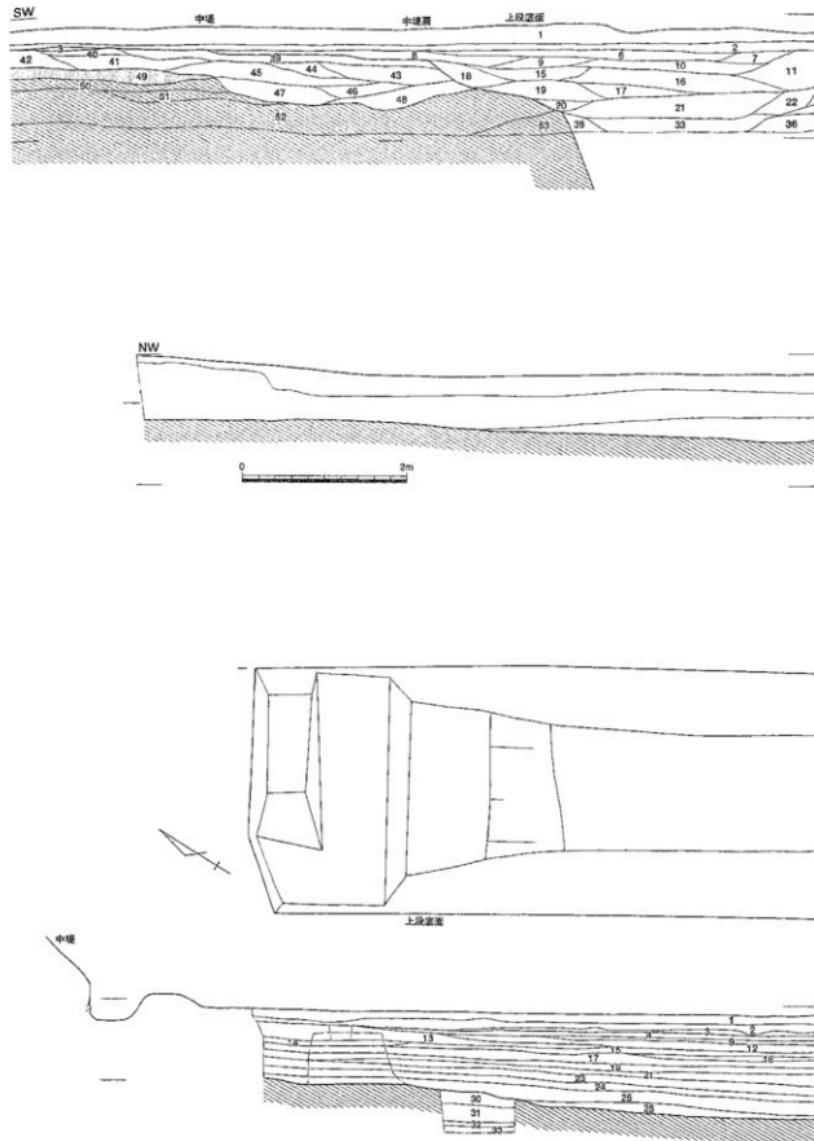
厚さ10cm前後の粘質土が整然と堆積しており、外濠の埋積が順次に進んでいったことがうかがえる。耕作土の下面にはカラスガイの破片が認められ、かなり新しい時期まで水はけの良くない環境であった可能性がある。上半の21層までが遺物を含んでおり、とりわけ16・17・20層からは小片・細片が主体であるがかなりの量の遺物が出土した。トレンチの南東部から外側斜面上方にかけて出土が多く、外濠の南東外側から流入したものとみられる。中世前半の土師質高台付椀29、杯28などの破片も含まれるが、16層の備前焼すり鉢30は室町時代（15世紀前半）の資料であり、これらの層の形成は15世紀代とみられる。中世の遺物に混じって、さらには上方の堆積土にも埴輪小片が含まれる。27はトレンチの北西端、19層から出土したやや大きい破片で、B種ヨコハケが認められる。24～26は南西斜面上方からの出土である。いずれも窯窓焼成で中期後半の資料であるが、出土層位・あり方からみて、南側に所在する森山古墳・正免東古墳の埴輪が流入したものと推定できる。

濠底の堆積28・29層は粘土に近い黒灰色粘質土で、地山から浮き上がったとみられる小礫を含む。

トレンチ南東端では基盤層を25cm前後掘削して設けられた水田を検出した。水田の年代は不明であるが、層の接続から見て、かなり新しい時期に造成されたようである。

地山は外濠南東肩部に薄く礫層が残り、それよりも下部が黒褐色粘質土～粘土、濠底付近で再び礫・砂層（30～32層）となる。礫層下には黒色のシルト（33層）があり、層の厚さは1m以上とみられる。この層中には流木とみられる径10cm近い木材が含まれており、これまでが濠堆積土となる可能

1. 両宮山古墳の調査



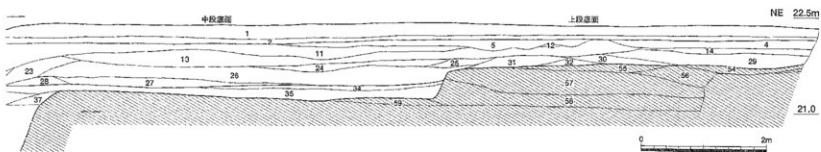


図16 トレンチ9 (1/60)

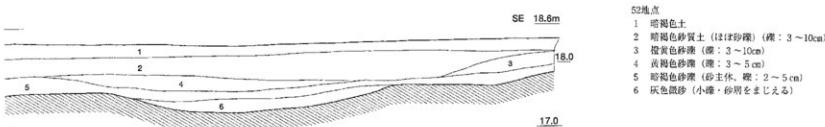


図17 52地点 (1/60)

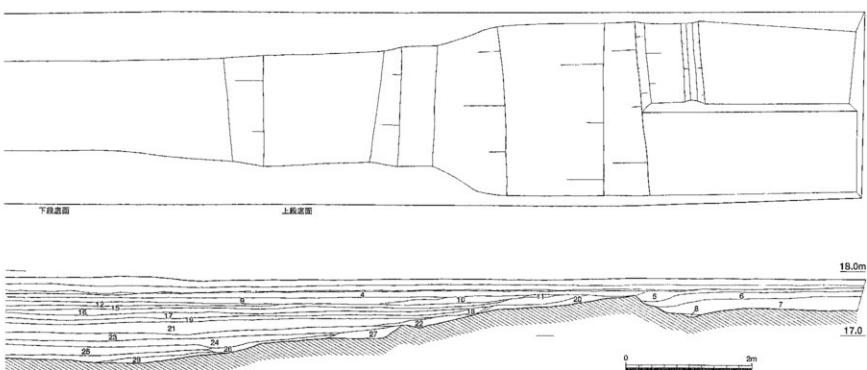


図18 トレンチ43 (1/60)

トレンチ9

1 明褐色粘質土【耕作土】	23 黒褐色砂質土(小粒含む)	41 純黄色粘質土(黄色・褐色ブロックからなる 粒: 5~10cm含む)
2 明褐色粘質土(小礫・砂を含む)	24 褐色粘質土	42 黄白色粘質土(黒褐色土ブロック含む)
3 明褐色砂質土	25 明褐色砂	43 純黃褐色粘質土(細粒含む)
4 褐灰色砂質土(小礫含む)	26 明青緑色砂質土(ほほ砂塵、東半は黒色強くなる) (深: 4~10cmを多く含む)	44 黄褐色粘質土(小粒含む)
5 黄灰色粘質土	27 黄色砂塵	45 純黄褐色粘質土(黄色・褐色ブロックからなる 粒: 1~5cm含む)
6 明黄色粘質土	(砂主体) (深: 2~4cmを含む)	46 純褐色粘質土(深: 2cm含む)
7 灰色粘質土(細粒多く含む)	28 緩灰色粘質土	47 黄褐色粘質土 (白色砂ブロック含む 粒: 7cm含む)
8 黑褐色粘質土	29 黄褐色砂質土(深: 3cm含む)	48 黄色粘質土(暗灰色土小ブロック含む)
9 緩褐色砂質土	30 暗褐色	49 純褐色粘性砂質土(砂含む)【旧表土】
(粗砂・粒: 4~8cmを多く含む)	31 褐色砂質土	50 緩褐色粘質土(深少含む)【以下地山】
10 稠灰色砂質土	32 黄褐色	51 黑灰色粘質土
11 緩褐色砂塵(深: 4~10cm含む)	33 暗褐色砂塵(深: 2cm前後)	52 灰色壤
12 純褐色砂質土	34 黑褐色粘質土	53 黄灰色粘土
13 緩褐色砂塵(深: 2~5cm)	35 暗褐色粘土	54 緩褐色砂質土(小粒多く含む)
14 明褐色砂	36 黑褐色粘質土(植物遺体小片、木片含む)	55 明褐色砂質土
15 褐色砂塵(深: 2~10cm)	37 黑褐色粘質土(穀含む)	56 緩褐色粘土(深: 4cm少含む)
16 黃褐色砂質土(ほほ砂層)	38 黑褐色粘質土	57 純褐色砂塵(深: 3~5cm)
17 青灰色粘質土(深: 2~5cm含む)	(ほほ粘土 植物遺体を含む)	58 緩褐色粗砂
18 明褐色砂塵(深: 5~8cm)	39 明褐色粘質土	59 緩褐色砂塵(深: 3cm)
19 黄褐色粘質土(灰片含む)	(砂・小礫多く含む)【以下底土】	
20 黑褐色粘質土(ほほ粘土)	40 暗褐色粘質土(小粒含む)	
21 純褐色砂塵(深: 4~6cm含む)		
22 黃褐色砂塵(深: 4~8cm)		

トレンチ43

1 純褐色粘質土【耕作土】	13 黒褐色砂質土	25 黑褐色粘質土(砂・小礫を含む)
2 純褐色砂質土【耕作土下部】	14 黄褐色粘土	26 暗褐色粘質土
3 純褐色砂質土	15 明褐色粘質土	27 黑褐色粘質土
4 黄褐色粘質土【旧耕作土】	16 明褐色砂質土	28 黑褐色粘質土
5 黑褐色砂質土 (暗褐色土ブロック含む)【水田造成土】	17 純褐色粘質土	29 黑褐色粘質土(小粒多く含む)
6 黑灰色粘質土	18 純褐色砂塵(深: 3~5cm)	30 黄褐色砂塵 (深: 3~5cm)【以下地山】
7 純褐色粘質土【旧水田層】	19 黄褐色粘質土	31 純青緑色砂塵 (粗砂主体、深: 3cm前後)
8 黄褐色粘質土	20 純褐色砂質土	32 純褐色粗砂
9 黄褐色砂質土(小礫含む)	21 暗褐色粘質土	33 黑褐色シルト
10 黄褐色粘土(細砂・砂を含む)	22 暗褐色砂質土(深: 1~3cm多く含む)	
11 純黃褐色砂質土(細砂・砂を含む)	23 褐色粘質土	
12 純褐色砂質土(細粒含む)	24 暗褐色粘質土	

性も考えたが、古墳に先行して所在した埋没河道の堆積土と判断した。

10) トレンチ44・45・46・47 (図19・20)

中堤南隅角の前面、県道南東側の水田は帆立貝形古墳とも見うる形状を示し、埴輪片も以前表採されている。この部分に古墳が所在したかどうかの確認を目的として4本のトレンチを設定して調査を進めたが、結果としてこの水田は古墳ではなかったことが判明した。

トレンチ44では耕作土直下に地山が広がる。

トレンチ45ではトレンチ付近から地山が南に下降をはじめると推定される。トレンチを横断する形で幅64cm、深さ11cmの溝を検出したが、溝の時期は明らかでない。

トレンチ46では地山が西に下降する状況が判明したが、遺物の出土はない。

トレンチ47では地表下80cmと地山は深い。堆積土のうち9層は旧水田層の可能性が強く、トレンチ東端の溝はそれに伴う可能性がある。いずれの層からも遺物の出土はない。

この4本のトレンチのうち、トレンチ44は外濠外縁の推定線に至近の位置にあるが遺構は認められず、外濠はトレンチまでは広がらないことが判明した。また、削平された可能性は否定できないが、外堤の存在を示す状況は認められなかった。トレンチ47では後述の48よりも深い位置で地山を検査しており、それはトレンチ46に見られた地山の勾配とも整合しない。トレンチ47付近は後世かなり削平

1. 間宮山古墳の調査

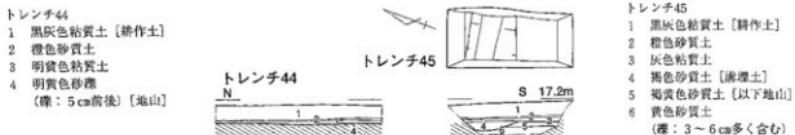


図19 トレンチ44・45 (1/60)

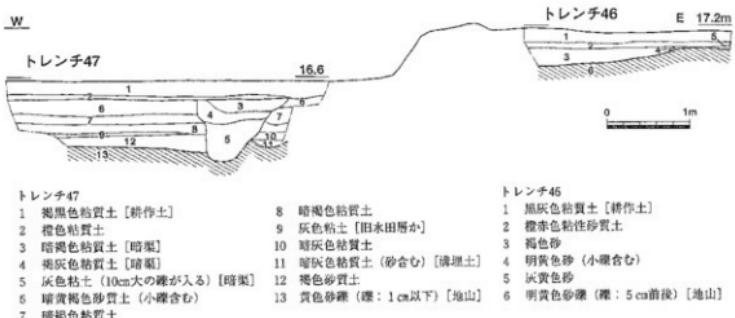


図20 トレンチ46・47 (1/60)

を受けたものとみられる。

11) トレンチ48 (図21・11、図版11)

県道の南下側、中堤南隅角の外側に設定した長さ8mのトレンチである。

トレンチの北端で外濠の端部とみられる下がりを検出した。したがって、外濠の主要部は県道下に広がることになる。外濠の検出幅は1.3m、深さは堆積土20層上面からで32cmを測り、検出底面は15.64mである。

上層堆積のうち5層は水田面かさ上げの埋め土とみられるが、外濠端部の上方外側に所在しており、近世ないし近代まで外濠を反映した地割りが遺存していた可能性を示している。

外濠肩部付近には、濠の埋没後に2条の溝が設けられている。溝1は幅1.45m、深さ28cmを測り、褐色粘質土が堆積する。それに先行する溝2は幅2.29m、深さ24cmの幅広の溝で灰色の粘質土が堆積する。溝2からは備前焼すり鉢32が出土しており室町時代（15世紀前半）に位置付けられる。

外濠は肩部が溝1・2によって削られているため小さくなってしまい、復元すれば検出幅は1.5mとなる。肩部からの斜面はきわめて緩やかに下降する。検出した底面は上段であり、トレンチ外側で下がると思われる。埋積土は上部が砂、下部が砂礫となる。検出範囲の中央部では8~20cmの疊が集積した状態で認められた。流入・堆積した状態ではなく、人為的に投入されたものとみられる。また、この疊の集積の北側では埴輪片31が出土した。ただし、埴輪片に近接して出土した土器細片は中世の土器質皿とみられ、この部分の堆積は中世に形成されたとみられる。

地山は砂礫層（26層）で、その下は黒色のシルト（27層）になる。黒色のシルトはトレンチの南端下部にまで広がっている。

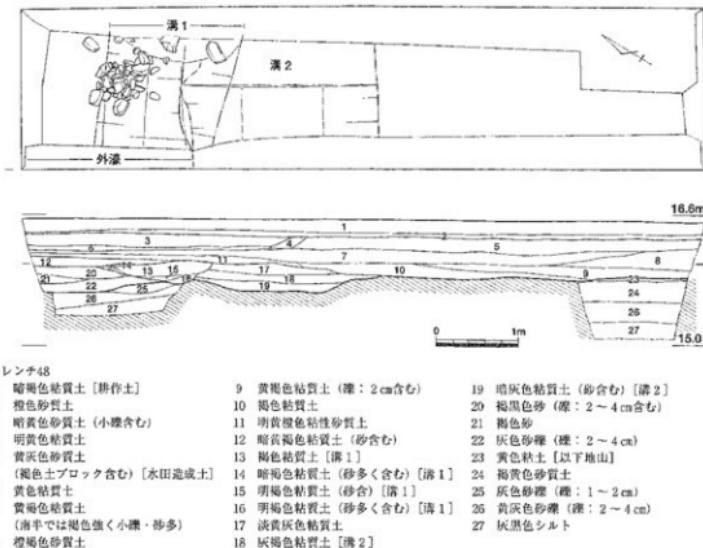


図21 トレンチ48 (1/60)

12) トレンチ49・50 (図22、11・図版12)

前方部南西側中堤の外側に設けたトレンチである。当初は長さ12mの49のみを設定する予定であったが、外濠がそれに収まらないことが判明したため、長さ7mのトレンチ50を追加した。ここでは両、レンチを一連のもとして記載する。トレンチ50が49の北6mに位置している。なお、トレンチ幅はmであるが、壁面の崩落を防ぐため壁面の傾斜を大きくとったためトレンチ底は狭く、ここではその部分のみを表示した。

トレンチの形状

トレンチ50の西端に濠の外肩があり、濠の検出幅は17mとなる。トレンチ49の東、道路東側溝の上付近に中堤肩を想定すれば幅は23mに達する。濠底は15.25mで、肩部からの深さ1.0mを測る。

トレンチ49の東端に低い段があり、そこから西はほぼ水平な下段底面となる。下段底面の幅は7.6mである。トレンチ49の西端には砂層(35層)が所在しており堆積層の一部とも考えたが、初期の堆積(33層)がその部分で終わるために、35層は地山の一部と判断した。底面はこの平坦部から再度上昇してトレンチ50東半の上段底面に接続するとみられる。断面図ではトレンチ49の上段底面とトレンチ50のそれは36cmの差をもつが、これは上段底面がトレンチ直交方向にかなり傾斜していることを示すものかもしれない。トレンチ50西側の濠端部近くの斜面は17°の緩傾斜をなす。

なお、トレンチ設置位置の西側の水田は西にむかって順次下降しており、西側に浅い谷が入っていると推定でき、そのため外濠の肩は他の部分よりも低くなるとみられる。外濠外側に外堤が設けられていたとするなら、トレンチ50の肩部に盛土が遺存する可能性が考えられるが、調査範囲ではそ

1. 両宮山古墳の調査

した状況は認められなかった。

堆積土

上部には砂礫が厚く堆積し、中層以下には主に砂礫と砂質土が互層状に堆積している。

トレンチ49ではスキ床層下には薄い礫（4）層が広がる。その下には厚さ30cmの砂礫（9・10）層があり、これは後述のトレンチ28の14・15世紀の砂礫堆積に対応するものかもしれない。それ以下は砂質土・砂層と薄い砂礫層がほぼ水平に交互に堆積しており、下部では粘質土の比率が高くなってくる。地表下1.9mで濠底に至るが、濠底上には20cm前後の厚さで紫褐色～黒褐色の粘土（33層）が堆積している。この粘土はこれより上層の粘質土とは異なり、細かく均質な粘土で層中に有機物小片を含有する。初期の濠堆積土とみられ、濠が滲水した状態であったことを示している。

トレンチ49の26層から土師器杯34が、22層から土師器皿33が出土した。33の底面調整はナデである。細かい年代を判断しがたいが、おおむね古代の遺物とみられ、17～27層付近が古代、9・10層が中世の堆積と考えておく。須恵器皿36、土師質皿37、須恵器壺38はトレンチ50の上層砂礫（8～13）層からの出土で、図示はしていないが古代の瓦片も出土しており、国分寺跡から流入したものとみられる。埴輪片35はトレンチ50の16層からの出土である。このほか、トレンチ49の中～下層とみられる排土からサスカイト製の尖頭器39が出土した。画面加工の石槍で、長さ8.3cm、幅2.5cmを測る。単独の資料であるため年代を確定することはむずかしいが、縄文時代早期前後の遺物とみられる。

13) トレンチ28 (図23・24、図版13・14)

後円部の西、中堤の外側に設定した東西方向のトレンチである。外濠幅が予想以上に広かったためトレンチの延長は29.3mに達する。外濠は深く、一部で深掘りを試みたが底面に達せず、また、堆積層が砂礫からなりトレンチ壁面の保持がむずかしかったためトレンチ中央部の掘り下げは行っていない。一点破線の範囲は壁面の崩壊により固定できなかった箇所である。

外濠の形状

中央部の断面形状が不明であるが、トレンチ9と同様の3段掘りになるとみられる。

外濠の西端は溝1の西肩部付近であり、そこからトレンチ東部の中堤肩までが20.3m、中堤の基部は流路によって削られており、復元すればその箇所までの幅は18.5m前後となる。深さは現地表から4.1m以上であり、確認できた下端から若干深い16.9m付近を底と仮定すれば、外側肩からの深さは3.3mとなる。

西側斜面は9°と浅い角度で下降しており、掘り下げ停止面以下はピンポール等での確認であるが、4.2mにわたって続く。19.34m付近で傾斜が強くなり、18.4mで再度緩斜面となり、これが中段底面になると思われる。一方、東側斜面は中世の流路によってえぐられており、急角度で下降した後いったん上昇し、再び38°の斜面となって下降する。この斜面が下降を続けて下段底面に達するとみられる。なお、17.6～17.8mの一点破線が掘り下げ停止面であり、破線で示した斜面はピンポールによる確認である。斜面は急角度とはいえないトレンチ9・10のそれよりは緩やかであり、濠底の深さに応じて斜面の角度を変えているとみられる。

中堤斜面から上段底面にかけての部分は失われているが、幅1～1.5mの上段底面が21.2m付近に所在したと推定される。

堆積土

堆積土は最上層1～15、上層16～80、中層81～99・102、下層100・101・103～112という大別が可

能であり、上・中層は砂礫主体、下層は砂質土・粘質土である。

最上層 トレンチ西部、耕作土下の7~10層は中堤盛土と同質の黄色土であり、水田面のかさ上げのため中堤を削りその土で埋め立てを行っているとみてよい。また、上層の3層は造成土とみてよく、5・6層もその可能性がある。

これらに先行する12層は10cm前後の角礫を多量に含む層であるが通常の砂礫層のように礫間に砂が含まれず、人為的に埋設された可能性がある。上記の埋め立て・造成土7~10層と一連とのものとみれば暗渠的な施設、下記の14層に伴うとすれば逆に部分的な埋め立ての下部ないし基礎と解釈が変わってくるが、どちらに見るべきか判断がむずかしい。12層の礫間からは唐津皿79、近世とみられる瓦片80・81が出土しており、この層の形成が江戸時代前半頃であることを示している。12および7~10層の下に所在する13・14層は灰色粘質土で以下の層とは異なり、造成以前の水田層とみられる。

上層 29~31層は黒褐色の砂質土で、安定した面が形成されたことを示しており、中世の集落遺跡がこの面に広がる。検出した遺構は柱穴（P）2基、溝2条である。P1は径64cm、深さ50cm、P2は径39cm、深さ54cmを測る。P2に切られる溝1は幅54cm、深さ24cmを測る。やや規模が大きい溝2は断面が半円形に近く、幅1.60m、深さ54cmを測り、底面近くを除いて角礫が密に堆積している。なお、溝2西側の90層は付近の堆積層とはやや異なり綺まっており埋め土の可能性があるが、中堤の盛土とは異なる。

この面の東端、後述の中堤の西側には幅5mにわたって砂礫が堆積している（28・49~52・54・56・64~67・68~71・73~78）。底面の形状から明らかにように流路が位置をずらしながら埋没していった状況をうかがうことができ、集落遺跡が展開した時点では埋没が進み幅2.6m、深さ50cmの浅い流路になっていたようである。東側に所在する流路Aは幅3.0m、深さ1.45mを測り、中堤西側面を削るように流れ、後に流路が西に振れて幅3.0m、深さ1.48mの流路Bが形成されている。流路はこの後埋没が進んで小さくなり、上記の水田（14層）が形成された時点では幅90cm、深さ45cmの小規模な流路となる。

この谷川（流路）は最終的には位置を移して現水田の間に所在する小水路になったとみられるが、現在、北西から流下する谷川はトレンチの北方で中堤を横切り内濠部分の溜池一両宮池に流れ込むようになっており、水利系統の変更が流路の縮小をもたらした可能性がある。

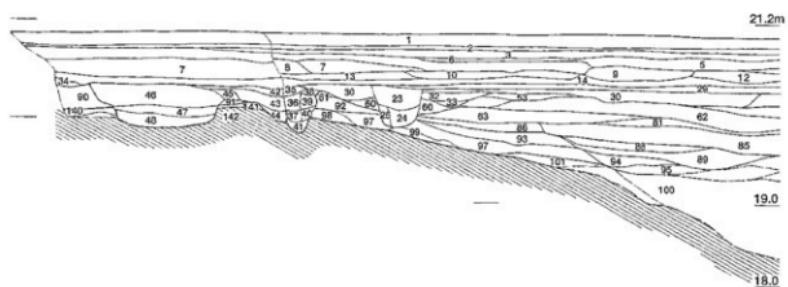
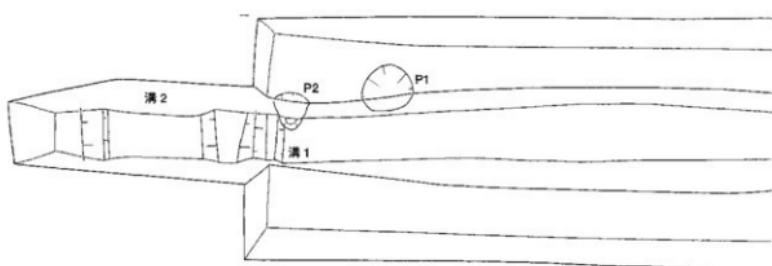
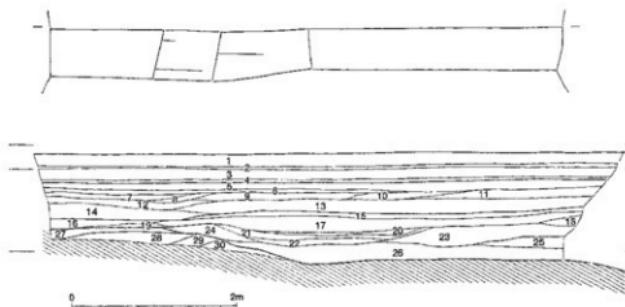
流路堆積からの出土遺物が少なく、また、それらを分層しながら取り上げを行うことが不可能であったため、流路の存続期間についてはやや大まかなものにならざるをえない。出土遺物は備前焼すり鉢83~87、同甕88、白磁碗89などからなる。白磁碗89は12世紀にさかのほる可能性があるものの、備前焼は83・84・85が南北朝（14世紀後半）、86・88が室町（15世紀）、87が安土桃山（16世紀末）時代に位置付けられ、また、椀類は小片で図示できるものが無いが高台をもつ破片は認められない。これらのことから、流路の存続期間は14世紀から15世紀に中心があり、16世紀に埋没したとみられる。

上述の柱穴・溝からの出土遺物は溝1の鉄滓のみである。そのほか、トレンチ中央の30層からは甕91~93が出土した。全形を復元するには至らないが1個体のまとまった破片である。しかしながら、変化が少ない器種であり年代の確定はむずかしく、29~31層の年代は15世紀前後と言わざるをえない。

なお、上記の資料のうち84と85は同一個体の可能性が強い。備前焼すり鉢82はトレンチ西端の14層上面からの出土で、83と同様14世紀の遺物である。90は59層出土の備前焼壺底部である。

中・下層 堆積の中層は砂と砂礫の互層をなすが西部では粘質土の比率が高くなる。出土遺物は僅少

1. 両宮山古墳の調査



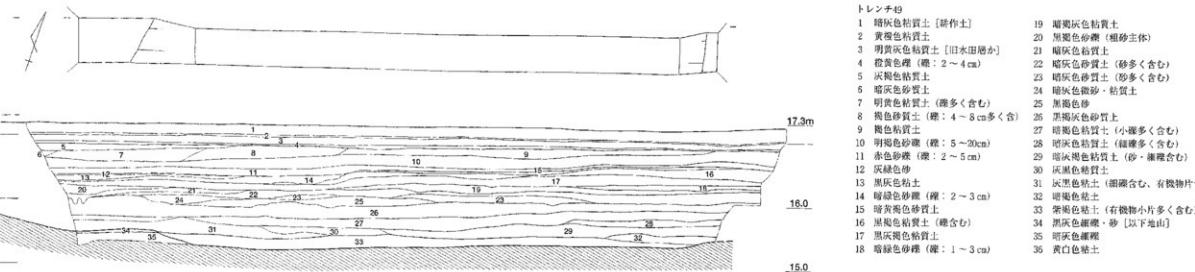


図22 トレンチ48・50 (1/60)

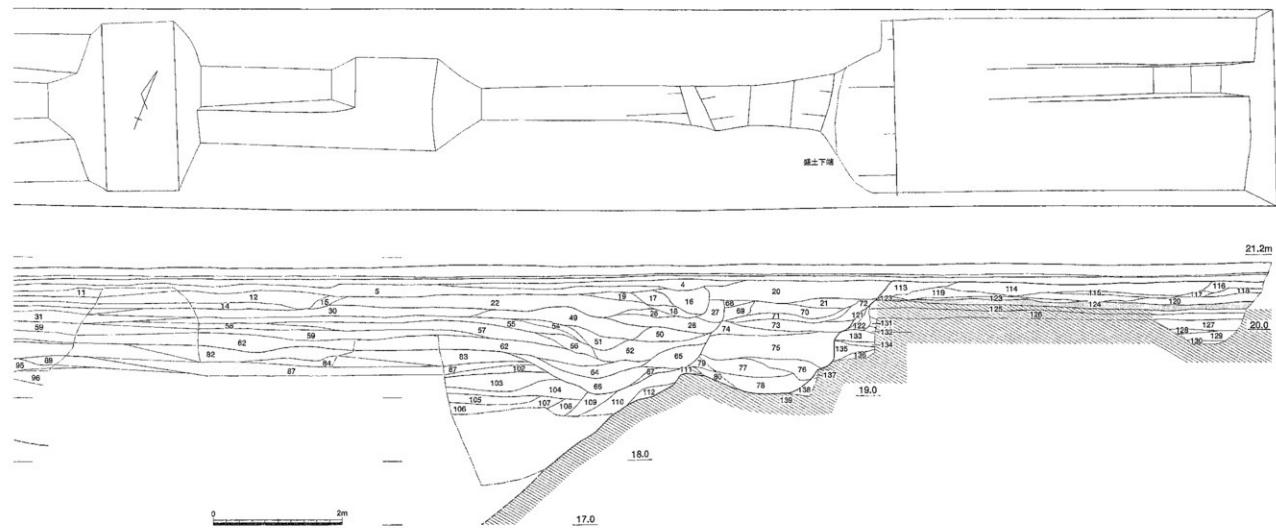


図23 トレンチ28 (1/60)

トレンチ50

- 1 暗灰色粘質土〔耕作土〕
- 2 棕黃色粘質土
- 3 紅褐色粘質土
- 4 緑灰色粘性粘質土
(2 cm前後の層多く含む)
- 5 灰褐色粘質土
- 6 灰色砂礫〔深さ：1～3 cm〕
- 7 黄褐色粘質土〔砂含む〕
- 8 灰色砂礫〔粗砂主体〕
- 9 明灰色色
- 10 灰褐色砂礫〔深さ：5～15 cm〕

トレンチ28

- 1 暗灰色粘質土〔耕作土〕
- 2 紅褐色粘質土
- 3 灰褐色粘質土〔造成土〕
- 4 明褐色粘性粘質土
- 5 紅褐色粘質土〔造成土か〕
- 6 紅褐色粘質土〔小塊含む〕
- 7 灰色粘質土
(地山ブロック含む)〔造成土〕
- 8 灰色粘質土〔造成土〕
- 9 黄褐色粘質土〔造成土〕
- 10 灰色砂質土〔造成土〕
- 11 灰褐色砂質土
- 12 灰色面〔繩を用いた埋め立てか〕
- 13 明灰色粘質土〔旧田尻層か〕
- 14 明灰色粘質土〔砂含む〕〔旧田尻層か〕
- 15 黄褐色粘質土
- 16 緑褐色砂礫〔深さ：5～8 cm〕
- 17 灰色粘質土〔砂、礫含む〕
- 18 灰褐色砂礫〔小塊主体〕
- 19 灰色粘質土〔礫含む〕
- 20 暗灰色粘性粘質土
- 21 明褐色粘質土
- 22 黄褐色砂質土〔砂、小塊含む〕
- 23 灰褐色砂礫〔柱穴1〕
- 24 灰色粗砂〔礫含む〕〔柱穴1〕
- 25 灰色粗砂〔柱穴1〕
- 26 暗褐色微砂
- 27 明褐色砂質土〔深さ：2～10 cm〕
- 28 灰色砂礫〔深さ：4～6 cm〕
- 29 灰褐色砂質土
- 30 黑褐色細礫
- 31 黃褐色粗砂
- 32 黑褐色細礫〔土坑か〕
- 33 暗褐色砂質土
- 34 灰褐色粘質土
- 35 黄褐色粘性粘質土
(深さ：1～7 cm)〔柱穴2〕
- 36 黑褐色砂質土〔礫含む〕〔柱穴2〕
- 37 黑褐色砂質土〔柱穴2〕
- 38 暗褐色粗砂〔礫含む〕〔柱穴2〕
- 39 暗褐色砂質土〔礫含む〕〔柱穴2〕
- 40 暗褐色砂質土〔柱穴2〕
- 41 黑褐色粘質土〔砂多く含む〕〔柱穴2〕
- 42 灰褐色粘質土〔粗砂、礫多く含む〕
- 43 黑褐色砂〔深さ1〕
- 44 暗灰色砂礫〔深さ1〕
- 45 暗褐色粘質土〔砂多く含む〕
- 46 灰褐色粘質土〔粗砂、礫含む〕〔柱2〕
- 47 灰褐色砂礫〔粗砂主体〕〔柱2〕
- 48 灰褐色砂礫〔深さ：3～5 cm〕〔柱2〕

- 11 暗褐色砂質土〔深さ：4～5 cm〕
- 12 灰褐色粘質土
- 13 暗褐色砂〔深さ：3～8 cm〕
- 14 暗褐色砂質土
- 15 灰色シルト
- 16 灰褐色粘土
- 17 黑褐色粘性粘質土〔細礫含む〕
- 18 暗綠色砂
- 19 黑褐色粘質土〔砂、砂含む〕
- 20 灰色砂礫〔小・細礫〕
- 21 灰色粘質土

- 22 暗灰色砂〔小塊〕
- 23 黑褐色粘質土〔砂、小塊含む〕
- 24 暗褐色粘土
- 25 黑褐色粘質土〔小塊含む〕
- 26 灰褐色粘土
- 27 灰色粘土〔以下地山〕
- 28 明黃灰色粘質土〔砂含む〕
- 29 暗灰色粘土〔小塊含む〕
- 30 灰黃色混じり粘土
- 49 暗褐色砂質土〔砂と砾の互層〕
- 50 暗褐色砂質土〔深さ：3～8 cm〕
- 51 暗褐色砂〔深さ：3～6 cm〕
- 52 暗褐色砂質土〔砂多く含む〕
- 53 暗褐色粘質土〔砂多く含む〕
- 54 暗褐色砂質土〔深さ：5～8 cm〕
- 55 暗褐色砂質土
- 56 貝殻褐色砂質土〔深さ：3～4 cm〕
- 57 暗黃色砂質土〔砂多く含む〕
- 58 灰褐色粗砂
- 59 暗黃色砂質土
- 60 灰褐色粘性粘質土
- 61 黑褐色砂
- 62 灰褐色砂疊〔深さ：5～10 cm〕
- 63 黄褐色粗砂
- 64 黑褐色砂〔深さ：2～4 cm〕
- 65 黑色砂〔深さ：5～15 cm〕
- 66 黑褐色砂質土〔深さ：10 cm前後〕
- 67 灰褐色粘土
- 68 暗黃褐色砂質土
- 69 暗黃色砂質土〔深さ：1～6 cm〕
- 70 灰褐色砂疊〔深さ：8～20 cm〕
- 71 明褐色砂
- 72 明褐色粘質土〔細礫含む〕
- 73 黄褐色砂質土
- 74 暗褐色砂質土〔深さ：5～10 cm〕
- 75 黑褐色砂疊〔深さ：3～12 cm〕
- 76 黑褐色砂〔經緯主体〕〔深さ：5～10 cm〕
- 77 暗灰褐色砂〔粗砂主体〕〔深さ：3～5 cm〕
- 78 灰褐色砂疊〔深さ：5～10 cm〕
- 79 灰褐色粘質土〔小塊多く含む〕
- 80 灰褐色細礫
- 81 黃褐色砂
- 82 黃褐色砂
- 83 暗褐色砂〔小塊含む〕
- 84 明黃色砂〔深さ：2～5 cm〕
- 85 暗褐色砂〔深さ：3～8 cm〕
- 86 暗褐色砂
- 87 黑褐色砂質土
- 88 黄褐色砂〔小塊含む〕
- 89 黄褐色砂
- 90 暗黃褐色粘質土
- 91 暗黃褐色砂
- 92 暗褐色粘質土
- 93 暗褐色粘質土〔小塊、砂含む〕
- 94 暗褐色粘土
- 95 暗褐色粘土
- 96 暗褐色砂礫
- 97 暗黃褐色粘質土
- 98 暗黃褐色砂質土
- 99 黄褐色砂質土〔地山再堆積か〕
- 100 暗灰色砂質土
- 101 暗灰色粘質土〔小塊含む〕
- 102 暗褐色砂〔深さ：3～4 cm〕
- 103 暗褐色砂質土
- 104 暗黑色粘質土
- 105 暗褐色細礫
- 106 黑褐色粘土
- 107 暗黑色粘性粘質土
- 108 暗黑色粘質土〔5 cm前後の層多く含む〕
- 109 明灰色砂〔深さ：5～10 cm〕
- 110 暗灰色粘土
- 111 暗黃灰色砂質土
- 112 暗灰色粘土〔地山ブロック含む〕
- 113 暗黃色土
(4 cm前後の礫含む)〔以下底土〕
- 114 黃色土〔5 cm前後の礫含む〕
- 115 暗黃色土〔5 cm前後の礫含む〕
- 116 明黃色土〔5 cm前後の礫含む〕
- 117 明褐色土
- 118 暗黃色土〔5 cm前後の礫含む〕
- 119 暗黃色土
(黃色土ブロック含む、疊生層含む)
- 120 黃色土〔疊生層含む〕
- 121 明黃色砂質土
- 122 明黃色砂質土〔深さ：5～8 cm含む〕
- 123 暗褐色粘質土〔細礫多く含む〕
- 124 暗褐色土
(1 cm前後の礫含む)〔旧表土〕
- 125 暗褐色土
(1 cm前後の礫含む)〔以下地山〕
- 126 暗黃色土
- 126 暗褐色粘質土〔深さ：3～5 cm多く含む〕
- 127 黄褐色土〔3 cm前後の礫含む〕
- 128 明黃色砂質土
- 129 暗褐色砂質土〔ほほ砂疊〕
- 130 黑褐色粘性粘質土
- 130 暗灰色粘質土
- 131 暗黃色砂質土〔ほほ砂疊〕
- 132 暗黃色砂質土
- 133 黑褐色砂〔深さ：1～3 cm〕
- 134 黄褐色砂質土
- 135 暗褐色砂疊〔深さ：1～4 cm〕
- 136 暗黃色砂質土〔ほほ砂疊〕
- 137 黑褐色砂質土
- 138 暗褐色砂疊
- 139 明黃色粘土
- 140 暗黃灰色粘質土〔細礫含む〕
- 141 暗黃色粘質土〔地山上部か〕
- 142 黄褐色粘土〔地山〕

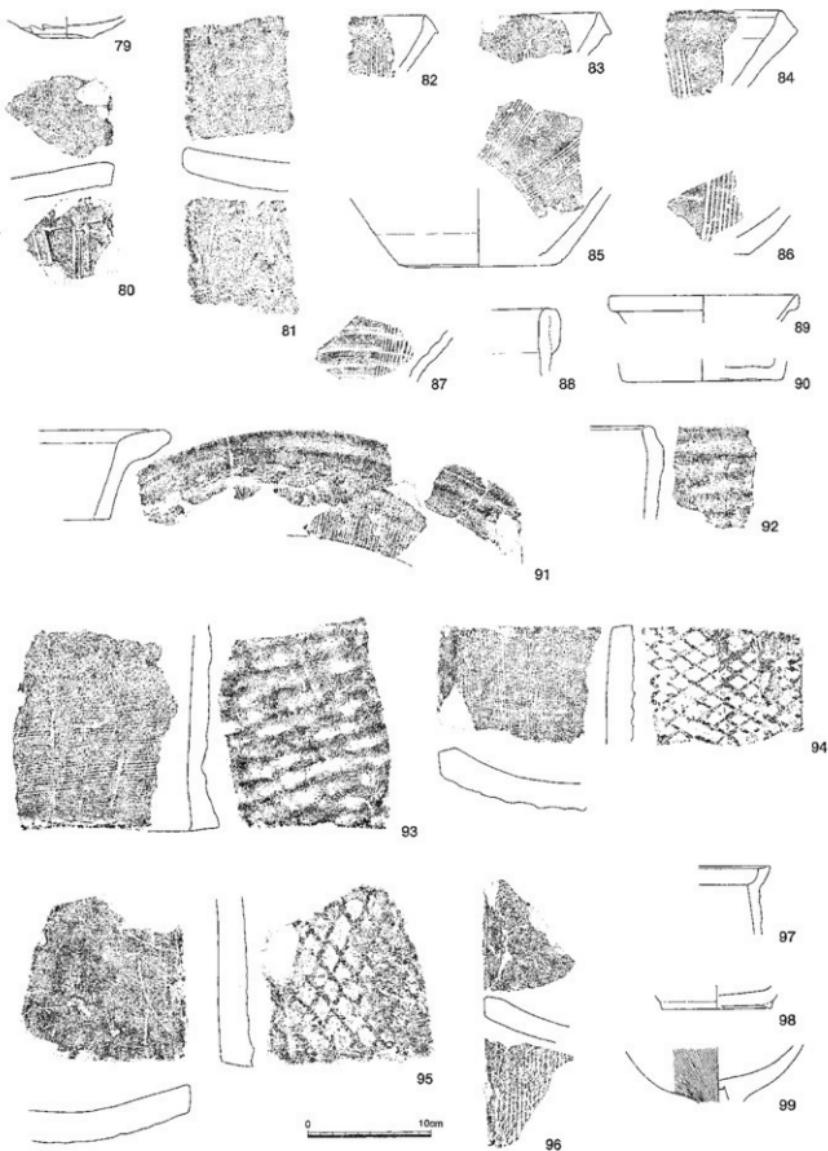


図24 トレンチ28出土遺物 (1/4)

である。87層は黒色の砂層で、瓦質の鍋97が出土している。図示できなかったが筒状の体部から屈曲して皿形の底部へとつづく部分も出土している。13ないし14世紀という以上には時期を限定できないが、中層の少なくとも上部は中世前半の堆積であることを示すと言える。

なお、中層から上層、30・33・54・62・64・85層には鉄滓が含まれる。鉄滓は2~7cmで、多くの場合鉄分によって砂礫が付着・固結した状態にある。またまれに、やや転磨を受けた状態の炉壁も出土する。これらの成分分析は行っていないが、外観観察からは鍛冶滓ではなく製錬滓とみられる。中世に付近で製鉄がなされた可能性も否定はできないが、むしろ、上流の谷奥に所在する古代ないし古墳時代の製鉄遺跡から流下したものとみられる。

下層の堆積土は部分的にしか掘り下げが及んでいないため、全体の様相はとらえがたい。西半では暗灰色の粘質土（101層）や砂質土（100層）であるのに対し、東半では砂質土・粘質土中に砂や砂礫層があり、やや堆積の状況が異なる。

東側の掘り下げ部分18.0m付近からは須恵器壺98、平瓦94~96が出土しており、この付近の層はおむね平安時代に形成されたものとみられる。なお、平瓦片は上位の層においても出土しており、これらは備前国分寺から流入したものとみられるが、創建期の縄目叩き瓦が少なく、平安時代の格子目叩き瓦が主体をなす点が共通する。土師器高杯99は下層ないし中層の排土からで、古墳時代中期末ないし後期とみられる。きわめて厚手である。

中堤

トレチ東端から東80cmの位置に現中堤の端部があるが、トレチ端から西6.2mまで中堤盛土を確認した。中堤は上部が削平されているわけであるが、トレチ30で確認した盛土上端の高さ20.90mが中堤本来の高さであるとすれば、トレチ内では14cm、上方にあたるトレチ28の北側ではそれに若干の数値を加えた高さが削平を受けていることになるが、崩されて水田かさ上げに用いられた盛土量は多く、中堤がさらに高かった可能性もある。上記のように中堤基部は流路によって削られており、本来の中堤は1m前後広くなるとみられる。端部の検出位置からみて、トレチ北側の水田端の水路が描く弧が本来の中堤の形状を反映していると推定される（図6）。

トレチ内で盛土の厚さは30cmを測る。基本的に角礫を含む黄色土（113~120・121・122層）が用いられており、これは内濠のトレチ32で確認した上層盛土と同一であるが、トレチ32など内濠側ではそれが南に向かって大きく下降する特徴的な盛り方を示すのに対し、ここでは層の境界があまり明瞭でなく、また、盛り方もほぼ水平となる点が異なる。トレチ北壁のみであるが、厚さ5cmと薄いながら褐色の盛土（123層）が、黄色の盛土と旧表土（124層）の間に認められ、これはトレチ30・32の下層盛土に対応する可能性がある。また、中堤の西端、外濠斜面部においては、中堤本体部分よりも低い位置で盛土の存在が認められた（121・122層）。平面図では肩部から二点破線までの範囲が盛土に覆われた形となる。中堤斜面部ではいったん地山を削って盛土で構築されるわけであり、これはトレチ9で見られた構造と同一である。

旧表土面には特に遺構は認められなかった。厚さ8cm前後の旧表土下は地山であるが、砂質土と砂礫層の互層をなす。このうちの砂礫と濠内の堆積砂礫との区分は容易でなく、検討に時間を要することもあった。地山の下部、19.0m付近で黄色の粘土となるが、この層は外濠西端では20.12mに所在しており地山の層は東に下降する。両宮山古墳後円部西側においては中堤から内濠にかけて比較的新しい堆積が地山となることが、このトレチおよび内濠のトレチ29・30から明らかである。

1. 岡宮山古墳の調査

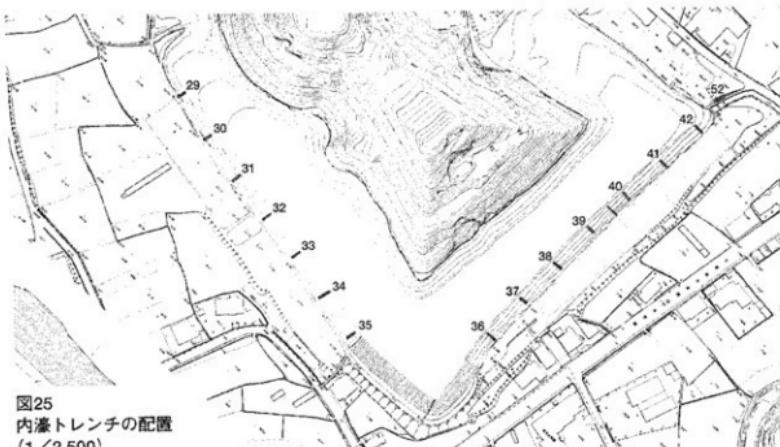


図25
内濠トレンチの配置
(1/2,500)

(2) 中堤・内濠

中堤の内濠側斜面は浸食によって崩落が進みつつあり、保存処置の実施が急務となっている。

1. 内濠斜面の形状、2. 遺構面（盛土上面）の深さと形状、3. 中堤の構築状況の把握を目的として調査を実施した。

調査は冬季に内濠一両宮池の水を落として実施したが、池の水を完全に排水することは困難であり、さらに上方からの水の流入の遮断も不可能であったため、残存した水面17.7mよりも下側の掘り下げはごく部分的とならざるをえなかった。また、調査によって中堤の損壊が拡大する危惧があったため、検出した中堤盛土の掘削は最小限度にとどめた。

トレンチは内濠南西側にトレンチ29~35の7本、前方部前面にトレンチ36~42の7本を設定した。トレンチの間隔は25mで、トレンチ幅は1m、長さは3.6~6mである。大多数のトレンチで深掘りは50cmないしそれ以下の幅で行っており、トレンチ平面図については掲載を省略した。

なお、各トレンチの断面図の下部には地山形状の推定を示している。これはピンポールを用いて推定した形状であり、前方部前面側では地山が比較的堅く2段に下がる形状を推定でき、深さや段幅もほぼ一致し、中堤下端の形状を示している可能性が強いため参考として記載したが、南西（墳丘側面）側では礫が堆積している場合や地山が軟弱な箇所が多くなるため確実とは言い難くなる。この形状は遺構の端部をおおむね示すと考えているが、確定はむずかしい。

1) トレンチ29 (図26・33)

中堤西部、後円部中央西側に設定した。中堤斜面上部は 28° の傾斜で下降する。19.8mで傾斜が変わり、幅50cmと1mの2つの段をもしながら下降する。トレンチ南東部18.5mの位置に傾斜変換点があり、それより下方は緩やかな斜面となる。トレンチ外側の堆積土には礫が多く、ピンポールによる調査は実施できなかっただけで、このトレンチでは外側下方の形状は不明である。

堆積土上半は粘質土が多く、下半は砂質土となる。なお、15・16層は崩落した地山ブロックである。また、上部の4~6層は浅い土坑であるが、サブトレンチの南壁には認められず規模はさほど大きく

ないとみられる。上半の堆積土中からは瓦質の脚付き羽釜100・101が出土した。

上方の土層は不明であるが、トレンチの範囲では中堤はすべて地山からなる。地山上端は21層上面で20.26mであるが、これは後述の30以降のトレンチでの検出高よりも低く、表土が覆い被さり本来の上端は現れていないと推定される。地山はトレンチ中位まで黄色粘質土であるが28層以下は砂礫および砂となり、堆積土に類似し、また軟質である。地山下部の層は埴丘側に傾斜しており、古墳以前の埋没河道の中心が埴丘側にあったことを示している。後述のトレンチ30ではこうした土層は認められず、中堤外側のトレンチ28東部の地山がこれらに近いことからみて、埋没河道部は中堤に斜交して外側に抜けている可能性が強い。

2) トレンチ30(図26・33、図版16・17)

後円部西外側に設定したトレンチで、中堤外側にはトレンチ28が所在する。

中堤斜面の上部は20°の傾斜で下降する。19.6mで急傾斜に変わり18.2mまで下降して平坦部を形成する。ボーリング調査ではトレンチ南東外側で再度下降して17.0mに平坦面をもつようである。18.2mの平坦部はトレンチ29下端の平坦面から続くとみられ、堅く締まった地山に対してほぼ水平に形成されており底の可能性を考えることもできる。しかしながらこの理解の場合、本来の底が大規模に削られていることになる。一方、下方の平坦面はこれ以降のトレンチの外側下方の平坦面と高さがほぼそろっており(図60)、下側の平坦面が底である可能性を考えておく。

堆積土のうち上層の砂礫・2層からは室町時代(15世紀)の備前焼すり鉢104が出土したが、同層には近世の瓦片も含まれている。7層は褐色の粘質土で、青磁碗102・備前焼碗103など鎌倉時代(13世紀)の遺物を包含する。102には表面に細かい傷があり耕作土で表採される破片を思わせ、これらの遺物は二次的に堆積した可能性がある。9層以下は砂層に変わり遺物は含まない。

13層は6cm大的の砾の層で他とは異なり、築造後この面が地表となった時期があった可能性が強い。

中堤は23層以上が盛土になると判断した。ただし、23層と24層の間に旧表土層は認められない。盛土断面19~22層では盛土が外(西)側に、また前方(南)側にむかって大きく傾斜して積まれた状況が認められた。盛土のうち19層以上は黄色・黄褐色の粘質土、20~23層は褐色・暗褐色粘質土で、トレンチ32で述べる上層盛土・下層盛土に対応する。

地山は粘質で下半では10cm大的の砾を含むが、トレンチ29のような砂層は認められない。

3) トレンチ31(図26・33、図版16)

トレンチはくびれ部の対岸に位置する。

中堤斜面は上方から17°の緩やかな角度で下降する。19.46mで傾斜が変化して最初は急角度、下方では緩傾斜をなす。トレンチの南東端、18.2mで再度傾斜が変換して高さ30cmの段をなし、その下側は再び斜面をなす。トレンチ南東外側の形状については、図示したうちの南東端部分は確実と考えるが17.5m付近の段の形状については不明確である。なお、トレンチ北西端の「底部」は上方に形成されていたえぐれ部分上側の土が滑落したものである。

堆積土は上部が砂礫、あるいは砾を含む砂質土からなり、最下の10層でシルトに変わる。4層から龜山焼壺口縁部106、6層から土師皿105が出土した。いずれも中世の遺物である。

中堤は20層が旧表土とみられ、それよりも上方が盛土である。13層まではほぼ確実に盛土とみられ、その上面までの厚さは1.58mである。なお、12層は本来の盛土か近世の盛土か判断がむずかしい土である。盛土は19.7m、トレンチ西端から約1mの位置で上下に分かれ、上側が黄色の上層盛土、下側

1. 両宮山古墳の調査

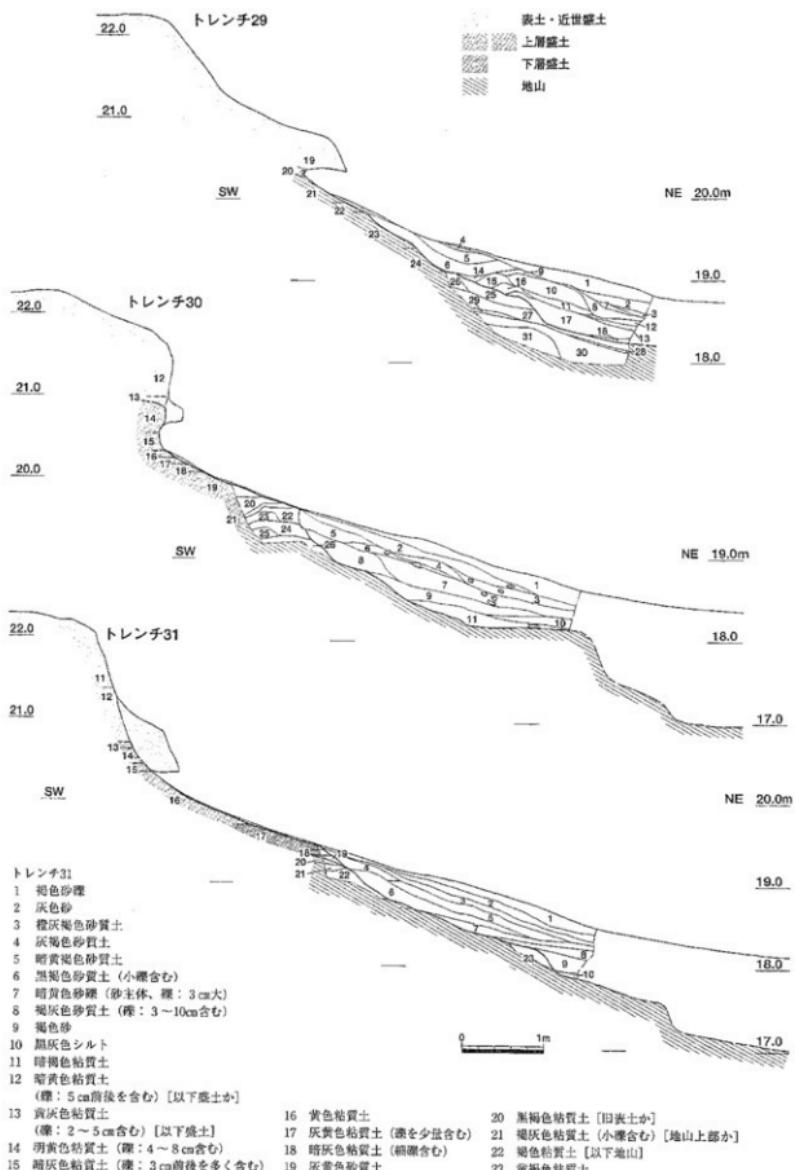


図26 トレンチ29・30・31 (1/60)

トレンチ29		
1 暗褐色砂塵	12 黄色砂	21 明黄色粘質土【地山か】
2 明褐色砂	13 暗灰色色粘質土 （礫：1～2cm・砂を含む）	22 明黄色粘質土【以下地山】
3 暗灰色シルト	14 明黄色粘質土	23 明黄色粘質土（礫：4cm少く含む）
4 暗褐色砂質土	15 暗黄色粘質土（礫：1～5cm含む）	24 明褐色粘質土（小礫・砂含む）
5 暗灰色粘質土（礫：5～10cm含む）	16 明黄色粘質土	25 暗褐色粘質土（礫：1～3cmを含む）
6 暗褐色粘質土	17 暗褐色粘質土	26 黄褐色色粘質土（礫：2cm多く含む）
7 暗褐色粘質土	18 暗褐色シルト（小礫含む）	27 黄褐色粘質土（礫：2cmを多く含む）
8 明褐色砂塵（礫：3～6cm含む）	19 黒褐色粘質土	28 黄褐色砂
9 暗褐色粘質土（砂・小礫含む）	20 暗褐色粘質土	29 黑褐色粘質土（小礫・砂含む）
10 暗褐色粘質土（礫：2～6cm含む）		30 暗褐色粘質土（小礫・砂含む）
11 暗褐色粘質土（小礫含む）	21 黑褐色粘質土	31 暗褐色粘質土（礫：10cmを多く含む）

トレンチ30		
1 暗黄色砂	10 灰色粘質土（砂を含む）	19 黄褐色粘質土（細礫含む）
2 暗灰色砂塵（礫：1～2cm）	11 暗黄色砂塵（礫：3cm）	20 暗褐色粘質土（礫：2cm以下含む）
3 暗褐色砂質土（礫：1～5cm含む）	12 暗褐色上	21 黑褐色粘質土
4 暗褐色砂質土	13 砂（礫：5～8cm）	22 淡暗褐色粘質土（3cm前後の礫含む）
5 暗灰色粘質土	14 明黄色土【以下底土か】	23 暗褐色粘質土
6 暗褐色粘質土	15 黄色土（礫少く含む）	24 黄褐色粘質土
7 暗褐色砂質土	16 黄色土（暗褐色土ブロック少含む）	（礫：3～5cm含む）【以下地山】
8 暗灰褐色砂質土	17 黄色土	25 黄色粘質土
9 暗褐色砂塵（礫：4～5cm）	18 黄褐色粘質土	26 黄色粘質土

が灰褐色の下層盛土である。「底部」は切断しておらず、付近の壁面で観察した土層を記入している。

4) トレンチ32(図27・33、図版15・17)

北西造り出しの対岸に位置するトレンチである。

中堤斜面上部は他のトレンチと同様18°の緩傾斜で下降する。19.0mで傾斜が変換してやや凹凸のある斜面に変わり、トレンチ東端において17cmの段をなす。トレンチ東外側は堆積層の砂礫に阻まれて形状がつかみにくいか、再度段をなすとみられる。

堆積土は大半が砂質土・砂層である。下層の10・11層が砂礫となり、14層は灰色シルトに変わる。遺物は少なく、5層からは中世の備前焼すり鉢小片107が、7層から土師質高台付椀の小片が出土したにすぎない。

中堤盛土は下端(42層下面)が18.4mと深くなり、上端と考える16層上面からの厚さは2.1mを測る。盛土は29層を境として上層と下層に区分できる。上層盛土は黄色粘質土を主体とし角礫を多く含む。礫は最大で10cm、4～8cmのものが主体をなす。盛土各層は先のトレンチ30と同様、トレンチ触線に斜行し南側にむかって傾斜する。また、盛土各層は17～20、26～23、24～26、27～29の4群に大別ができる。一方、下層盛土は暗褐色粘質土からなるが、この土質・色調は地山の粘質土に似る。最大3cmと含有する礫も小さい。トレンチ30の場合は下層盛土も各層はトレンチに斜行して南に傾斜するが、このトレンチではほぼ水平に積まれている。なお、上部の35層は黒色が強く弥生土器細片を含んでおり、弥生包含層等に由来する可能性が強い。なお、33層は31・32層の風化部とみられる。

上層・下層盛土の境界部に位置する31層は褐黒色の砂質土であるが、上部で黒色がやや強く、旧表土状の色調を示す。また、これを挟む30・32層は他の盛土とは異なる粗砂層である。確定はむずかしいが、中堤の構築に中断期間があり、その間に砂が溜まり薄い表土が形成された可能性が考えられる。

5) トレンチ33(図28)

断面図中ほどの不整形な突出は、中堤斜面上部が崩落しそれが傾斜変換部に止まった状態であり、通常オーバーハングして立ち上がる斜面上部はここでは斜めになっている。

斜面下方は19.14mで傾斜が変わり、やや渦曲した面をして下降する。トレンチ下方外側の形状

1. 両宮山古墳の調査



はやや不明確であるが、段をなして最終的に16.9mまで下降することは確実と思われる。

堆積土は砾を含む砂質土である。トレンチ29~32も遺物の包含量は多いとは言えないが、このトレンチではさらに遺物量は少くなり、この傾向は南のトレンチ34・35も同様である。

中堤の土層のうち崩落土裏側にあたる部分は約4m南側の壁面の状態を記入している。7~9層は褐黒色土で1cm前後的小砾を多く含み、10層以下の土質と大きく異なっており、後世の盛土と判断した。10~15層は黄色の粘質土が主体を占め上層盛土である。16~21層は全般にやや黄色を帯び、トレンチ32の土質と同一ではないが、15層以上とは大きく異なっており、下層盛土と判断した。22層は暗褐色で粘質が強く地山である。色調は暗いが旧表土と言えるほどではない。

6) トレンチ34 (図28、図版16)

中堤斜面は比較的の変化が少なく、上端19.65mと下方18.43mに小さな段をもつ。堆積土は30~40cmと比較的薄い。なお、トレンチ東外側の堆積土では砾が多くなり、そのため底面の形状はかなりつかみにくい状況にある。

中堤盛土のうち、上部の8層・黒褐色砂質土は断面位置では薄いが、トレンチ南東壁では25cmと厚くなり、さらにその下方に厚さ10~15cmの赤褐色砂・小礫層が形成されている。この砂礫層は自然堆積層とみられ、これよりも上方の7層が近世盛土、以下が本来の盛土と判断した。近世盛土7層は厚さ3cm前後の褐色土・暗黄色土が互層をなす状況が認められた。

トレンチ中ほどの12~20層は下部には褐色土もまじえるが、礫を含む黄色粘質土が主体となっており、上層盛土である。これらの上方にある9~11層は褐色の砂質土で礫を含み、12層以下と同様に堅く緻密である。これまでのトレンチでは見られなかった土層であり、中堤南部においては上層盛土の上部に黄色土とは異なる土を用いたとみられる。トレンチ32と同様、上層盛土の土層は南に向かって傾斜する。21~30層が下層盛土で、褐色の粘質土からなる。ほぼ水平に積まれているが、21・22層の上面は上層盛土と同様南にむかって傾斜する。なお、21層は黒褐色土ではあるが、明確な旧表土状の特徴は見られない。盛土の厚さは2.65m、追加された盛土の厚さは1.50mを測る。

トレンチ東端で地山となる。地山上部は暗灰色で、旧表土の可能性もある。

7) トレンチ35 (図28)

北西側中堤の南東端、前方部隅角の対岸に設定したトレンチである。

設定中堤斜面は急角度で下降して後、緩斜面をなす。 18° と他のトレンチに比べて緩やかな斜面である。堆積土はきわめて薄く、トレンチの大部分は表土直下で盛土面となる。

木の根のため中堤盛土上部は観察がむずかしく、トレンチ南側壁面を観察・記入した。6層までと7層以下では土質や堅さが異なり、3~6層が近世の盛土とみられる。この判断によれば本来の盛土の上端はトレンチ34のそれよりも70cm低くなるが、これはこのトレンチの南東で中堤が堤防に変わることと関連すると思われる。盛土7~11層はよく似た暗褐色~黒褐色の粘質土である。そのうちの7層はトレンチ34の9~11層と同一層の可能性が強く、8層下面にわずかに黄色粘質土が認められるところから、7・8層がトレンチ34の褐色上層盛土に対応すると判断した。9~11層は黒褐色の粘質土で、下層盛土とみられる。ポーリング調査でも地山の深さはよくわからないが、17.8m付近で堅くなりボーリング棒自体が入らなくなることから、この付近で地山に変わると可能性を考えておく。

8) トレンチ36 (図29、図版18)

前方部前面中堤に設定したトレンチのうち、最も南西に位置する。

堆積土は浅く、トレンチの大部分は表層直下が盛土面となる。堆積土は大半が砂層で最下の5層が砂礫となる。中堤斜面の傾斜はほぼ一定で、トレンチ下端で傾斜が強くなる。

このトレンチでは盛土の状況がかなり明瞭であった。6~8層は黄色粘質土であるが、粘質が強くて礫の含有が少ない。下の9層とは大きく異なっており、近世の盛土と判断した。9・10層は黄色の粘質土で最大5~8cmの礫を含んでおり、上層盛土とみられる。11層は黄色・灰色・褐色粘質土のブロックの集合層であり、9・10層とはやや異なるが、それらと一連の土層と判断した。12~18層は褐色~暗褐色土で下層盛土である。12、15・16層が砂質土、13・14、17・18層が粘質土で、砂質土と粘質土が互層となる。なお、粘質土にも砂がかなり含まれており、これは上層の9層においても同様である。盛土下は旧表土19層、地山20層となる。なお、下層盛土16層の中には弥生時代後期前葉の土器片が含まれている。同時期の土器小片はトレンチ周辺の表土中にも認められるが、弥生土器が盛土中にある程度含まれ、それが流出していると思われる。

1. 両宮山古墳の調査

トレンチ33

1 暗褐色砂	13 明黄色粘質土
2 暗褐色砂質土	14 暗褐色粘質土
3 黄褐色砂質土	15 黄白色粘質土
4 暗灰色粘質土 (縦 : 2 cm前後含む)	16 黄褐色粘質土 (縦 : 8 ~ 10cm・小礫を含む)
5 灰褐色砂質土	17 黄白色粘質土
6 灰色砂質土 (縦 : 3 ~ 5 cmを含む)	18 暗褐色粘質土 (縦 : 1 ~ 3 cm含む)
7 褐黑色土 (砂を含む)	19 黄褐色粘質土
8 暗黄色粘質土 (縦 : 2 cm前後含む)	20 黄色粘質土
9 暗褐色土 (縦 : 1 ~ 2 cm多く含む)	21 黄褐色粘質土
10 黄色粘質土 [以下盛土]	22 暗褐色粘質土 [旧表土か]
11 砂褐色粘質土 (縦 : 3 ~ 5 cm含む)	23 黄色粘質土 [地山]
12 黄色砂質土 (縦 : 3 ~ 5 cmを含む)	

トレンチ34

1 暗褐色砂塵	17 黄褐色粘質土
2 暗褐色粘質土	18 暗褐色粘質土 (小礫含む)
3 黄色砂塵 (縦 : 3 cm前後)	19 淡黄色粘質土
4 暗褐色砂質土 (縦 : 2 cm以下多含む)	20 淡黄色粘質土
5 暗褐色砂質土 (縦・砂を多く含む)	21 黑褐色粘質土 (小礫多く含む)
6 暗黄色粘質土	22 暗黃褐色粘質土 (3 cm前後の縦合む)
7 暗褐色粘質土 (縦 : 3 ~ 5 cm含む)	23 暗灰色粘質土 (3 cm前後の縦多含む)
8 黑褐色砂質土 [旧表土か]	24 暗褐色粘質土
9 暗灰褐色砂質土 (砂・縦 : 3 ~ 5 cmを含む) [以下盛土]	25 暗褐色粘質土
10 黑褐色砂質土 (小礫含む)	26 黄褐色粘質土
11 黑褐色砂質土 (小礫含む)	27 暗褐色粘質土
12 黄色粘質土	28 淡灰褐色粘質土
13 暗灰色粘質土 (大きなブロック)	29 黄褐色粘質土
14 黄褐色粘質土	30 明黄色粘質土
15 暗灰褐色粘質土 (縦 : 5 ~ 8 cmを含む)	31 暗褐色粘質土 (縦 : 3 cmを含む)
16 黄色粘質土	32 暗褐色粘土 [以下地山]
	33 黄色粘土

9) トレンチ37 (図29、図版15)

トレンチ36の東に位置するトレンチである。中堤斜面上端に樹木があり、表土が流されて露呈した株根が斜面上半に広がっているため、トレンチは斜面下半に設定した。

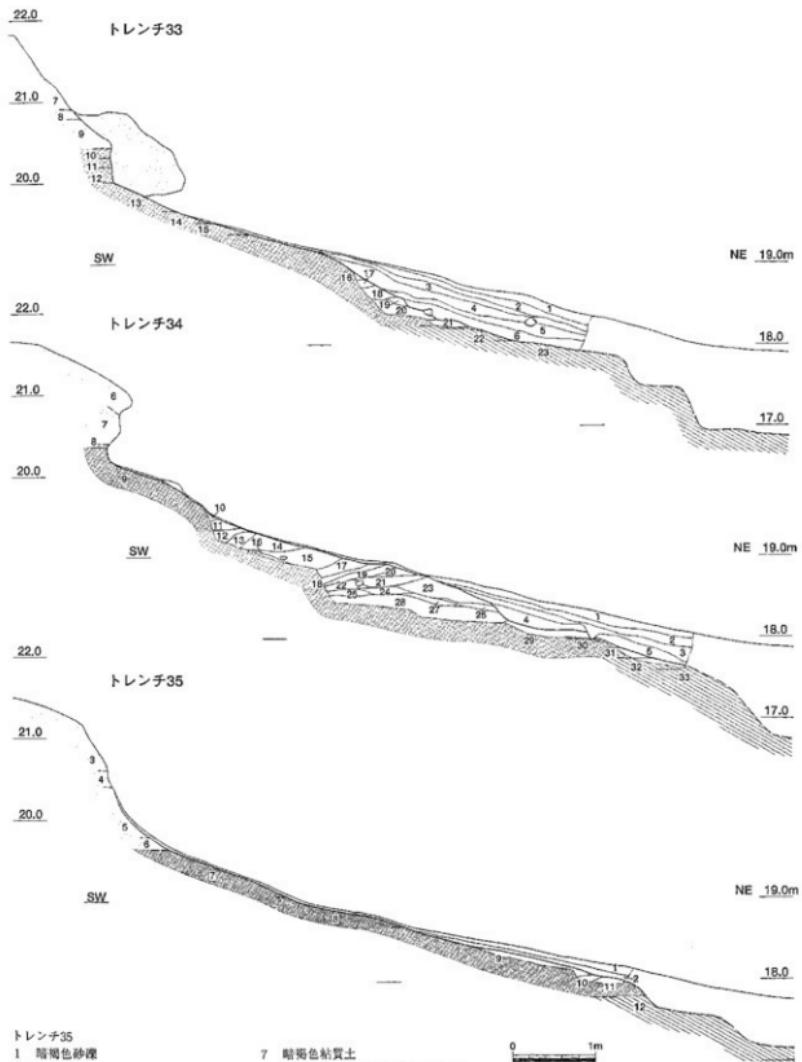
中堤斜面は18.2m付近でやや傾斜が緩く、トレンチ下端で下降を始める。斜面の傾斜はおおむね20°である。堆積土はトレンチ36にくらべて厚く、中層以上は砂・小礫を含む粘質土、下層12・13層は砂塵である。なお、断面上端の堆積土9層は盛土が再堆積したものとみられるが、この層の高さで盛土が終わるのではなく、さらに上方に盛土が続くと思われる。

15~17層は黄色の粘質土で上層盛土、18~22層が暗褐色の粘質土で下層盛土であり、それぞれ15~20cmの厚さに分層できる。18層中には弥生土器小片が認められた。23~25層が地山の粘土である。トレンチ内では旧表土は認められないが、旧表土の端部が不明瞭になっているだけかもしれない。

10) トレンチ38 (図29・33、図版15)

前方部前面中堤の西から3番目のトレンチで、墳丘主軸延長上にある。

中堤斜面はトレンチ上端で急角度で下降して後、緩やかな斜面をなす。トレンチ下方および外側には砂が堆積しているらしく、地山は2段に下がってのち16.4mまで緩やかに下降を続ける。堆積土は中層8層が粘質土、下層10層が小礫を含む砂質土である。



トレンチ35

- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗緑色砂
- 3 暗褐色土
- 4 明灰色粘質土
- 5 暗褐色粘質土 (小礫多く含む)
- 6 暗褐色粘質土 (深さ: 5~10cm含む)
- 7 暗褐色粘質土 (深さ: 1~2cm含む) [以下盛土]
- 8 暗褐色粘質土 (小礫多く含む)
- 9 黒褐色粘質土 (深さ: 0~5~4cm含む)
- 10 暗黃褐色粘質土 (小礫含む)
- 11 暗褐色粘質土 (小礫含む)
- 12 [以下地山か]

図28 トレンチ33・34・35 (1/60)

堆積土からは中世の土鍋108の他、土師器壺109、埴輪110が出土した。土師器109は10層からの出土である。く字状に外反する口縁部の破片で、頸部内面の調整はナデのようである。形状から古墳時代中期とみられるが、それ以上の時期の限定は困難である。この破片は器面の状態が良好であり、盛土中から流出した可能性が強いと考える。埴輪110も10層からの出土で、外面調整はヨコハケ、内面調整はナデである。

中堤の盛土のうち11層は礫を含まない粘質土で近世の盛土と判断した。それ以下が本来の盛土であり、12～17層が上層盛土、13層はその風化部、18～20層が下層盛土、21層が旧表土、22層が地山となる。盛土上端の高さは19.8m、下端は17.95mであり、盛土の厚さは1.85m、近世の盛土の厚さ1.7mである。

11) レンチ39 (図30・33、図版18)

斜面上方では肩口に生えていた木が根本の土を失って横転しており、断面図上方に示した細長く立ち上がる形状は土とともに浮き上がった株である。そのためレンチはレンチ37と同様に斜面下方に位置することになった。

堆積土はレンチ38となるべて厚く、最大1mに達する。上半は砂質土主体、下半は砂礫である。堆積土中からは15世紀の備前焼甕口縁部111が出土した。

中堤斜面はレンチ下端で大きく下降をはじめようである。下方外側は2段に下降するよう、最深部は図示した端部16.46mよりももう少し深くなる。

レンチ底で検出した盛土17～19層は比較的黄色が強いが下層盛土とみられ、レンチ上方の未掘部分に上層盛土が所在するとみられる。盛土下端は17.51mであり、前方部前面中堤ではこのレンチ付近で地山が最も低くなる。

12) レンチ40 (図30・33)

レンチ上方北東の中堤肩部は以前崩落を生じており、その復旧のための土糞がレンチ南東側に置かれている。中堤斜面は18°で下降して後、18.2m付近から傾斜が強くなる。さらにレンチ下端下方から急角度で下降するようである。

レンチ38・39にくらべて堆積土は浅くなり、最大で50cmである。

レンチ36

1 黄褐色砂	8 暗褐色粘質土 (黒褐色粘質土ブロック含む)	13 明黄褐色粘質土 (小塊含む)
2 閉色砂	9 暗褐色粘質土 (礫：1～4cm含む)【以下盛土】	14 暗褐色粘質土
3 灰色砂	10 暗褐色粘質土 (礫：3～5cm含む)	15 暗褐色砂質土
4 緑赤褐色粗砂	11 暗褐色粘質土 (黄白色・灰色・褐色土ブロックからなる)	16 暗褐色砂質土 (礫：3cm前後・沫生土器を含む)
5 閉色砂礫	12 暗褐色粘質土 (礫：3～5cm含む)	17 明褐色粘質土 (礫：3～5cm含む)
6 灰黃色粘質土		18 黄褐色粘質土 (粗礫含む)
7 明黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土ブロック含む)		19 黑灰色粘質土 [旧表土]
		20 黄色粘質土 [地山]

レンチ37

1 閉色砂礫	10 明褐色粘質土 (緑混じる)	19 暗褐色砂質土
2 黒褐色粘質土	11 黄灰褐色・褐色粘質土の互層	20 暗褐色粘質土 (緑混じる)
3 暗黄色砂	12 淡黃色砂礫 (砂主体、礫：1cm前後)	21 暗褐色粘質土 (緑混じる)
4 黄褐色砂質土	13 淡黃色砂礫 (礫：1cm前後)	22 黄色粘質土 (粗砂・小塊含む)
5 暗黄色砂	14 灰褐色粘質土 (小塊・砂を含む)	23 黄灰色粘土 [以下地山]
6 暗褐色粘質土 (砂含む)	15 明褐色砂質土 (以下盛土)	24 暗褐色粘土
7 黄褐色粘質土 (砂・小塊含む)	16 明褐色砂質土	25 明黄色粘土
8 暗褐色粘質土・砂の互層	17 棕褐色粘質土 (砂多く含む)	
9 明黄色粘質土	18 暗褐色砂質土 (礫：3～5cm含む)	

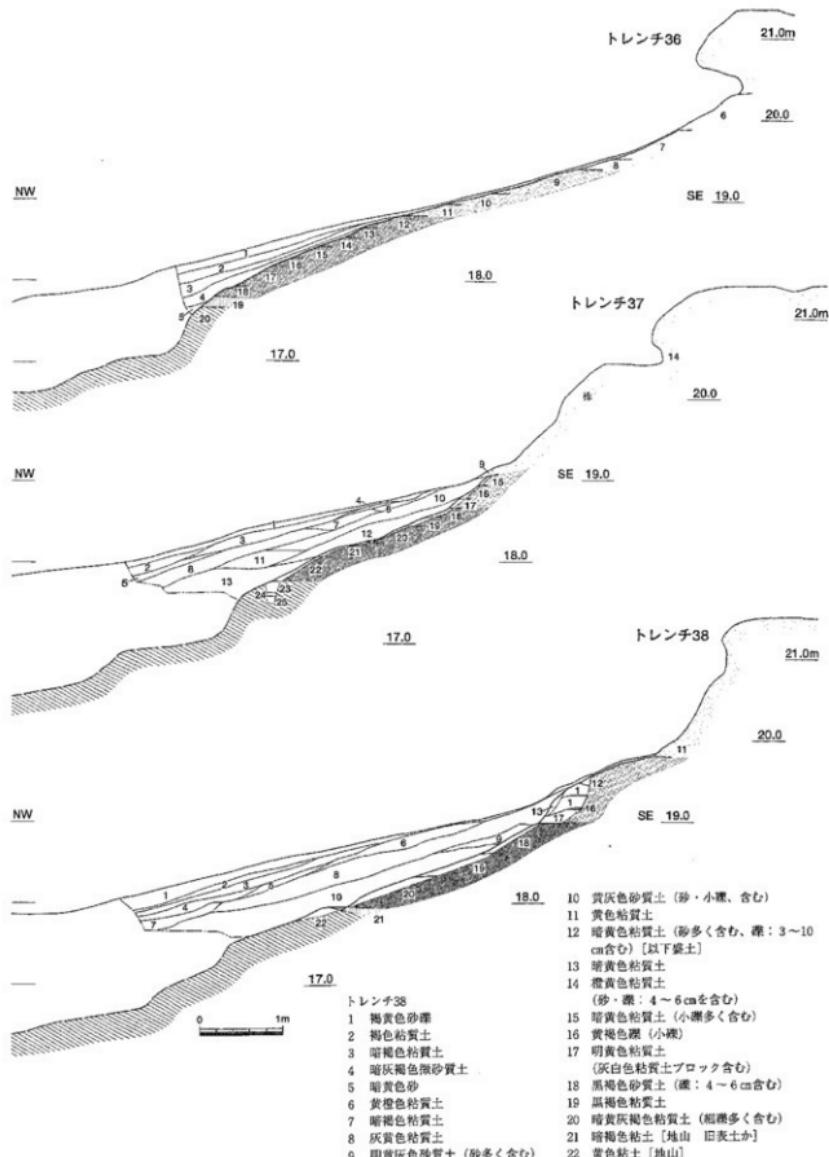


図29 トレンチ36・37・38 (1/60)

斜面の中ほど、19.1mの部分では径36cmの環状をなす焼土を検出しており、炉状のくぼみが所在するとみられる。この遺構については新しい時期と判断できたため掘り下げは行わなかった。

盛土のうち9～11層は粘質が強く近世の盛土とみられる。12層はそれらと同様に粘質の強い暗褐色土で、この層から土師質小皿112と113が近接して出土した。112は明赤色を呈し径7.3cm、器高1.7cmを測る。全体に歪みが大きく底部は丸みをもち平底ではない。底部外面の調整はヘラ切りである。113は淡赤黄色を呈し、器高0.9cmときわめて浅い個体である。底部外面の調整はナデかと思われる。トレンチ10出土資料など中世の皿は体部と底部の境界が明瞭であって本資料とは大きく異なる。近世の小皿はバリエーションが大きいため時期の特定がむずかしく、また、資料の対比も困難であるが、小型化・簡略化が顕著でいわゆる「かわらけ」の様相を示しており近世の範囲に考えておきたい。したがって、古墳時代の後に追加された中堤盛土は近世の所産と推定できることになる。

13層は砂質土で12層とは異なるものの礫の包含が少ない点は共通する。14層以下は礫を含み13層とは大きく異なることから、13層までが近世、14層以下が古墳時代盛土と判断した。

14層以下は礫を含み、粘質土が主体となるが、砂質土17層もまじえる。全体に橙色を帯びこれまでのトレンチの下層盛土とは異なるが、それに含めることができると考える。19層は礫を含まない粘質土で地山である。盛土の上端の高さは18.92m、下端は17.86mであり、盛土の厚さは1.06mと中堤トレンチの中で最も薄くなり、その分、近世盛土が厚くなっている。

13) トレンチ41 (図30)

断面図には現れていないがこのトレンチの西斜め上方に樹木があり、株根が広がっているため、トレンチは斜面下方に偏った形となった。

トレンチ底の遺構面は北側、トレンチ軸線に斜行して急激に下降しており、断面図には破線で南西壁での底面形状をあわせて示したが、掘削幅50cmの間で30cm以上の差をもつ。トレンチ北東側に大きなえぐれあるいは掘り込みが形成されているようである。

堆積土は他のトレンチと同様、砂質土が主体となる。下部の堆積がやや乱れた形となるのは上記のえぐれの埋没によるものであろう。6層上端下面はほぼ水平に奥側に入っており、段になっている可能性がある。

中堤盛土のうち12層は13層以下とやや土質が異なっており、上層盛土の可能性も考えられたが、暗

トレンチ39

1 暗褐色砂礫	8 穀黄色粘質土（砂を多く含む）	15 黄灰色砂礫（砂・泥：小塊多く含む）
2 暗褐色粘質土	9 暗褐色砂質土（小塊・砂を含む）	16 黄灰色粘質土（小塊含む）
3 黄色砂	10 灰色微細粘質土	17 黄褐色粘質土【以下盛土】
4 暗褐色粘質土（小塊含む）	11 黄色砂	18 暗褐色砂質土
5 黄色粘質土	12 暗黄色砂礫（塵：小塊）	19 黄灰色粘質土【塵：2～3cm含む】
6 明黄色粘質土（砂を含む）	13 灰色粘質土（小塊含む）	20 黄色粘土【地山】
7 灰褐色シルト	14 灰褐色砂礫（塵：2～10cm）	

トレンチ40

1 暗褐色砂礫（塵：1～4cm含む）	8 焼土	14 暗褐色砂質土
2 暗褐色砂	9 深褐色粘質土（黄色土小ブロック含む）	（塵：4～5cm含む）【以下盛土】
3 灰色粘質土	10 明黄色粘質土	15 暗褐色粘性粘質土（塵：2cm前後含む）
4 明灰褐色砂質土	11 黄色・褐色粘質土の混在	16 暗褐色粘性粘質土（塵：3～5cm含む）
5 暗褐色粘質土【盛土の再堆積か】	12 暗褐色粘質土	17 赤褐色砂質土（塵：3cm前後含む）
6 明褐色粘土	13 明褐色粘質土（小塊含む）	18 赤褐色粘質土【小塊多く含む】
7 黄灰色粘質土【炉土】		19 明赤褐色粘質土【地山】

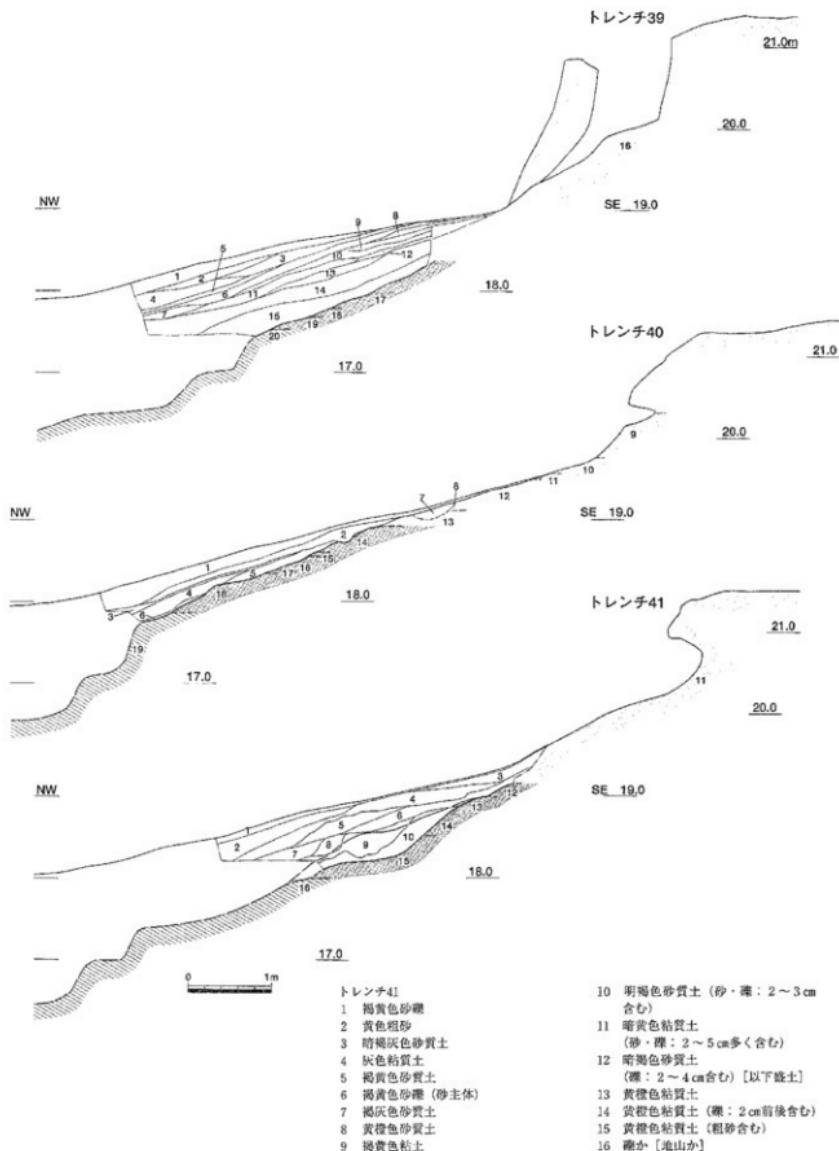


図30 トレンチ39・40・41 (1/60)

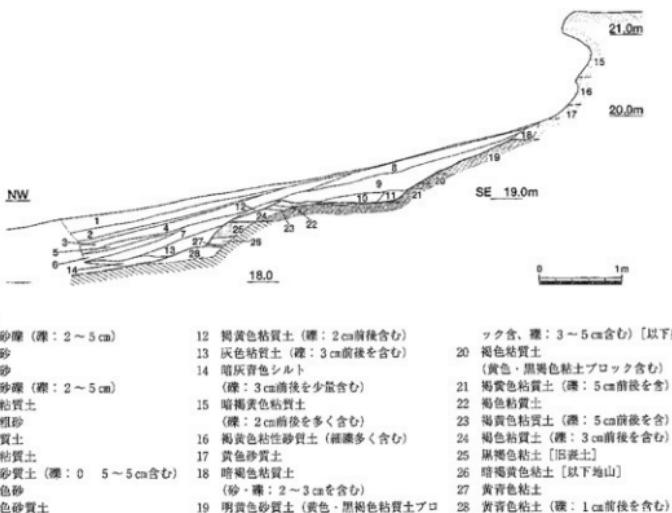


図31 トレンチ42 (1/60)

褐色であるため下層盛土として取り扱う。13・14層は下層盛土である。15層は盛土か地山かの判断がむずかしいが、他のトレンチの地山が粘土層であるのに対し、この層は粗砂が多く含むことから盛土と判断した。トレンチ内では地山を確認できなかったが、ボーリング調査では18.0m付近で疊層に変わるとみられ、トレンチ底直下で地山になると推定される。

14) トレンチ42 (図31、図版18)

中堤東入角に近い位置に設定したトレンチである。

トレンチ上方のえぐれは各トレンチで見られるが、とりわけこの付近では著しい。

中堤斜面は19.0mの位置に幅1.5mの段をもち、そこから再び下降する。平面図を示していないが下方の18.7m付近では斜面はトレンチにやや斜交し北側に下降する。

トレンチ40で浅くなった堆積土は再度やや厚くなり最大67cmを測る。堆積土には砂が多く、表土の砂礫中の礫は他のトレンチにくらべてやや大きい。12層からは備前焼破片が出土した。胸部片であるため時期の特定がむずかしいが室町時代（15世紀前後）とみられる。

中堤盛土のうち18層までと19層とでは性状や堅さが異なっており、19層は黄色で堅く締まり最大5cmの礫を含むことから、18層までが近世の盛土、19層が上層盛土と判断した。20~24層は褐色を呈し、下層盛土である。旧表土25層は18cmの厚さをもつ。地山は粘土である。

盛土の残存状況からみて19.0m付近は流出して平坦部が形成されたとみられる。盛土の上端は19.7mでトレンチ38に次いで高く、上部はよく遺存していると言える。旧表土面は18.74mで、トレンチ36~41よりも約70cmの上昇を示す。なお、トレンチ外側下方は砂礫が堆積しており、ボーリング調査は不可能であった。

51地点（反転図）

- 1 地点（反転図）
- 2 黄褐色粘質土〔路面表土〕
- 3 光埴石材ないし石頭組込み層
- 4 黑褐色粘質土〔小流路か〕
- 5 黄褐色粘質土〔埋め土〕
- 6 明黄色粘質土
- 7 灰色砂
- 8 黄灰色粘質土（小礫を含む）〔以下盛土〕
- 9 黄褐色粘質土〔黄色・褐色土ブロックからなる〕（厚：5cm前後を含む）
- 10 黄褐色粘質土（厚：4cm含む）
- 11 灰褐色粘質土（砂多く含む、厚：4cm前後を含む）
- 12 黄褐色粘質土（黄色土ブロックを含む）（厚：3～4cmを含む）
- 13 明黄色粘質土（明灰色・黄白色ブロックを含む）
- 14 開褐色粘性砂質土（砂・塵：3cm前後を含む）

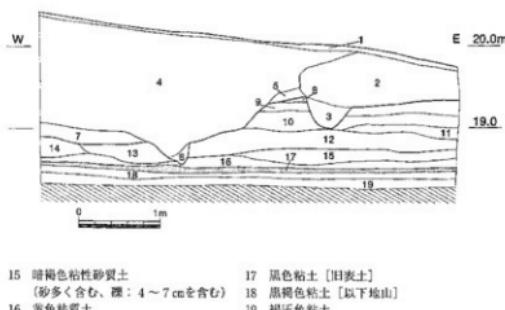


図32 51地点 (1/60)

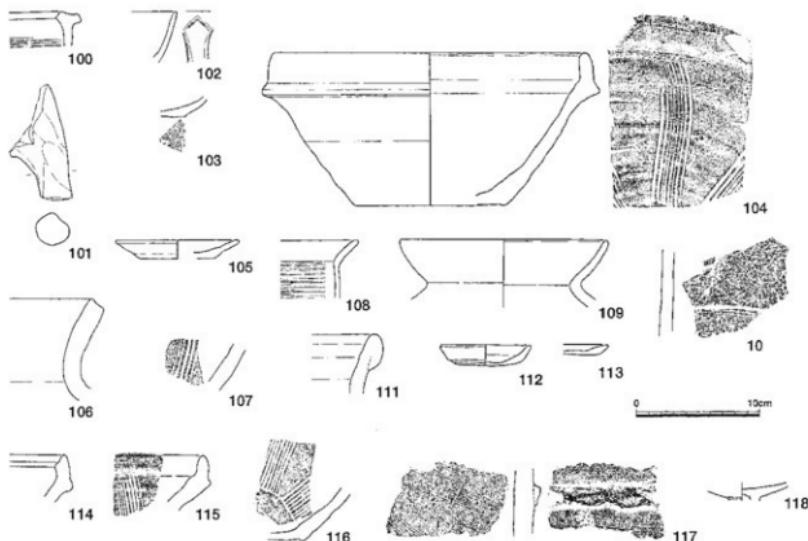


図33 内濠トレンチ出土遺物 (1/4)

15) 51地点（図32、図版15）

中堤東入角には余水吐（荒手）が設けられ、両宮池の水を排出していることは先に述べたが、平成16年秋の台風による集中豪雨の際、中堤を越えた水が余水吐北側裏法を洗掘し、この部分が長さ約4mにわたって崩壊した。この箇所の災害復旧工事の際に立ち会い、得られた資料を報告に加える。地点名は今回便宜上、付けたものである。

余水吐の縁に設けられた小径の法面部分であり、工事掘削の奥行きがさほどないため表土中に収ま

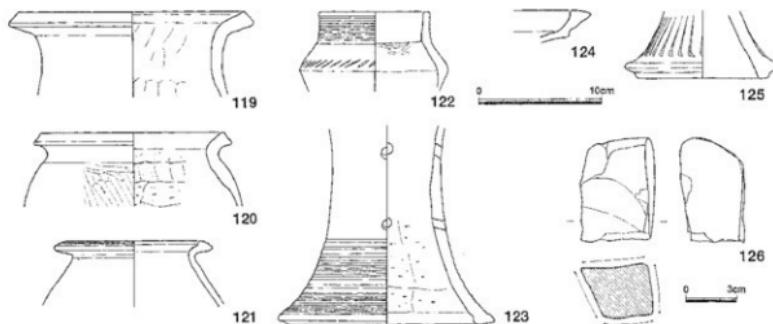


図34 墳丘盛土下の遺物 (1/4・1/3)

るかと考えたが、予想に反して中堤盛土を良好な状態で検出した。

2層は石垣の裏込めないし空洞に砾を詰めたもの、4層は埋め土である。7層は砂層で余水吐の基部側から輪線に斜行して東に溝状に延びる状況が認められた。余水吐北側の水田は中堤にむかってL字形に突出し中堤が著しく細くなっているが、7層のあり方からは古い時期の余水吐がこの水田部分に設けられていた可能性を考えることができる。

中堤盛土は東側で高さ82cm、西側で31cmが残存する。暗褐色土の他に黄褐色土、黄色土も含まれ全体に黄色土の比率が高いが、含まれる砾は最大で5cmと小さいことから下層盛土とみられる。盛土は水平に積まれている。なお、8層は上層盛土の残存部かもしれない。

盛土下には黒色の旧表土が明瞭に広がり、その下に黒褐色、褐灰色の地山粘土が見られる。

16) 内濠採集の遺物 (図33)

114~118は表探資料で、このうち114~116はトレンチ41・42付近で採集した。図示した以外ではトレンチ35、36付近で弥生土器小片を表探しており、これは盛土中の遺物が流出したものとみてよい。中堤の調査域では東入角付近に遺物が集中すると見える。このほか、トレンチ29北側の用水路が流れ込む部分に形成された砂礫堆積中と東造り出し東側の用水路流入部の堆積土にもしばしば中世の遺物が認められる。

114~116は備前焼すり鉢で、115が室町時代、114は江戸時代前期に位置付けられる。埴輪片117は過去にトレンチ42付近で採集されたものである。窯窓焼成でB種ヨコハケが施され、5世紀後半に位置付けられる資料である。これらはいずれも周辺から流入あるいは近世盛土中から流出したものとみられる。一方、118は前方部南隅角で採集した土器器高杯である。器表がさほど痛んでおらず、盛土中から流出したものであろう。古墳時代中期とみられるが、詳細な時期決定は困難である。

17) 墳丘下の遺物 (図34、図版27)

図34には墳丘下で採集した弥生土器を示した。多量の弥生土器を伴う幅1.3m、深さ50cmの黒色土の落ち込みが認められ、溝ないし土坑とみられる。採集した土器は壺・甕・高杯・器台などからなり、弥生時代後期前葉の一括資料である。土器以外に砥石の破片126がある。

墳丘下に該期の遺跡が広がることを示す資料である。

2. 和田茶臼山古墳の調査

和田茶臼山古墳は両宮山古墳後円部北方、標高26m付近に所在し、両宮山古墳との位置関係から両宮山古墳に從属して築かれた「陪塚」とみられてきた（図35・36、図版19・20）。

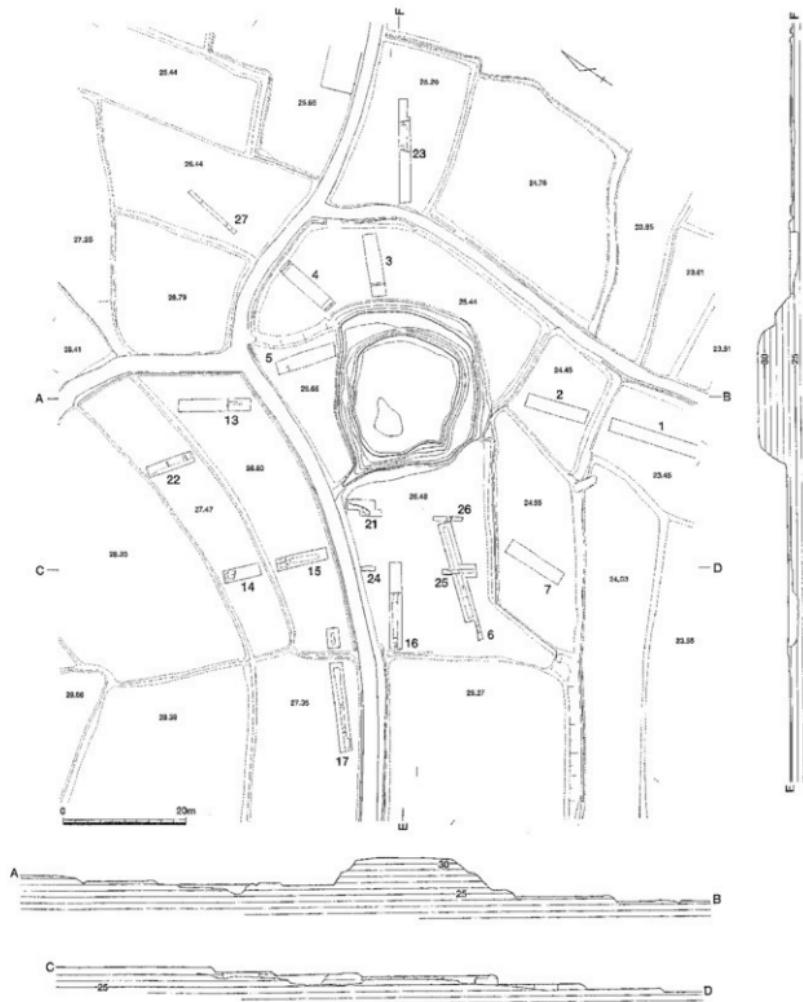


図35 和田茶臼山古墳トレンチ配置 (1/800)

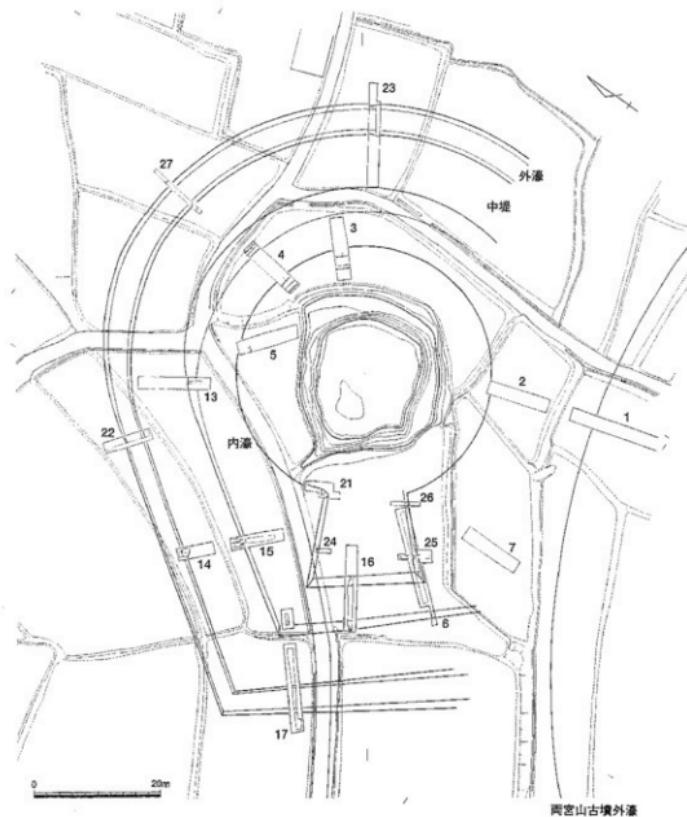


図36 和田茶臼山古墳 (1/800)

現状は径約30m、墳頂部径19mの円墳で、斜面下方からの高さ5.5m、上方から4.5mを測る。周囲は水田や畠で、墳丘斜面はかなり削られているようで急角度をなす。

第1次調査ではトレント3～7の5本を設定して調査を行い、本墳は帆立貝形古墳である可能性が強いことが明らかになった。第2次調査ではそれを受けてトレント13～17、21の6本を設定し調査を進め墳丘規模を確定した。調査の過程で2重周濠をもつ可能性が考えられたため、トレント22・23・27を追加し、また、トレント24～26で前方部形状の把握を行った。第2次調査のトレント総数は13本である。このほか、第2次調査において和田茶臼山東側の緩斜面にトレント11・12の2本を設定し、付近の様相について行った。ここでは古墳等は認められず、中世の遺跡の所在を確認した。

なお、後述のように内外の濠は規模が小さく水は溜まっていなかったとみられ、濠と呼ぶことは必ずしも適当でないが、ここでは内濠・外濠を用いる。

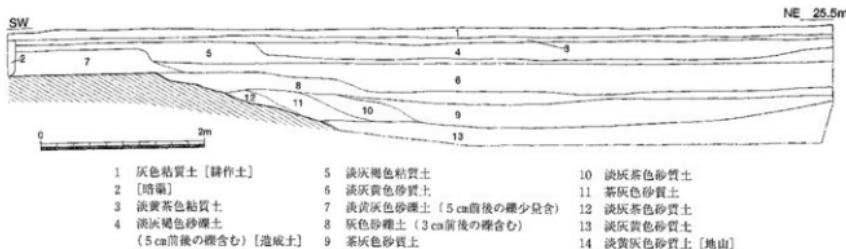


図37 トレンチ3 (1/60)



図38 トレンチ4 (1/60)

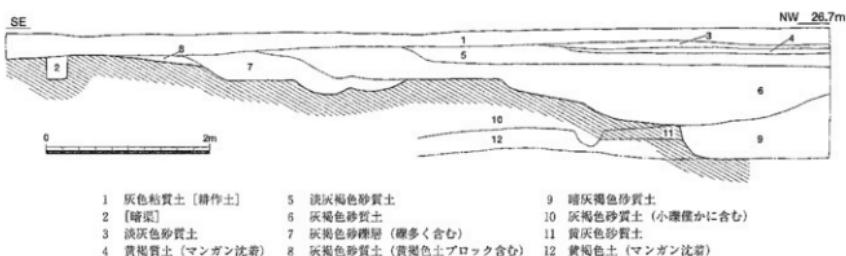


図39 トレンチ5 (1/60)

(1) 内濠・外濠

1) トレンチ3 (図37・46、図版21)

北東裾部から外側にむかって設定したトレンチである。

現在の墳頂部はやや削り込まれており地表下52cmで地山(墳丘)となる。トレンチ南西端から北西1.8mの位置が肩部となり、そこから内濠斜面が比較的緩やかな角度で下降する。

堆積土6～13層はおおむね砂質土で構成される。8層は砂礫層である。下部の9ないし13層から14世紀代とみられる瓦質羽釜130が出土しており、これらの堆積の形成は中世以降である。127は造成土とみられる4層からの出土である。

2. 和田茶臼山古墳の調査

1 底褐色粘質土〔耕作土〕	8 暗褐色砂礫〔以下地山〕	16 暗褐色粘質土
2 赤褐色粘質土	9 暗褐色砂質土	17 暗褐色砂礫
3 底黄色粘質土	10 黃褐色砂礫	18 黄褐色粘質土
4 黄色粘質土〔造成土か〕	11 黄褐色砂礫	19 明褐色粘性砂質土
5 黑褐色粘質土〔外濠堆土〕	12 黄褐色粘質土	20 暗褐色砂層
6 暗褐色粘質土〔外濠堆土〕	13 暗灰色砂礫	21 暗褐色砂
7 暗灰色粘質土	14 黄褐色粘質土	22 灰褐色砂層
(屢：3～5cm含む) [外濠堆土]	15 黄褐色粘性砂質土	

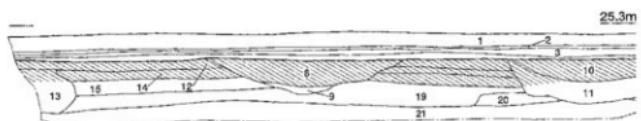


図40 トレンチ23 (1/60)

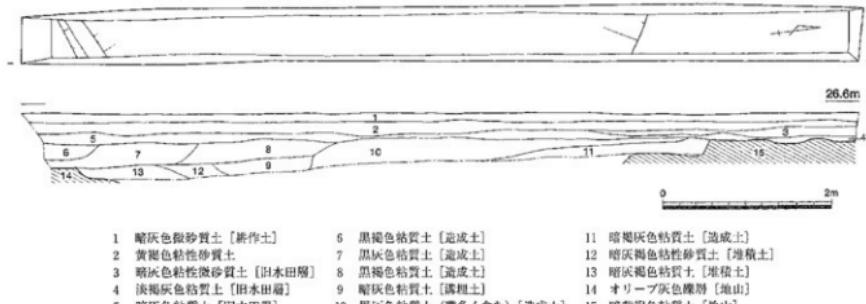


図41 トレンチ27 (1/60)

2) トレンチ4 (図38・46、図版21)

トレンチは北裾部に設定した。墳丘側斜面は地山（墳丘）検出面から急角度で30cm下降して後、緩傾斜となり、24.45mでさらに傾斜が弱くなる。同様の傾斜変換はトレンチ北端においても認められ、濠底幅7.8mとも見うるが、トレンチ3の断面形状とは異なっており、濠底はもう少し深くなる可能性がある。

堆積土はトレンチ3とほぼ同様で砂質土が主体となる。6層は砾を多く含み暗灰色を呈する。青磁片128は5層からの出土である。

3) トレンチ5 (図39)

北西裾に設定したトレンチである。墳丘はかなり削られており、トレンチの北西端で内濠とみられる下がりを検出した。

墳丘は地山の削り出しによって形成されているようである。内濠の深さは上方の傾斜変換から1.0m、下方の変換点から42cmを測る。

4) トレンチ23 (図40、図版20)

トレンチは後円部後端外側に所在する。上部がかなり削られており、検出面は浅い。外濠の検出幅

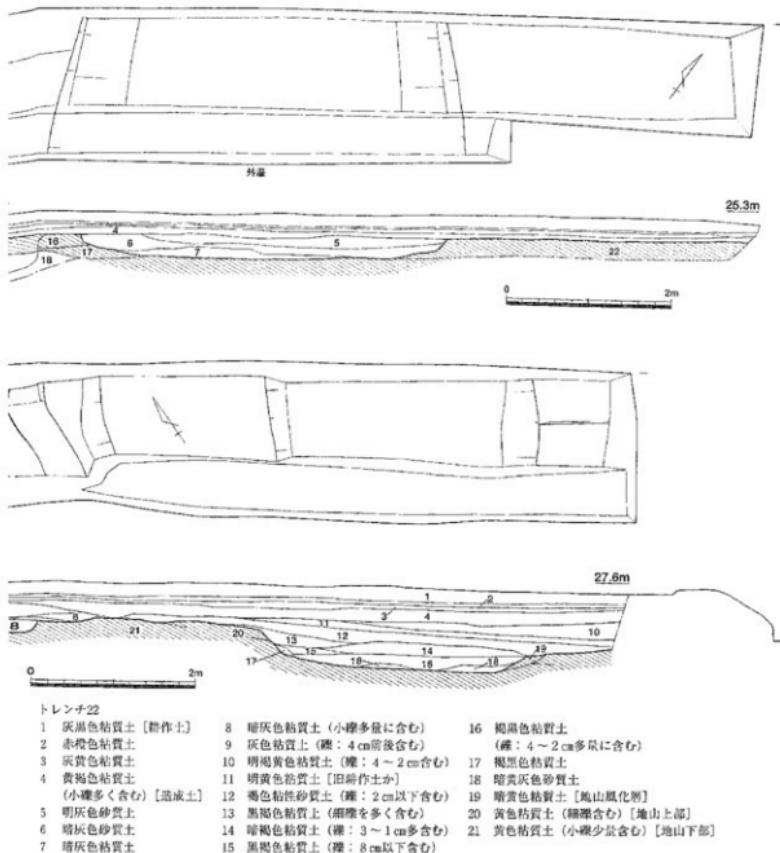


図42 トレンチ22 (1/60)

4.6m、底面幅4.26m、深さ26cmを測る。外濠底面は平坦で褐黒色の粘質土が堆積する。トレンチさから、中堤は8.6m以上の幅をもつと判断できる。

平面図西部の13、8・9、10・11層は古墳に先行して形成された流路であるが、遺物を含まないため時期は不明である。

）トレンチ27（図41・46）

円部北外側に補助的に設定したトレンチで、掘り下げを外濠の上面付近でとどめ、平面規模の確認を実施した。トレンチ北部では地山が高く南端では深くなる。上部の土層は水田かさ上げの造成と旧水田層からなる。

認めた外濠の幅は6.3mで他のトレンチよりも広い。外側の端部が比較的明瞭であるのに対し、

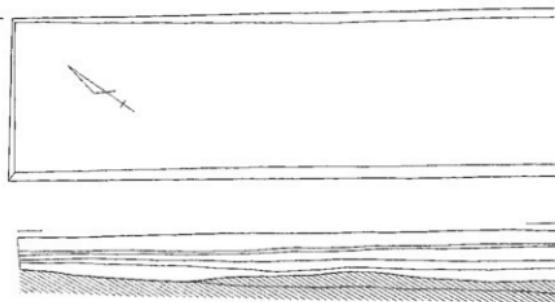


図43 トレンチ13 (1/60)

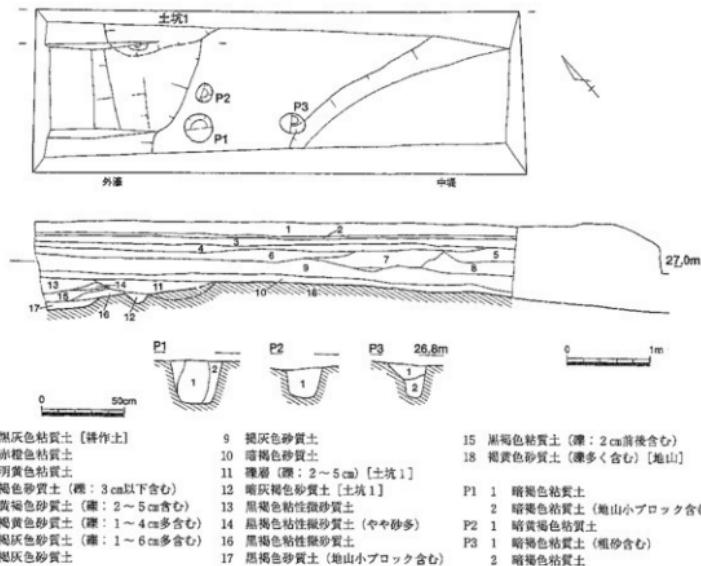
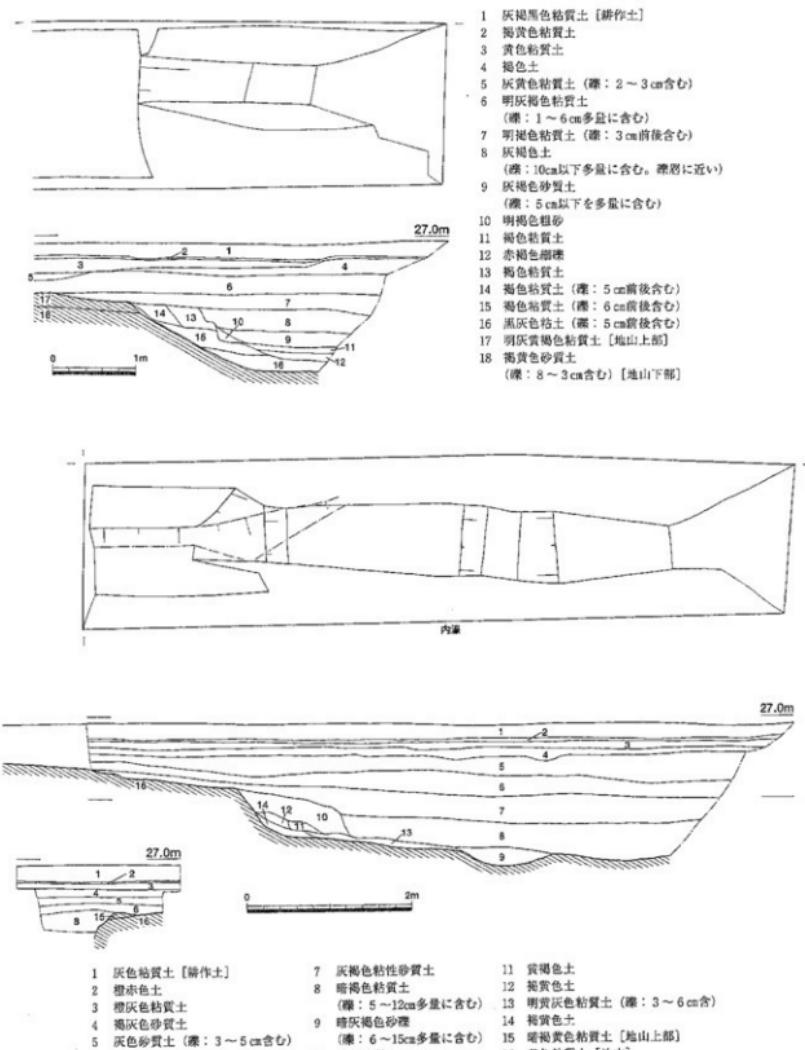


図44 トレンチ14 (1/60・1/30)

内側のラインはやや不明瞭でトレンチに対して斜交することからみて、内側の肩が広がっている可能性が強く、調査では外濠の大まかな位置を確認したにとどまる。

土器等の出土はなかったが、排水から鐵鎌136が出土した。上記の掘り下げ状況であるため水田造成土からの出土と判断できる。全長6.9cm、鎌身幅2.0cmで、鎌身部と茎部の先端は欠損するがほぼ完



形の短頭鎌である。和田茶臼山古墳の副葬品がこの位置にもたらされた可能性は否定できないが、古墳時代中期前半から中葉にかけて盛行する型式の鉄鎌であり、和田茶臼山古墳に先行する時期の古墳

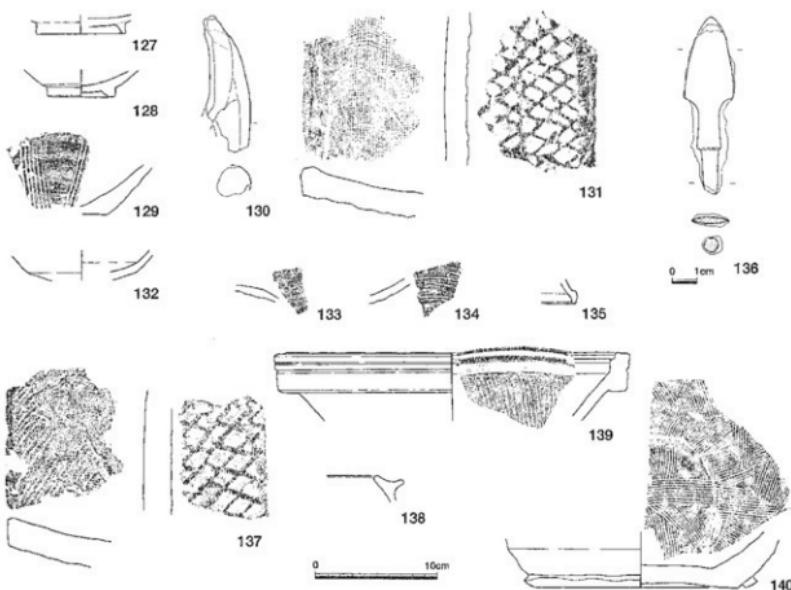


図46 和田茶臼山古墳トレンチ出土遺物 (1/4 · 1/2)

が付近に所在し、削平されて墳丘が造成土に用いられた可能性のほうが強いと考える。

6) トレンチ22 (図42・46、図版22)

後円部北側で外濠の確認のために設定したトレンチである。

検出した外濠は上面幅3.26m、底面幅2.65m、深さは外側肩からで49cmを測る。丸みのある底面は斜面下方にむかってやや傾斜する。底面上の埋土18層は暗黃灰色砂質土、その上の16層は褐黒色粘質土であるが、疊を多く含み疊層に近い。19層は地山の風化部である。また、トレンチ北東端の溝は水田に関わるものである。10・11層から室町時代とみられる備前焼すり鉢129が出土したが、やや摩滅しておりこの層の年代を直接示すものではないだろう。

7) トレンチ13 (図43、図版21)

茶臼山古墳の墳丘北側に設定したトレンチである。トレンチ南端で内濠を検出した。

トレンチ北端から内濠肩までの間8.8mは中堤にあたる部分であるが、盛土は認められず、地山が浅い角度で下降する。

トレンチ南端で逆台形の断面形をなす内濠の北部を検出した。検出長さ2.3m、深さ86cmを測る。底面は緩やかなカーブをもつようである。堆積土は8~12層と13~16層の上下2層に大別できる。上層は疊層・砂層が主体で、下層は均質な粘質土で最下の16層は黒灰色である。徐々に形成された堆積層が流水によってえぐられ、後に上層が急速に堆積したとみられ、この状況はトレンチ15においても認められる。遺物を含んでいないためそれぞれの堆積の形成時期は不明である。

8) トレンチ14(図44、図版22)

茶臼山古墳前方部北外側に設定したトレンチで、トレンチ北端で外濠の一部を検出した。10層までは堆積土および旧耕作土である。地山上面で外濠の他に土坑1基、柱穴3基を検出した。外濠肩に重複して検出した土坑1は検出長径1.46m、深さ28cmを測り、疊が埋積する。遺物は認められなかった。柱穴1~3は径23~35cm、深さ20~26cmを測る。埋土は暗褐色~暗黄褐色土で、柱穴2からは古代末ないし鎌倉時代とみられる備前焼碗の小片が出土した。該期の集落がこの付近に形成されたとみられ、土坑1も同時期の可能性を考えてよいだろう。

外濠の肩はやや崩れしており、本来は平面圓破線の位置であったと思われる。外濠は逆台形の断面形を示し、斜面下部で傾斜が強くなる。検出長さ1.3m、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色土であるが、初期の堆積17層は砂質土で滲水していなかった可能性が強い。

中堤部分に盛土は認められない。上面南側が削られておりトレンチ南隅にむかって傾斜する。

9) トレンチ15(図45、図版22)

トレンチ14の南側に設定したトレンチである。

内濠は検出幅5.26m、深さ91cmを測る。底面は墳丘側にむかって緩やかな下降を示し、トレンチ南端付近が最深部となる。堆積土は上層7、中層8・9、下層10~13に大別することができ、中層と下層の関係はトレンチ13で見られた状況と同一である。徐々に形成されたとみられる下層堆積に対し、中層には最大15cmの疊や粗砂が含まれる。中層はトレンチ北東部の中堤に直交する落ち込みから続いており、中堤を切り割って流下した流路が初期の堆積をえぐった後、急速に堆積していったとみられる。中層からは古代の瓦が出土したが、それは堆積年代の上限を示すとしか言えない。

トレンチ14と同様、中堤に盛土は認められず、上面は若干の傾斜を示す。内濠肩の形状からみて、本来はもう少し高さがあったと推定される。トレンチ14の成果と併せれば、中堤の上面幅9.15m、基部幅10.2mである。

10) トレンチ17(図47、図版23)

内濠の前方部北西入角近くから外側にかけてのトレンチで、内濠、中堤、外濠を検出した。

トレンチ上部の堆積土は厚い。出土遺物が僅少なため年代を確定しがたいが、8層出土の土器小片は中世に属する可能性が強く、層の形成時期は比較的新しいとみられる。

内濠底面は平坦で、トレンチ西端で中堤斜面に移るとみられる。下部の埋土24・25層は褐黑色~黒灰色の粘質土である。トレンチ15や13のように疊を多量に含む層は認められず、順次埋積が進んでいったものとみられる。

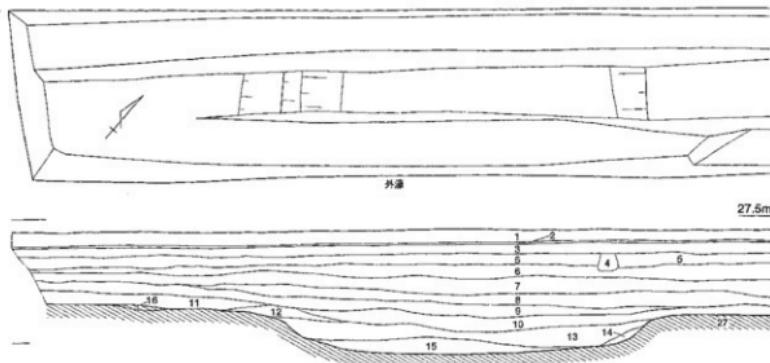
中堤は他と同様すべて地山からなる。上面は平坦で検出範囲は6.0m、上面幅推定9.1m、基底幅10.35mである。

外濠の断面形は逆台形で、底面はやや丸みをもつ。上面幅4.46m、底面幅3.22m、深さ41cmを測る。埋土は内濠と同様の黒褐色粘質土である。内濠の外側は地山面で、外堤の存在を想定させる遺構や盛土は認められない。

11) トレンチ16(図48・49、図版23)

前方部前面に設定したトレンチで、前方部および内濠を検出した。

前方部の検出範囲は長さ5mである。上面は平坦で、西半部は前端にむかって緩やかに傾斜する。前方部前端からの高さ1.19mを測り、すべて地山からなる。葺石および埴輪は伴っていない。



トレンチ17

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|------------------------------------|
| 1 黒灰色粘質土【耕作土】 | 11 暗褐色粘質土（縦：2cm以下多含む） | 21 暗褐色砂質土
(縦：4cm以下多く含む) (10層相当) |
| 2 暗褐色土 | 12 暗褐色粘質土 | 22 暗褐色砂質土 |
| 3 明黄色粘質土【旧耕作土】 | 13 黒褐色粘質土
(縦：4cm以下・粗砂含む) | 23 暗褐色砂質土（縦：4cm以下多含む） |
| 4 【暗築】 | 14 暗褐色粘性砂質土 | 24 暗黃褐色砂質土 |
| 5 明褐色砂質土 | 15 黒褐色粘質土 | 25 暗黒色粘質土 |
| 6 褐色砂質土 | 16 暗褐色粘質土【地山最上部】 | 26 黒灰色粘質土 |
| 7 褐色砂質土 | 17 明黄色土 | 27 暗褐色粘質土
(縦：6cm以下含む) [地山] |
| 8 褐色粘性砂質土 | 18 灰褐色砂質土 | |
| 9 暗褐色砂質土 | 19 明灰色砂質土（縦：3cm以下多含む） | |
| 10 暗褐色粘質土
(縦：3~8cm多量に含む) | 20 暗灰色砂質土 | |

トレンチ16

- | | | |
|-------------------------------|----------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色粘質土【耕作土】 | 6 暗黒色砂質土（縦：4cm以下多含む） | 13 暗褐色粘質土（縦：10~15cm含む） |
| 2 棕色土 | 7 暗褐色粘質土 | 14 暗褐色粘質土【地山小ブロック含む】 |
| 3 暗黄褐色砂質土
〔黒色土ブロック含む〕【造成土】 | 8 暗褐色粘質土（縦：5~10cm含む） | 15 暗黃褐色粘性砂質土（縦：3~5cm含む） |
| 4 灰黄色粘質土【旧耕作土か】 | 9 暗褐色粘質土（縦：5~10cm含む） | 16 黒色粘性砂質土 |
| 5 明灰色砂質土
〔小塊を多く含む〕【旧耕作土か】 | 10 黄褐色粗砂（縦：6cm前後含む） | 17 暗褐色層【地山最上部】 |
| | 11 暗褐色粘質土 | 18 黄色粘質土【地山下部】 |
| | 12 黄褐色粘質土（縦：5cm前後含む） | |

トレンチ6

- | | | |
|----------------|--------------|--------------|
| 1 暗黄褐色砂質土【搬乱】 | 4 暗灰褐色粘性砂質土 | 7 黄褐色砂質土【地山】 |
| 2 灰褐色砂質土【旧木田層】 | 5 暗褐色粗砂土【地山】 | |
| 3 暗黃褐色砂質土 | 6 暗黄色砂質土【地山】 | |

内濠は逆台形の断面をなし、底面幅5.83m、上面幅8.83m、中堤上面からの深さ82mを測る。底面は平坦で、墳丘側がわずかに低くなる。濠は墳丘側（12~15層）と中堤側（16層）から埋積し、粗砂（10層）が溜まった後、灰黒色粘質土（9層）でやや安定したとみられる。上方の堆積土のうち3層は埋立ての造成土、4層は畑の耕作土で畠が残る。5層も耕作土とみられ、6層以下が堆積層である。いずれの層も遺物をほとんど含まず、年代は明らかにしがたい。8層の下部から小片であるが土師器高杯132が出土した。古墳時代中期後半の遺物とみられる。なお、この層からは古代の瓦片も出土している。

中堤はトレンチ西端で検出したにすぎないが、現在の畦畔と位置がほぼ一致しており、中堤の端部位置を現在の地割りが反映することが判明した。中堤斜面の角度は墳丘斜面の角度よりもやや緩やかである。中堤はすべて地山からなる。

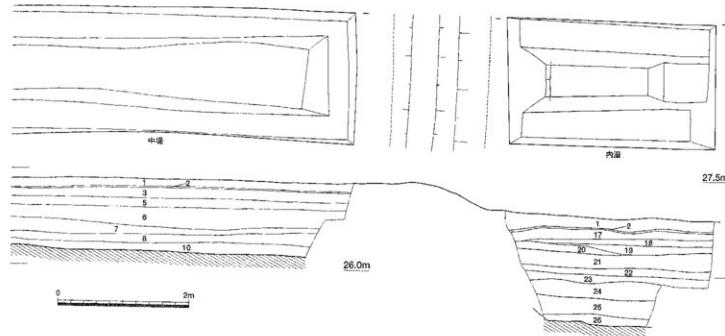


図47 トレンチ17 (1/60)

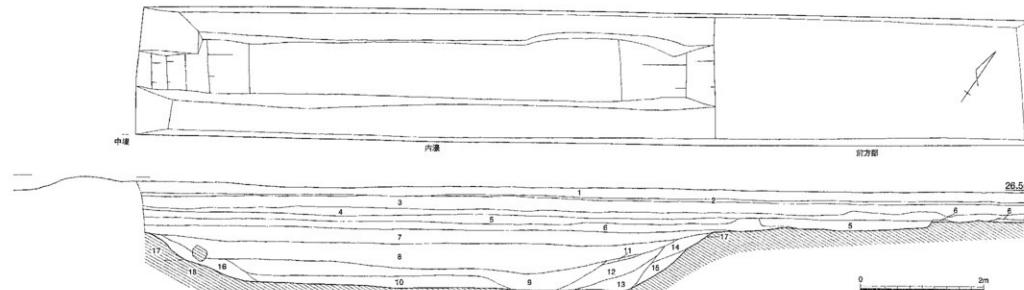


図48 トレンチ16 (1/60)

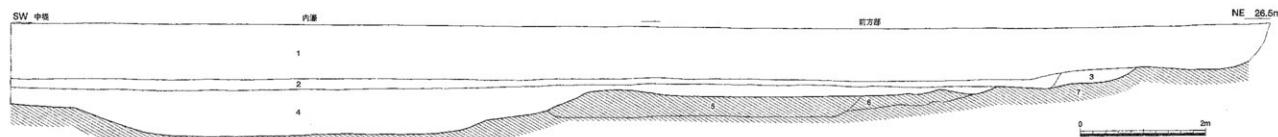


図49 トレンチ6 (1/60)

12) トレンチ6 (図49・46)

第1次調査で墳丘西側に設定したトレンチで、前方部南稜線付近に位置することになる。

トレンチ東端から13.0mまでが前方部、南西側の低くなる部分が前方部前面の内濠である。図では前方部上面から濠底までの高さが70cm以下と低いが、これは断面が前方部の南側斜面を通っているためである。また、前方部東よりの部分は旧水田層（2層）で削られている。墳丘はすべて地山からなり、礎からなる5層や6層は地山の一部である。

濠幅は5.0mである。濠の堆積土からは平安時代の瓦131が出土した。

中堤は低く、濠底のからの高さ52cmとなる。

13) トレンチ21 (図50、図版24)

北くびれ部に設定したトレンチで、後円部の斜面およびくびれ部を検出した。

墳丘の傾斜は40°と強く、検出面下73cmで内濠底面に達する。トレンチ16と同様、葺石・埴輪の存在は認められなかった。墳丘はトレンチ内では盛土は認められず地山の削り出しによって形成されている。後円部墳丘と堆積土の境界は北にのびる。

内濠埋土のうち4～8層は礎層で、下部の12・13層が砂質土、14層が粘質土となる。平面図下側の短線はトレンチ26断面の軸線方向を示す。

14) トレンチ24 (図51)

トレンチ16と21の間、前方部端近くに設定した小規模なトレンチである。

表土から47cm下で前方部上面に達する。前方部上面を覆う6層は造成土である。

墳丘はすべて地山で盛土は認められない。トレンチ北端は道路法面に接しており延長できなかったが、トレンチ北端で北側への下降が始まっており、前方部稜線の位置を確認できた。

15) トレンチ26 (図52、図版24)

南くびれ部付近に設定した南北方向のトレンチである。

トレンチ北半では地表下19cmで地表面が現れるのに対し、南半では70cmまで埋め土（2～5層）がある。これは、以前この場所に所在した温室の基礎あるいはその撤去に関わるものであろう。

その下部には旧水田層（6層）、水田端の石垣および裏込め（10層）が遺存する。9層は石垣下に向かって地山が下降しており、石垣に先行する素掘り溝と思われる。これらの下層になる11・12層は土質・色調から墳丘の外側に形成された堆積層とみてよく、この付近は本来の形状をとどめていることが判明した。前方部斜面は遺存していないものの、損壊の奥行きが少ないとみられる。墳端の位置および墳丘斜面を復元することが可能であった。

16) トレンチ25 (図53)

前方部幅を確認するため前方部南側に設定したトレンチで、トレンチ27と対になる。また、第1次調査のトレンチ6と交差する。

トレンチ全体にわたって厚い造成土がひろがる。トレンチ南半では造成土下に薄く水田層が広がっており、北半では厚い旧表土が残る。したがって、かつてはトレンチ中央で畑と下段の水田とに分かれており、畑はそのまま、水田は水田層を除去してのち造成がなされたとみられる。

トレンチ北部は前方部墳丘である。旧表土下15cmは盛土とみられ（10・11層）、その下が地山となる。10・11層と12層の間に明確な旧表土層は認められないが、11層下面がやや暗色を帯びる。一方、トレンチ南半の旧耕作土層下、7～9層は堆積土であり、トレンチ中央付近で前方部墳裾および墳端

2. 和田茶臼山古墳の調査

- 1 暗灰色粘質土
〔耕作土〕
- 2 明褐色灰粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗灰色礫層
(厚さ: 1 ~ 4 cm)
- 5 灰黑色礫層
- 6 暗黃褐色粘質土
(粗粒含む)
- 7 暗褐色礫層
(礫: 4 cm 大が主)
- 8 増黄褐色粘性砂質土 (小礫多く含む)
- 9 黄色砂質土 (粗粒多く含む)
- 10 黄色砂質土
- 11 暗黑色粘質土
- 12 黄色砂質土 (地山ブロック・礫含む)
- 13 灰黄色砂質土 (地山ブロック・礫含む)
- 14 暗灰褐色粘質土 (粗粒含む)
- 15 暗褐色粘質土 (地山風化部)
- 16 灰黄色土 [地山]
- 17 黄色土 (やや砂が多い) [地山]
- 18 黄色土 [地山]
- 19 黄色粗砂質土 [地山]

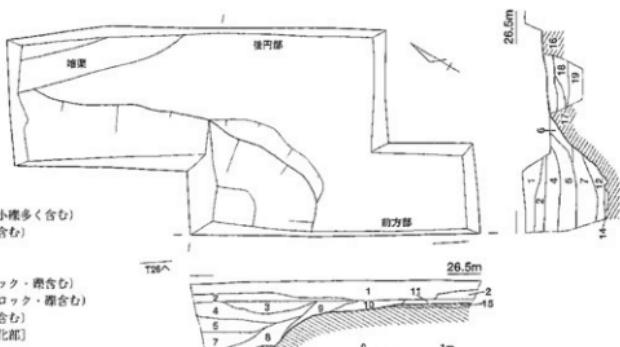


図50 トレンチ21 (1/60)

- 1 暗黄灰褐色微砂質土 [表土]
- 2 黄褐色粘質土
- 3 [暗渠]
- 4 晴褐色粘質土 (小礫含む)
- 5 黑褐色粘質土
(黒褐色ブロック含む) [造成土]
- 6 灰褐色粘質土 [田耕作土]
- 7 灰黑色粘性砂質土
(小礫を含む) [堆積土]
- 8 黄色砂質土
(礫: 2 cm 前後多く含む) [地山]

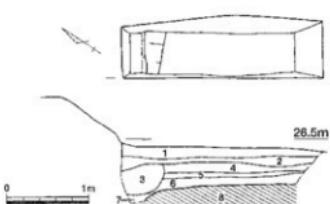


図51 トレンチ24 (1/60)

を検出した。

前方部の高さは50cmであったことが判明した。前方部上面は他のトレンチでの検出面よりも低く、若干削られている。また、前方部のこの部分は盛土で構築されていることが明らかになった。

17) トレンチ7 (図54)

前方部南下側の水田に設定した。

基盤層上には疊混じりの暗灰色砂質土が堆積する。明確な遺構は認められず、遺物は出土しなかつた。

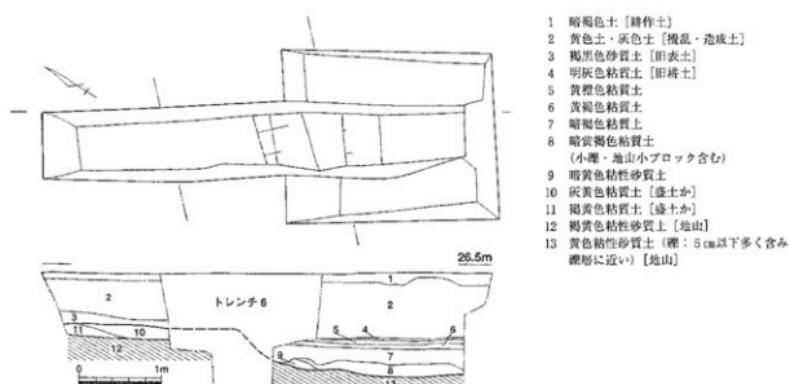
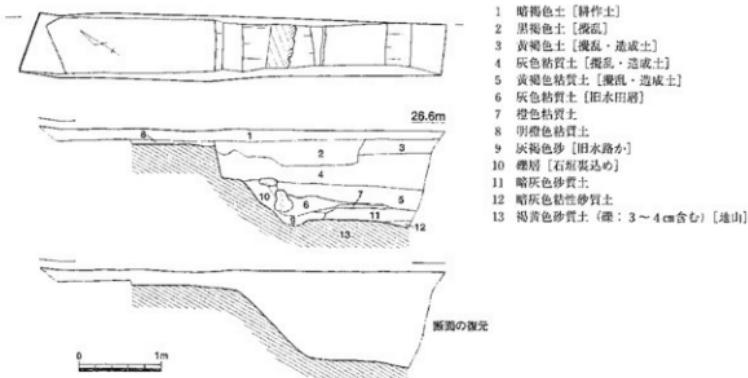
18) トレンチ2 (図55・46)

和田茶臼山古墳の墳丘南側に設定したトレンチである。

トレンチの北端部では地山を検出した。地山上面は緩やかに下降する。堆積層のうち4層は砂疊層で、江戸時代前半(140)・後半(139)の備前焼すり鉢が含まれる。その以下の7層は粘土層で、平安時代の瓦137、中世の瓦質羽釜138が含まれる。7層は内塗埋土の可能性もある。

19) 表採遺物 (図46)

墳丘周辺の畠・水田中には少量ながら土器片の散布が認められるが、多くは出土資料と同様、中世の遺物である。それ以外の表採遺物3点を図46中段に掲載しておく。須恵器杯133と同壺134は墳丘付



近くで以前に採集されたもので、133の外側調整はヘラケズリ、134の外側調整はカキメである。135はトレンチ26付近の窯で採集した須恵器高杯である。いずれも小破片で、古墳に伴うものかどうかについても判断しがたいが、135はTK23ないし47型式に位置付けられ、本墳の年代の一端を示す可能性がある。

2. 和田茶臼山古墳の調査

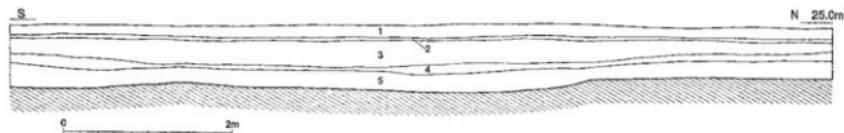


図54 トレンチ7 (1/60)

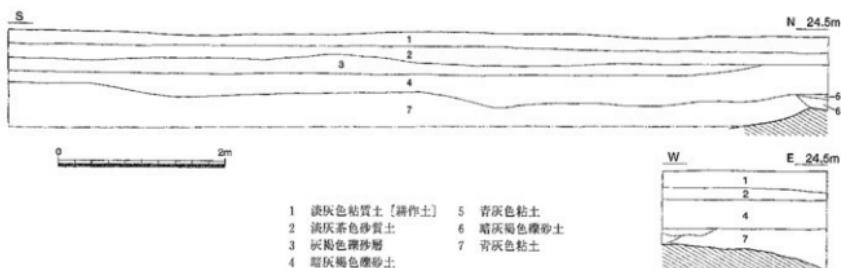


図55 トレンチ2 (1/60)

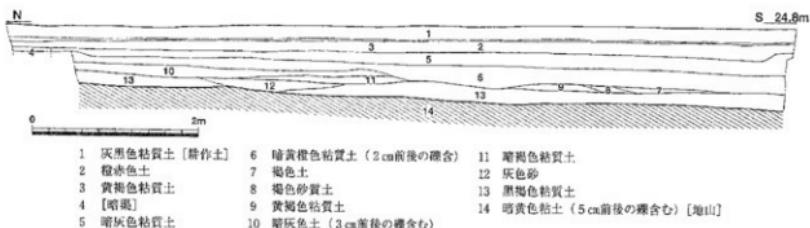
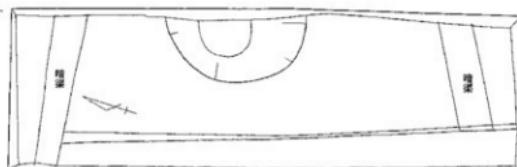


図56 トレンチ12 (1/60)



- 1 地灰褐色土〔耕作土〕
- 2 貫赤色砂質土
- 3 [暗闇]
- 4 明灰褐色粘質土
〔黒色トロック含む〕〔造成土か〕
- 5 黒褐色砂礫
- 6 暗黃褐色粘性砂質土
〔2~5cmの礫含む〕
- 7 灰黑色粘土〔土坑1〕
- 8 灰黑色シルト〔土坑1〕
- 9 暗褐色砂礫
- 10 暗灰色粘性砂質土〔3cm大的礫含む〕
- 11 黑褐色粘性砂質土
- 12 灰色砂礫〔礫：1cm前後〕
- 13 黄灰色粘質土〔地山上部〕
- 14 暗灰色砂礫〔礫：5~10cm〕
- 15 黄色粘質土
〔1cm以下の礫含む〕〔地山上部〕
- 16 黄色粘質土
〔5cm以下の礫含む〕〔地山下部〕

図57 トレンチ11 (1/60)



図58 トレンチ11・12出土遺物 (1/4)

(2) 和田茶臼山古墳東側

1) トレンチ12 (図56・58)

トレンチ11の北側に設定したトレンチであるが、造構は認められなかった。基盤層上に黒褐色土(13層)が広がる。この層からは弥生時代後期前葉の甕145が出土したが小片であり、必ずしもこの層の形成時期を示すものではないと思われる。6層は中世の遺物をわずかに含んでいる。

トレンチ11で検出した中世の遺跡はこの付近には及んでいない可能性が強いと思われる。

2) トレンチ11 (図57・58)

両宮山古墳東部の様相を確認するため設定した長さ6m、幅2mのトレンチである。

古墳時代の造構は認められず、中世の土坑1基を検出した。

中世の造構面は地表下35~50cmの暗灰色土(9・10層)で、基盤層はそれよりも15cm前後下である。土坑は、長径175cm、深さ47cmを測り、灰黑色土(7・8層)が堆積している。青磁焼の小片を伴っており、鎌倉時代の造構である。トレンチ内では明確な包含層は認められなかった。2~6層から中世の遺物が若干(141~144)出土しており、周辺にも包含層ないし造構が所在するとみられる。

中世の遺跡がこのトレンチ付近に広がっていることが明らかになったわけであり、この遺跡からの遺物がトレンチ10の外濠内に流れ込んだとみてよい。なお、基盤層14層は地形が高くなる北側にむかって逆に下降しており、埋没河道が所在するとみられる。

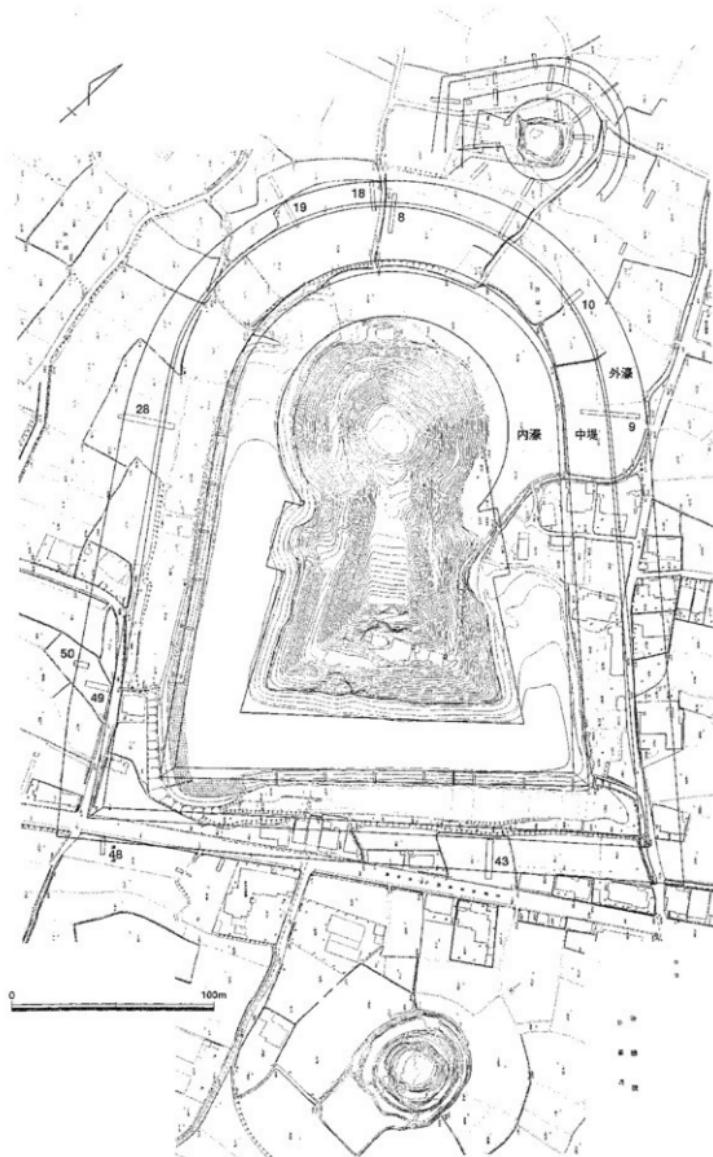


図59 墓丘の復元（1）(1/2,500)

第5章 総括

1. 調査の成果

調査は必ずしも大規模なものではなかったが、多くの知見が得られ、本墳が実に多くの情報を内包することを明らかにできたと言える。以下では成果をとりまとめ、両宮山古墳および和田茶臼山古墳の概要を提示してまとめにかえる。

(1) 築造時期

出土遺物のうち本墳に伴うのは盛土中から流出したとみられる土師器で、それらは古墳時代中期という以上に時期を限定できるものではなかったため、本墳の築造年代を絞り込むことはできなかった。墳丘測量報告（前掲宇垣2004）において述べたように、両宮山古墳の前面に後続して築かれたとみられる森山古墳の埴輪の年代から、両宮山古墳の築造年代は5世紀後半・集成7期の新しい段階と考える。また、和田茶臼山古墳については、表掲の高杯135の年代はそれよりもやや新しいが、後述の外濠の共有から主墳の両宮山古墳と同時期の築造と判断する。

(2) 墳丘と外部施設

1) 墳丘（図59・62）

両宮山古墳の墳丘規模の確認は調査の主目的ではなかったが、水没している墳丘の測量およびピンポールでの探査を実施し、現状で認められる傾斜変換線に近い位置の地下約1.5mに傾斜変換が存在することが判明したため一応の復元が可能である。ただし、復元の手がかりとした堆積層下の傾斜変換は墳端そのものではなく、古い時期の内濠汀線である可能性が強い。図61-4に示すようにこれが本来の傾斜変換一墳端をおおむね示す可能性を考えているが、最終的には将来、調査によって確定する必要がある。

現在得られた情報から復元したのが図59・62である。墳丘主軸N44°W。墳丘全長206m、後円部径116m、前方部長さ110m、前方部幅145m、前方部高さ25.1mという数値を得ることができる。後円部高さは西裾部から23.9mである。

墳丘に関しての発掘調査は実施していないが、墳裾各所の断面や堆積土上面に礫・遺物は全く認められず、また、内濠の各トレンチにもそれが認められなかったことから、葺石・埴輪は伴わないと判断できる。

2) 中堤（図60・61）

規模 後円部後方は地山の削り出しによって、前方部前面は地山の削り出しと厚い盛土によって構築される。後円部後端側で上面幅28m・基部幅35m・外濠側からの高さ86cm、後円部南西側で上面幅26.5m・基部幅35m・高さ80cm、前方部前面で上面幅20m・基部幅32m・高さ29mと推定され、前方部前面でやや狭くなる。

盛土 盛土は後円部側面からはじまり、前方部側にむかって順次厚さを増す。後円部南西側面（トレンチ28、以下トレンチ略）の復元厚さ44cmに対し、前方部西側（34）で2.6mに達する。中堤下の地山は墳丘側面・前方部前面の両方とも南隅に向かって下降しており、南隅が最も厚い約3mの盛土によって構築されていたとみられる。

盛土は上下2層に大別することが可能で、下層盛土の上面には以前の調査で柱穴の存在が確認されており、今回、部分(32)によっては旧表土が形成されている可能性が強いことが判明した。盛土の色調や土質をもとに復元的に考えれば、以下の順序となる。

後円部の側面よりも南東の、堆積層からなる地山を掘削した土を用いて中堤の下部が構築され、若干の休止期間を置く。このとき前方部前面ではおそらく建物が構築される。その後、後円部北西側などの基盤層を掘削した土で上部が構築される(図60)。

この採土地点の相違は、濠の掘削工程、すなわち、低い側から掘削をはじめることに起因すると思われるが、中堤上部を基盤に由来する良好な土で固めるという理由もあったと推定される。

南西側面の中堤の内濠側(30~34)では上層・下層ともに盛土層が南にむかって大きく下降する形で、外側(28)ではほぼ水平に積まれていた。断面の延長が短いため確定はむずかしいが、地形が低くなる(図61-1)内濠側の側縁にそって堤状の盛土を行ったのち、内(中堤中心)側を埋めて平坦面を形成する手順(北條1990)が取られた可能性が強い。中堤構築におけるこの手法の採用は、古市古墳群の国府市野山古墳で認められる(一瀬1980)。

本墳の場合、堤状の盛土は地山が高い北西側から低いほうへ延ばしていったとみられる。また、内濠側の盛土が流出したため、堤状部分の内側半分ー内濠側にむかって盛土が下降する部位ーは失われたと考える。

後円部両側の(9・28)では中堤外側肩下方付近の地山を掘削して盛土を行った状況が認められた。(9)で幅2.2m、深さ40cm、(28)で幅68cm以上、深さ50cm以上と規模はかなり大きい。規模からすれば盛土端部の強化かと推定されるが、幅1.2m、深さ30cm前後とやや浅いものの、国府市野山古墳中堤においても本例と同様の位置に溝状の下がりが見られ(一瀬1980)、中堤の盛土作業に先だって割付のために溝が掘削され、それが中堤構築の際に埋められた可能性を考えておく。

築造後の改変 中堤上には古墳築造後に1.5~2.5mの厚さの盛土がなされている。この改変の年代を判断する手がかりは(40)出土の土師質小皿112・113しかないが、これは近世の遺物と推定した。また、外濠(19)においては埋没が進んで浅い沼状をなしていた濠の最上部が埋められて水田化するのが江戸時代前半であること、(28)においてもその時期に流路が埋没し、水田の形成がなされることが判明しており、江戸時代前半に古墳周辺の土地の農地利用が大規模に進められたとみられる。中堤上の大規模な盛土もそれと一連の造作であったとみてよいであろう。この盛土がなされる以前、前方部前面東側部分(40)付近は削平ないし流出によって幅25mにわたって上面が窪んだ形になっていたようで、その痕跡が中堤の上面外側に残ったとみられる。

なお、中堤南隅部分は高い堤となっており、中堤の他の部分とは異なる。内濠の底は中堤南隅付近が最も深く、そこから中堤に添う形でL字形に深みのがびており(図版1・2)、かつて、南隅角の堤が切れた形となり内濠から水が流れ出していた可能性が強い。この部分が閉じられて内濠が「復元」された時期は不明であるが、上記の状況からすればやはり江戸時代前半ではなかったかと思われる。

内濠の堆積土に含まれる中世の遺物は、(30)の遺物記載で述べたように、江戸時代の盛土内から流出した可能性を考えているが、その想定が正しいとすれば、中堤の各トレンチの堆積層には中世の遺物が含まれることから、堆積層下の内濠斜面形状と堆積層の形成は江戸時代以降であり、深い部分の2段の下がりはそれよりも古い時期に形成されたことになる。

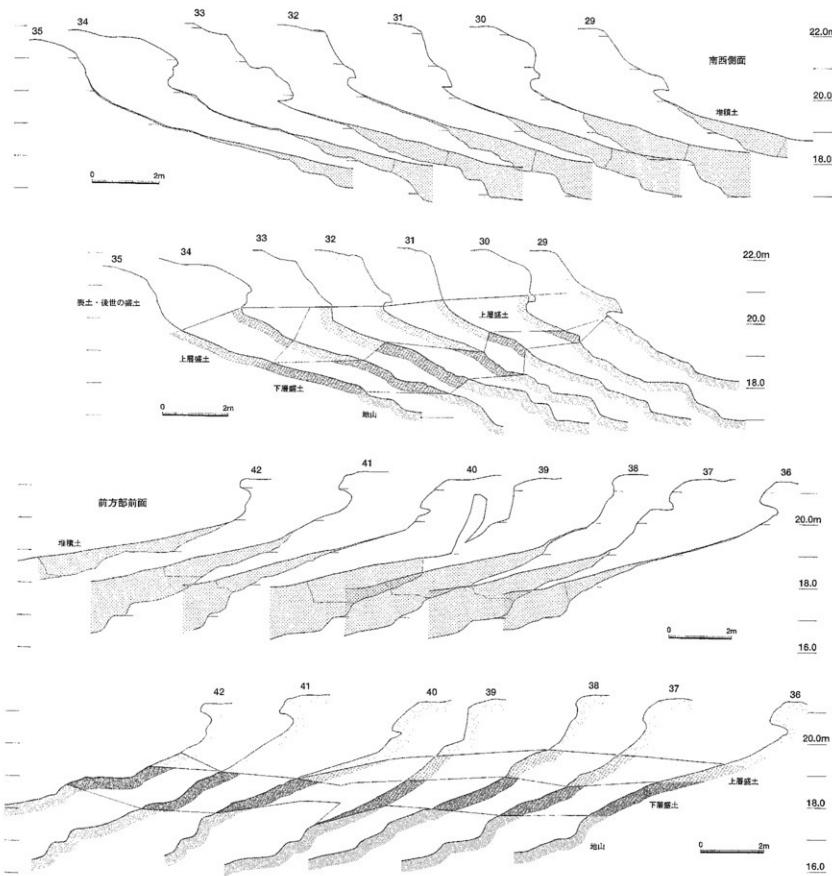


図60 中堤の構築状況 (1/120)

3) 外濠（図61）

規模 外濠は墳丘を全周しており、主軸線上での長さ（総長）348mで、前方部前面の長さは318mと推定される。前方部前面南隅（48）で検出した外濠外端の位置は、前方部前面（43）での検出位置と中堤肩の復元線をもとに想定した線よりも墳丘側に位置しており、外濠外端線が中堤外側基部と平行していない、つまり、外濠幅が一定ではなかったと推定される。これは、前方部南隅角の外側の地形が最も低くなるため外濠の幅を同じにとることが困難で、南入角の位置を墳丘側にずらせた結果、変形を生じたと推定される。

この部分以外でも外濠は幅および断面形が異なっており、この状況を整理しておく。

濠上面（中堤肩—外端） 幅はいずれも推定値となるが、後円部後端（18）で14m、その西（19）で13.7mと狭い。後円部北東側（9）で19.5m、（28）で20mとなる。さらに、中堤肩が高くなり上面幅と言いにくくなってくるが、前方部西側（49・50）が23m、前方部前面（43）で21mとなる。中堤斜面が長くなる部分が広くなることからすれば、中堤基部からの幅を19m前後についている可能性があるが、その推定が妥当かどうかは将来的調査によらざるをえない。そしてそれらの部分に対して、丘陵軸線にあたり広い掘削幅をとることが困難な後円部後端側と、地形が低くやはり広い掘削幅をとることがむずかしい前方部側南入角付近においては平面規模を縮小しているとみられる。

断面形 幅が狭くなる後円部後端においては濠は2段掘りで、内側から上段底面一下段底面という構成をなす。その下方側になる墳丘側面では、後円部北東側（9）が上段一下段一中段一上段の3段掘りとなるのに対し、後円部南西側（28）～前方部西側（49・50）は3段掘りではあるが中段底面から外端へは斜めに上がり、外側には上段底面をもたない。さらに前方部前面（43）では濠は浅くなり、上段一下段一上段の2段掘りになる。

また、下段底面の幅も一様ではなく、後円部付近では狭く前方部側では広くなる。

以上のように断面形は大きく変化する。後端側の形状は、濠幅が狭いため外側に設けるべき中段底面を省略したものとみることができ、その理解にもとづけば、断面の基本形はトレーナー9にみられる上段一下段一中段一上段の3段掘りで、深さと幅に応じて設計を変更していると推定される。ただし、いずれの場合も変更は外側部分についてなされ、中堤基部の外側に上段底面をもち、その次に最も深い箇所＝下段底面を配するという構成は共通する。なお、多くの場合、外側斜面の傾斜は緩やかで、中堤側斜面の急勾配とは対照的である。

こうした設計によって、外濠は幅と深さの確保を図ったとみられる。外濠底面が最も高くなつて分水をなすのは（18）の東側とみられるが、主軸方向では後円部後端（18）底面の20.59mから前方部側南入角の推定15.0mまで下降しており、前方部前面では北東隅が南西隅よりも2.2m高くなると推定される。トレーナーのうち、滞水していた状況を示すのは後円部北側（10）と前方部西側（49）であり、前方部前面（43）は空壕状態であったと推定される。

後円部北側（10）での滞水からは、下方にある東側に渡り土手が存在しそれが水の流下を止めていたと推定される。奈良県ヒシアゲ古墳においては外濠の後円部東側部分に渡り土手が設けられていることが明らかになっている（小栗1993）が、それとほぼ同様の位置に所在する可能性がある。また、後端の西側部分（19）は、後端（18）と同じく丘陵を切断する部分でありながら底面は（18）よりも80cm低くなっている。あるいは水濠を形成するために外濠底が縦断方向で階段状に掘削され、各所に渡り土手が配されるとも考えられるが、これについてはさらに調査を重ねない限り検証はむずかしい。

1. 調査の成果

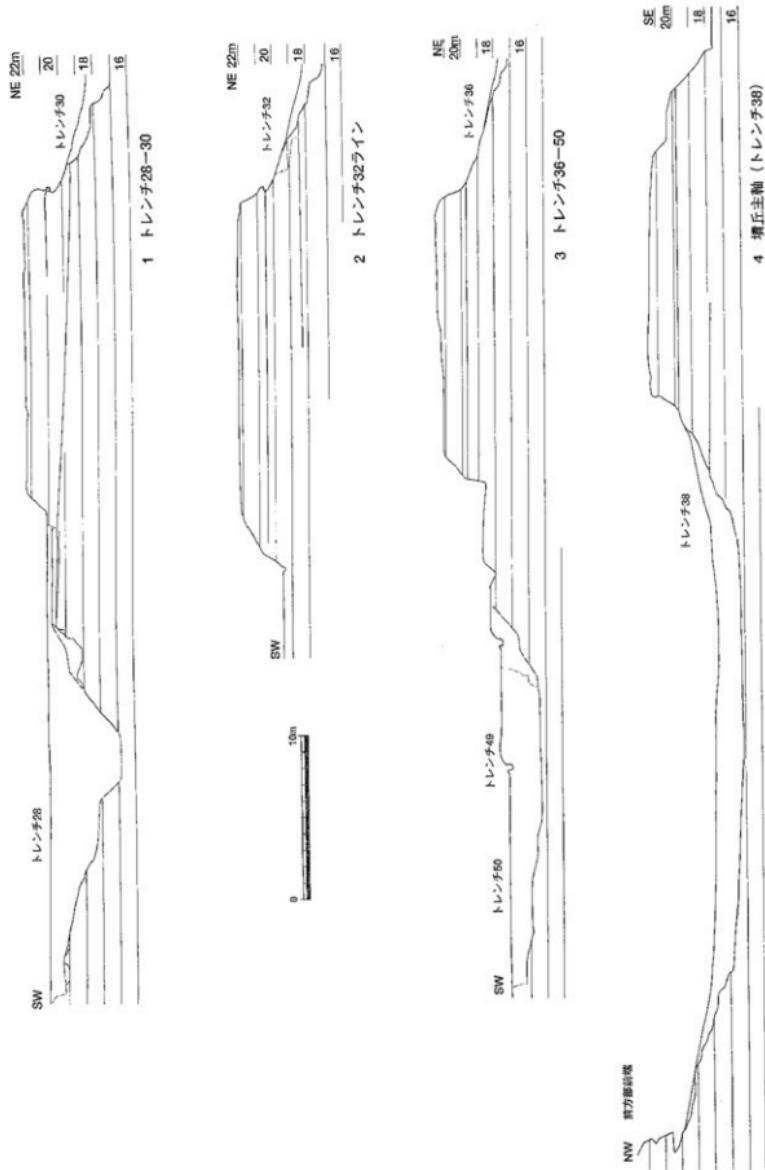
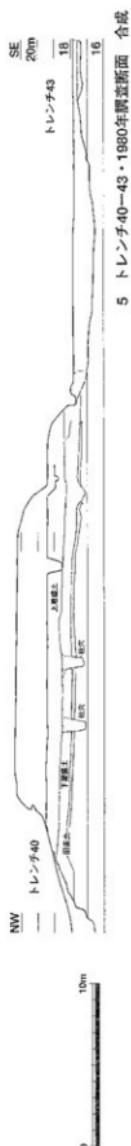


図61 中堤・外濠断面 (1/300)



外濠外側の堤—外堤の存在を示す状況は認められず、本来設けられていなかつたと推定する。

なお、外濠の堆積土に関しては各トレンチで記載したが、古代と判断される堆積層は黒色が強く礫の含有が少ないのでに対し、古代末～中世の遺物を含む堆積層は礫が目立って多くなり、その上部を中心にしばしば礫層が形成される。おそらく古代末以降、古墳の上方にあたる西～北側に集落が形成され、耕作地の拡大等によって扇状地上部の植生が変わっていったことを示すと推定される。

4) 内濠

前方部前面での内濠底面幅27.8mを測る。下部の傾斜変換から、前方部側で内濠底面の高さを16.5m、くびれ部側面で17.0mと推定すれば、(28)、(43)付近では内濠と外濠の深さは等しいが、後円部東側では内濠、前方部南隅付近では外濠の方が深くなる。

(3) 築造の規格

築造規格の問題は今後の課題とせざるをえず、ここでは要点を記すにとどめる。

ここで示した墳形復元では、前方部幅が相当広く、前方部頂の位置はかなり後円部寄りとなる。前方部が長い点は変わらないため誉田御廟山型築造規格には合致せず、大仙型築造規格（岸本1992）の範囲に収まると考える。

すでに指摘されているように大仙古墳は墳丘第1段が大きく水没しており、墳丘の崩れも著しい。墳丘の対比が容易でないが、前方部の段の位置や幅はおおむね合致する一方、後円部の段の位置などはやや相違があるように見受けられる。また、内濠や外濠に関しては、大仙古墳の濠は前方部側が広がらず細長い形状をとっており、これについては合致する点を見出しにくい。一方、大阪府百舌鳥古墳群の御廟山古墳は濠がかなり改変を受けているが墳丘側面の汀線が本来の形状を示すとすれば、内濠の幅はよく一致を示すことになり、外濠の長さ（総長）も推定で356mで（内本1994）両宮山古墳のそれに近い。さらに、陵墓園（前掲宇垣2004に引用）の濠内に破線で示された形状が墳端を反映したものであるなら、それはここで示した両宮山古墳墳丘復元案にかなり近いものとなる。また、2重周濠の復元が示された巨大古墳として奈良県ヒシアゲ古墳（小栗1998）がある。墳丘自体はヒシアゲ古墳の方が大きく、また、外濠の幅なども一致しないが、内濠の規模や形状がほぼ合致し、ヒシアゲ古墳の外堤線と両宮山古墳の外濠外端線がよく似た形状をとる。管見の範囲ではあるが、両宮山古墳の基本的な設計は、大仙古墳そのものではなく、大仙古墳の類型に属する巨大古墳のいずれかと共通する可能性が強いと思われ、とりわけ御廟山古墳がその第一の候補となるようである。

両宮山古墳の設計に関しては、後円部後方（28・19・18・8・10・9）の中堤肩および中堤基部が同じ中心点の弧の上にそろうのに対し、外端はそれ

1. 調査の成果

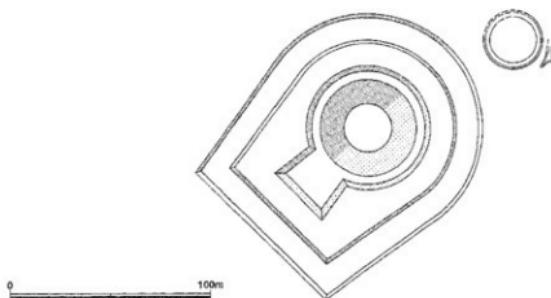
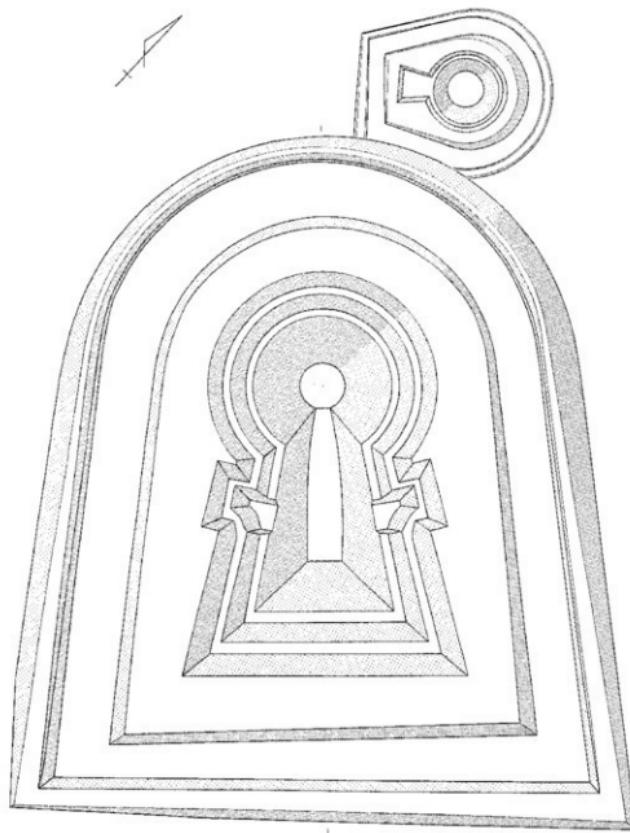


図62 墳丘の復元（2）（1/2,500）

とは異なるカーブをもち、図62では一定の弧線で示したが、下段底面の位置もややずれをもつ。したがって、中堤外肩・基部については中心点から割り付けを行っているとみられる。一方、濠の外端は中心点と半径を細かく変化させても割り付けは可能であり図59・62の該当部分もそうして描いたが、実際問題としては中堤外肩からの距離を段階的に変えていって現地に割り付けたと推定される。この中堤肩・基部の弧の中心点は後円部中心点の西5mに位置しており、地形の傾斜を考慮して移動させたとみられる。

中堤内側の割り付けは後円部中心点を用いたとみたほうが形状と整合する。また、前期古墳で見られる後円部上部の中心点の移動はないと考えられ、後円部第1段で水平面の確保がなされた（岸本1994）ようである。

(4) 和田茶臼山古墳

和田茶臼山古墳は2重周濠をもつ帆立貝形古墳であることが明らかになった。

墳丘主軸はN54°Wで、両宮山古墳墳丘主軸とはほぼ直交する。葺石・埴輪は伴わない。

後円部墳端の位置を確定できていないため後円部径は推定で41.5m、その場合、墳丘全長は55mとなる。前方部長さは15m、同幅19.5mである。

後円部の墳端は東側が低くなるとみられ、後円部高さは北西くびれ部墳端（21）から5.65m、東側（3）では7m以上となる。

前方部の高さは前縁（16）で1.16mを測るが、前方部上面は削られており北西くびれ部（21）の地山高を基準とすれば1.3mとなる。北西くびれ部と南東くびれ部の墳端の高さは等しく、そこからの墳端線はともに前方部前端にむかって下降するが、前方部前端が南に下がるため、南東辺が63cm下降するのに対し、北西辺での下降の値はそれよりも10cm程度小さくなるとみられる。

内濠は逆台形の断面形をなす。前方部前面では底面は水平であるが、前方部西側（15）では墳丘にむかって底面が傾斜する。深さは60~90cmであり、漏水していた状況は認められない。

中堤上面幅は8.0~8.5m、同基部幅は前方部付近では10.4m前後であるが後円部後端側においては13m前後に広がる可能性もある。前方部前面の中堤は（16）と（6）の間14mで40cm下降する。

外濠は後円部北西（23）で幅3.25mと狭く、後端・前端側では広くなり後端側で5.1mとなる。深さは35~45cmと浅い。底面は後円部北西（23）が最も高く、そこから北東・南西の両方向に低くなり、漏水していた状況は認められなかった。また、外濠の外側に外堤が所在していたとみるべき状況は認められなかった。外濠外端での総長は99mである。

両宮山古墳と和田茶臼山古墳の関係については両者の間に位置するトレンチ1・2において十分な成果が得られておらず、後円部東側での外濠の位置も確定していない。したがって、平面図にもとづく推定となるが、和田茶臼山古墳の外濠は両宮山古墳の外濠に接続し、和田茶臼山古墳の南側外濠には両宮山古墳のそれを共有する設計であったとみられる。

これに似た配置をとる随伴古墳の例として大仙古墳の2重めと3重めの濠の間に位置する2基の円墳・茶山古墳・大安寺山古墳がある。また、石津丘（ミサンザイ）古墳外濠に接する寺山南山古墳は濠が接続すると推定されており（柿沼ほか2002）、御廟山古墳に近接するカトンボ山古墳・国府市野山古墳に随伴する長持山古墳・唐種山古墳なども主墳の外濠との位置関係からすれば同様の可能性が考えられる。これらは濠を共有することによって主墳に対する近縁関係を表示していると考える。

2. 両宮山古墳群の意義

以上、外濠と中堤を中心に調査成果をまとめたが、両宮山古墳の外濠と中堤だけでも膨大な労働力が投入されたことが明らかである。大規模な中堤は内濠を同一水面の濠とするために設けられたと考えられ、外濠もそれが実現できなかつたにせよ、同じ企図があつた可能性が考えられる。

2重周濠の変遷と評価については別稿で論じることとするが、基本的には巨大古墳の格式として意義をもち、広大な兆域を形成するためのものであったと考える。それに加えて、本墳で見られた急角度をなす外濠斜面は、墓域への進入を拒絶するものであり、隔絶という祭祀的な側面も強く保持していた可能性が考えられる。

推定全長206mに達する両宮山古墳は、吉備の3大古墳の最後となる巨大古墳である。造山古墳(350m)・作山古墳(286m)の2基よりも墳丘規模は縮小するとはいえ、5世紀後半において畿内の西、中四国・九州で最大の墳丘規模をもつ。濠をもち墳丘規模が確定していない古墳が少くないなかでの数値の比較はあまり意味がないが、水面上の墳丘全長194mは全国第39位の規模であり、206mという数値が妥当となればその順位はさらに上位となるだろう。また、総長348mという規模は巨大古墳のなかでも大王墳をのぞけば有数の規模であることはうたがいいない。

前期以来、数多くの古墳が築かれ、ついに畿内よりも西側の地域で最大の大首長墳が築かれてきた吉備地域は、古墳時代研究に重要な位置を占めてきた。なかでも大王墳に匹敵する規模の墳丘をもつ造山古墳は古墳時代の地方と中央の関係を考察するうえで重要な手がかりとなる資料であるが、その評価はなお多様である。造山古墳は完周する濠はもたないともられ、続く作山古墳は濠がまったく存在しないとみてよい。そうした、大王墳とは異なる要素をもつ二者に対して、両宮山古墳は2重の周濠を採用し完全な「畿内型古墳」の姿をとることが明らかになった。このことは吉備の古墳時代史にとどまらず、古墳時代の首長間関係を考察する際の重要な資料となる。

また、埴輪・葺石の欠落は本墳の評価に関わる重要な問題であり、あるいは寿陵を論じる際の資料であるかもしれない。

このほか、両宮山古墳と和田茶臼山古墳の関係を推定できたことも大きな成果である。いわゆる陪塚は大首長のもとに構成された政治組織の様相を示す資料とみられるが、その詳細が明らかになっている例はきわめて少ない。本墳の場合、首長との関係を視覚的に表示していると考えられるに至ったわけであり、重要な情報を提示できたと言える。

得られた資料の更なる分析と広域な首長墳の動態のなかでの位置づけ作業、そして、良好に保存され重要な情報をもつ本墳の保護と活用が今後の大きな課題である。

文献

- 一瀬和夫1980 「允恭陵古墳外堤の調査—国府遺跡80-3区ー」大阪府教育委員会
- 内本勝彦1994 「御厨山古墳（周濠部）発掘調査概要報告」「堺市文化財調査概要報告」第44冊 堺市教育委員会
- 小栗明彦1993 「奈良市日葉酢媛陵古墳隣接地1次・日葉酢媛陵古墳隣接地2次・磐之媛陵古墳内堤発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報 1992年度」奈良県立橿原考古学研究所
- 小栗明彦1994 「奈良市磐之媛陵古墳後円部外濠発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報 1993年度」奈良県立橿原考古学研究所

- 柿沼葉穂ほか2002 「寺山南山古墳」『平成13年度国庫補助事業発掘調査報告書』堺市教育委員会
- 岸本直文1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号
- 岸本直文1994 「神明野古墳」『平城宮発掘調査報告』XIV 〈奈良国立文化財研究所40周年記念学報〉第51冊
奈良国立文化財 研究所
- 北條芳隆1990 「墳丘築成における土壙の意味」『鳥居前古墳 総括編』大阪大学考古学研究室

図 版



(東から)

図版1



1 両宮山古墳全景（南から）



2 墳丘（南から）



1 両宮山古墳群全景（西から）



2 墳丘（東から）



1 墳丘
(南西 備前国分寺跡から)



2 墳丘
(北 後円部後方から)



3 南西造り出し
(南 前方部から)



1 内濠（南東から）



2 中堤斜面
(前方部南西側) (南東から)



3 中堤上面
(後円部南西側) (北西から)



1 中堤斜面
(前方部前側) (北東から)



2 中堤 (前方部前側)
(外側 南西から)



3 中堤 (前方部前側)
(外側 南東から)



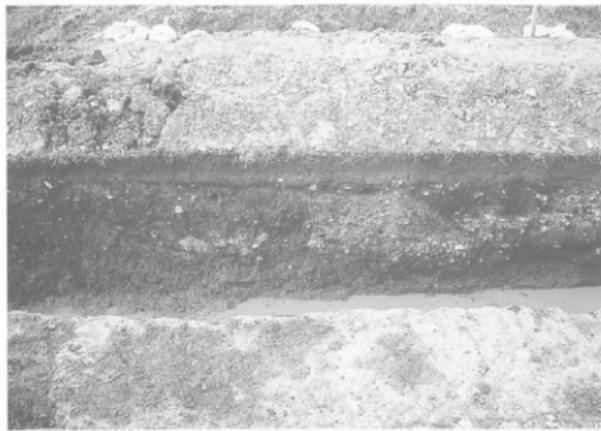
1 中堤・外濠跡
(後円部西外側) (北東から)



2 トレンチ8
外濠～中堤 (北西から)



3 トレンチ8
外濠 (西から)



1 トレンチ9
中堤盛土（南東から）



2 トレンチ9 外濠東部



3 トレンチ19
中堤～外濠上段底面
(西から)



1 トレンチ20 (墳丘側に19) (西から)



2 トレンチ19 外濠 (西から)



3 トレンチ19 外濠 (西から)



1 トレンチ18 外濠（南から）



2 トレンチ10 外濠（北東から）



1 トレンチ10 中堤～外濠（北から）



2 トレンチ10 発掘調査状況（北西から）



3 トレンチ43 外濠（南から）

図版11



1 トレンチ43
外濠（西 中堤から）



2 トレンチ43
外濠端部（西から）



3 トレンチ48
外濠（北から）



1 トレンチ49 外濠（後方に中堤）（南西から）



2 トレンチ50 外濠端部（東から）



1 トレンチ28 外濠



2 トレンチ28 中堤・外濠断面（東から）



1 トレンチ28
外濠断面（南から）



2 トレンチ28
外濠端部（東から）



3 トレンチ28
中堤断面（南から）

図版15



1 トレンチ32 中堤断面（東から）



2 トレンチ37 中堤（西から）



3 トレンチ38 中堤（西から）



4 51地点 中堤断面（北西から）



1 トレンチ30 中堤（東から）



2 トレンチ31 中堤（東から）



3 トレンチ34 中堤（東から）